

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌「リクシル・アイ」

no. 12 October 2016

- | | | | |
|----|---|------------|------------------|
| 特集 | 1 | 新・生き続ける建築 | 村野藤吾 |
| | 2 | 建築ソリューション | 私たちの家(現・小石川の住宅) |
| | 3 | まちづくりの今を見る | 地域資源を活かした観光まちづくり |



風景をデザインする 国内編

余剰で満たされた商業施設がつくる風景 | 東京都小金井市

JR中央線連続立体交差事業により生まれた高架下の遊休地を、地域に根差した小規模な店舗で構成される“地域の回遊拠点”として利活用した事例である。建物の高さを抑えることで歩道から反対側の空が見えるようにし、建物前面には店舗のあふれ出しを許容する路地空間を、敷地中央には大きな広場を配した。これらの“余剰”によって、高架下特有の薄暗い風景を更新することを試みた。高架下を室内のような一体感のある空間とするために、前面道路側を白いスチールフレームのファサードで覆っている。建具を拡大したような記号的なファサードにより、高架下に“入る”という行為を顕在化し、建物の入り口を外開き戸とすることで、白と黒の扉が向い合い、人の動きを予感させる路地空間をつくり出した。フレームによって切り取られた賑わいの“切断面”が約100mにわたって直線状に展開し、高層の建物がない郊外住宅地ならではの風景となることを期待している。

本計画は商業施設であるが、平面的・断面的にさまざまな“余剰”で満たされ、許容容積率の大部分を消化していない。あまり前例のない計画を実現させるにあたり、建築設計のみならず、企画・事業計画・リーシングなど総合的に関与してきた。小規模店舗エリアについては、我々がテナント代表としてサブリース契約を結ぶことで運営に関与できる体制を整え、地域を巻き込んだコミュニティ醸成の支援を行っている。このような取り組みにより、民間商業施設であっても、地域に根差す公共的な風景の創出が可能になると考えている。

古澤大輔

Daisuke Furusawa

プロジェクト概要

名称：中央線高架下プロジェクト(コミュニティステーション東小金井/モビリティステーション東小金井)

所在地：コミュニティステーション東小金井；東京都小金井市梶野町5、モビリティステーション東小金井；東京都小金井市緑町1

主要用途：物販店舗、飲食店

発注者：JR中央ラインモール

設計：リライト_D

敷地面積：コミュニティステーション東小金井：1,638.41m²、モビリティステーション東小金井：490.00m²

工期：2013.5-2014.10

ふるさわ・だいすけ——建築家・リライト_D代表・日本大学理工学部専任助教/1976年生まれ。2000年、東京都立大学(現・首都大学東京)工学部建築学科卒業。2002年、同大学大学院修了後、メジロスタジオ設立(共同主宰)。2008-12年、首都大学東京、明治大学大学院、東京理科大学大学院、日本大学にて非常勤講師を歴任。2013年、メジロスタジオをリライトデベロップメントへ組織改編(2016年、リライト_Dへ名称変更)。同年より日本大学理工学部専任助教。
主な作品：アーツ千代田3331 [2010]、十条の集合住宅[2016]など。



左—西側から見た外観。連なるフレームファサードが郊外住宅地ならではの風景をつくり出す | 右—白と黒の扉が向い合い、人の動きを予感させる路地空間
[提供2点とも：リライト_D]

CONTENTS

表紙写真：
私たちの家(現・小石川の住宅)
[撮影：フォワードストローク]

次号[LIXIL eye]no.13は、
2017年6月発行予定です。

[LIXIL eye]はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

- 02 [風景をデザインする 国内編]
余剰で満たされた商業施設がつくる風景 —— 古澤大輔

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 — 12**
村野藤吾

- 04 [本論] 村野藤吾の建築観 —— 長谷川 堯
08 [作品] 宇部市渡辺翁記念会館
千代田生命本社ビル(現・目黒区総合庁舎)
谷村美術館
14 [年譜] 略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション | 保存・再生・継承へ | — 12**
私たちの家(現・小石川の住宅)

- 22 [序論] 「平らな屋根のすまい」から「小石川の住宅」へ —— 植田 実
24 [鼎談] 新時代に挑戦した先駆者
日本のモダニズム住宅の代表格「私たちの家」を継承した「小石川の住宅」。
—— 安田幸一 | 白井克典 | 古谷誠章
37 [鼎談後記] 都市の貴重な住宅を、空間、精神ともに次世代に向けて継承する —— 古谷誠章

- 38 [ARTIST at HOME] — 12
フォルコラ作家、バオロ・ブランドリシオさんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 12**
地域資源を活かした観光まちづくり

- 44 [論考1] 2020年には“観光”を8兆円産業に —— 伊藤嘉規
46 [資料] 近年の訪日外国人旅行者の旅行動態
48 [論考2] “脱観光”的観光のススメ —— 井口 貢
50 [事例1] 飛騨地域に残る里山文化を活用したツーリズム —— クールな田舎創出への挑戦
52 [事例2] 明治の建築物を現代によみがえらせた美しいまち並み
—— 産業遺産を観光資源として活用する小坂町の取り組み
54 [事例3] 観光・学習・交流ができるミュージアム「TAKAO 599 MUSEUM」
—— 観光を人気スポットから周辺地域へと波及させていく
56 [事例4] 「ロボットの街つくば」で近未来のまちを体験 —— モビリティロボットの活用でシティプロモーションを図る

- 58 [素材を語る]
多機能というひとつのもの —— 谷尻 誠

- 60 [TOPICS]
「HOUSE VISION 2 2016 TOKYO EXHIBITION」にLIXILが出展
—— LIXIL HOUSE VISION 2016 プロジェクトチーム

- 64 [INFORMATION]
「LIXIL ビジネス情報サイト」のご案内
LIXILからのご案内 | ギャラリー+イベント | LIXIL 出版 新刊案内

- 68 [新・建築家の往復書簡] — 12
長谷川さんは、若い人々に何を望みますか？ どういう時代を期待しますか？
—— 西沢立衛 | 長谷川逸子

LIXIL eye no.12
2016年10月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：久保雅義
ジャパンマーケティング本部
セールスプロモーション統括部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3743
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきました

村野藤吾

Togo Murano

村野藤吾の長い建築家人生は、渡邊節との出会いに始まる。早稲田大学の卒業設計を見初められ、渡邊節建築事務所に入所。みるみる頭角を現し、大阪ビルディング本店や綿業会館など、渡邊の黄金時代を支え、活躍する。約15年在籍した後、村野建築事務所を開設した。渡邊事務所時代の人脈を活かし、百貨店建築やホテル建築、邸宅など華々しいスタートを切るが、第二次世界大戦の影響で仕事は激減した。戦後、村野の転機となったのが、世界平和記念聖堂の設計であった。しかし、この建築の設計者を決めるコンペティションによって、村野は建築界から多くのバッシングを受け、彼の建築家生命に多大な影響を与えることになったのである。村野の人生は波乱に満ちていた、という表現は妙に説得力があるが、天性の美的感覚と才能、そして何よりも強靱な健康体が、例えようもない幸せをもたらしていた。村野は93歳の最後の日まで事務所に出勤し、翌日の上京に備えて早々に退社。ホテルで夫人とディナーをとった後、途中、寒気におそわれたものの、難なく自邸に戻り、自分のベッドに入った。そしてそのまま永遠の眠りについたという。日本の建築家が一様に憧れる「最後まで現役…」をものに見事に地でいった建築家であった。今号は怒濤のごとく駆け抜けた村野藤吾の生涯を辿った。



【出典：「村野藤吾著作集 全一巻」村野藤吾著【鹿島出版会／2008】】

村野藤吾の建築観

長谷川 堯
Takashi Hasegawa

生い立ち

村野藤吾は“建築”と建築でない単なる“建てられたもの”の違いに鋭く反応し、“建築”をつくることにこだわり続けた建築家だ。そして形、空間、ディテール、装飾に心を配ることによって、建物を建築へ昇華させようとしてきた。彼の建築から、それがひしひしと伝わってくる。仮にここでは建てられたものを“建物”と呼ぶが、人がそれを見たり使用したりした時に、共感や反発など、もの以上の何かをそこから感じたとすれば、建物はものではなく建築になったと私は考える。村野は生涯、そこに一番こだわってきた。

村野は明治24年[1891]、佐賀県東松浦郡満島村(現・唐津市東唐津)に生まれ、明治43年[1910]、小倉工業学校機械科を卒業後、八幡製鉄所に入所した。明治44年[1911]、志願して軍隊に入り、対馬の陸軍砲兵隊に配属、2年間の軍務を終え除隊。軍隊時代に東京帝大法科出身の直属の上官から学問の重要性を教えられ、大学へ行くことを決心し、同じ佐賀県出身の大隈重信が設立した早稲田大学を選んだ。それが父親に認められ、大正3年[1914]、早稲田大学理工科予科に入学、電気科を専攻した。しかし、東京の建築についての見聞が広がるにつれて、徐々に建築に魅力を感じ、建築科への転科を希望するようになった。当時の予科長

で日本の先駆的な社会主義者の一人、安部磯雄に相談し、「一年間自在画をやれ」という助言を忠実に守って無事、転科した。学生時代の村野は最先端のデザインとして日本に入った“セセッション”に熱中した。例えば、機械販売会社のオフィスビルと倉庫として計画した「マシーン ショップ」と題する卒業設計は、その年の各大学、高等工業学校の建築科卒業生の優秀作品として建築雑誌に掲載される[1]など、デザイン力は群を抜いていた。その頃、鉄道省から独立し、わずか2年余りだった設計事務所の主宰者、渡邊節[2]に認められ、東京で決まっていた就職先を辞退し、村野は大正7年[1918]、卒業とともに大阪の渡邊節建築事務所に入所した。

渡邊節との出会い、そして「日本に於ける折衷主義建築の功禍」

渡邊節は村野藤吾に、「ツー・マッチ・モダンはいかん」、「売れる図面を描け」、「極端にモダンで斬新なデザインは駄目だ、施主が納得し喜ぶ図面を描いてくれ」と強硬に言い渡したので、学生時代をセセッションかぶれとして過ごした村野は、様式デザインは全く無知で、図面も描けないことを思い知らされ、当初、体重が10kgも減ったという。しかし、神戸海洋気象台コンペで1等に当選したことを機に、渡邊は村野のデザイン力を認め、渡邊が平面、構造、設備の骨格を決め、意匠を村野にすべて任せるようになった。こうして大阪商船KK神戸支店[1922]では意匠を担当させ、調査のためアメリカ出張を命じた。村野は、最新のアメリカの現代建築事情を視察したことで、施主の課題に正面から立ち向かうようになった。

渡邊事務所に正式に勤務した11年間、そして綿業会館[1931]を始め、“お礼奉公”をした3年間、計14年間。村野は「はじめ嫌で仕方のなかつたスタイリッシュ建築というものが私に非常に興味のあるやつてもやつても尽せないという感じ」[3]に変わってきたと語っている。様式に関連した種々のデザインを繰り広げ、日本興業銀行本店[1923]、大阪ビルディング本店[1925]など、渡邊事務所の黄金期の作品群に多大な貢献をした。

独立した村野は、大阪バンション[1931]や十合百貨店[1935]などの設計を通して、関西の近代建築運動におけるリーダーと目されるようになったが、他方で、昭和8年[1933]、ブルーノ・タウト来日を記念した新興建築講演会では、「日本に於ける折衷主義建築の功禍」[4]と題し、自身が渡邊のもとでやってきた様式建築のデザインを肯定する考え方を示した。「コンクリートに石を貼り付けた建物があり、それがローマのスタイルを真似て居るとして、新しい建築家は(中略)誤つて居ると申したと致します。(中略)果して其の建築はローマ風の建築なるが故に悪いと云ふことが言へるかどうか」とし、構造や設備の後進性は全くないにもかかわらず、上に着せた衣裳が過去の建築様式というだけで、非常な批判を被らなければならないのか、とモダニストたちに反論した。恐らく村野は、渡邊の「売れる図面を描け」という言葉から、建築家はつくり手(施主)と受け手(消費者)の間に立ち、両者の間を調整して双方が納得できるデザインをすることが建築をつくることであると確信し、この発言につながった。モダニストたちの“未来”の建築の実現のためには、つくり手も受け手も無視してやるべきだという考えを牽制した。

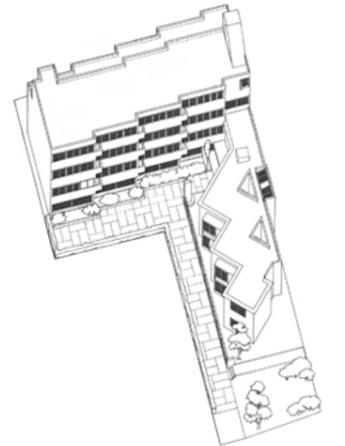
建築界からの冷やかな視線

戦後の村野藤吾の建築家生命に大きな影響を与えることになったのは、世界平和記念聖堂[1953]のコンペと“新建築問題”の2つによるところが大きいといっても過言ではない。

昭和23年[1948]に実施された広島の世界平和記念聖堂のコンペは、原爆で被災した旧聖堂を再建するもので、フーゴ・ラッサール神父から相談を受けた今井兼次が審査委員会を組織し、公開コンペとした。177点の応募があった中で画期的な案を出したのが、放物線を描くシェル構造による丹下健三だった。一部の審査委員の推すこの案に対し教会側の見解は、ブラジルの建築家、オスカー・ニーマイヤーが完成させたシェル構造のサン・フランシスコ礼拝堂がカトリック界から猛反発を受けていたことを念頭に、「丹下氏の案はまさしく秀れた創造的建築技術的な作品である。けれども(中略)実施することは不可能と思ふ」[5]として反対した。結局、1等当選者なし、2等丹下健三、井上一典、3等前川國男、菊竹清訓ほか2名という結果になった。最終的に、ラッサール神父や今井の強い薦めで村野が設計することになったが、コンペの審査委員だった村野が設計者になったことは、当然のことながら建築界から激しい非難



神戸海洋気象台コンペ1等案[1919年頃]
このコンペで1等当選したことにより、“セセッション”など近代的な意匠面で村野の実力を渡邊節が認めることになった。以後、渡邊は村野をチーフデザイナーの位置に置く【出典：「村野藤吾の建築 昭和・戦前」【鹿島出版会／2011】】



大阪バンション[1931]
住宅地かつ南北に長いU字形の狭い敷地に建てられた宿泊施設。図の上が北。西側のアプローチから東側に2階建ての宿泊棟、北側に4階建ての宿泊棟を配し、2つの宿泊棟が鉤(かぎ)型に接する部分に玄関とエントランスホールを置き、両者をつないでいる。南に伸びる低層部を鋸歯(きよし)状にして通風と採光を確保するなど、平面計画に巧みな解決法が見られる【出典：「村野藤吾作品集 1928-1963」村野藤吾著【新建築社／1983】】



十合(そごう)百貨店[1935]
奥に見えるヴォーリス建築事務所設計の大丸百貨店と比べても分かるように、それまでの日本の百貨店建築は西洋スタイルの重厚で装飾的なデザインが主流だった。それに対し、十合百貨店は上昇感を強調した縦筋状の細いルーバーが当時の百貨店建築としては際立っており、モダンな雰囲気大阪市民に披露した。村野は日本の先駆的な近代建築家と目されるようになった【出典：「村野藤吾の建築 昭和・戦前」】

[1] 「建築画報」1918.9
[2] 「INAX REPORT」No.188.2011.10、p04-参照
[3] 「鼎談：村野藤吾の設計態度」(村野藤吾×浦辺謙太郎×西澤文隆)「近代建築」1964.1
[4] 村野藤吾「日本に於ける折衷主義建築の功禍」『建築と社会』1933.6
[5] 「広島平和記念カトリック聖堂コンペに始まる」丹下健三「丹下健三・藤森照信著【新建築社／2002】」



世界平和記念聖堂【1953】
審査委員として、堀口捨己、吉田鉄郎、村野藤吾、今井兼次、フーゴ・ラッサール、グロッパ・イグナチオ（イエズス会建築家）、荻原晃（カトリック広島教区長）、後援の朝日新聞社から1名、計8名が選ばれ、コンペが行われた。しかし、1等当選者がなく不調に終わったことで、最終的には村野が設計者となった。RC造、地下1階、地上3階、全長52.5m、幅20m、高さ28m（ドーム含む）、塔高56m。ラーメン構造の柱・梁をコンクリート打放しとし、原爆の灰を被った土を混ぜた鉱滓（こうざい）レンガをあらわしのまま積み上げている。日本的性格と記念性を持った戦後広島復興建築として市民に親しまれている【重要文化財】[出典：FINAX REPORT No.168,2006.10]



読売会館（そごう百貨店）（現・ビックカメラ有楽町店）【1957】
西面は、商品に日が当たらないように、白大理石のテッセラを目地なしで張り詰め、その他の面は、溝型鋼とガラスブロックで構成。1、2階は全面ガラス張りとし、街に対して視覚的に開放感を与えている。ファサード性の強い作品として知られているが、店内にはエスカレータをX型にして中央に設けたり、出入り口にエアカーテンを使うなど、今では当たり前だが当時としては珍しい試みがあった【出典：村野藤吾作品集 1928-1963】

[6] 「読売会館—そごう百貨店」『新建築』1957.8
[7] 村野藤吾「光と肌理」『建築文化』1966.8

を浴びた。しかし、この建物はローマ法王を始め世界の多くの信者の寄付によって建てられるという性格を鑑みれば、戦後のモダニストたちによって未来の宗教建築はこうあるべきと、つくり手と受け手の上に立った提案によって建設されることに大きな問題があったのだ。そして、そうしたことを考えた上で、村野は設計を引き受けたとと思われる。仮に、丹下案が実現していたとしても、当時の日本の建設技術では、すでに壊れたか、壊されたかして、今はないだろう。竣工後、50年を経ても凛とした姿を見せる世界平和記念聖堂を目の当たりにすると、当時の村野の判断の正しさが分かってくる。

もう一つが“新建築問題”だ。昭和32年[1957]、東京・有楽町駅前の三角形の敷地に読売会館（そごう百貨店）（現・ビックカメラ有楽町店）が完成した。1階から6階を店舗、7階から9階をホールとし、外壁は白大理石とガラスブロックを積み上げ、内部も受け手に常に配慮する村野らしい装飾性の強いインテリアだった。同じ頃、現在の東京国際フォーラムの位置に、鉄骨鉄筋コンクリート造、地下2階、地上8階、スチールの庇と垂直ルーバーの執務空間をピロティで持ち上げた丹下健三の旧東京都庁舎が奇しくも建設中だった。当時の『新建築』は誌面上で、読売会館（そごう百貨店）は「外部の豊かさに比べて内部の貧しさ、また東京都庁舎との対比においてストラクチュアが感じられない」[6]と、読売会館（そごう百貨店）のいわば“前近代性”を指摘し、暗に批判した。その扱いに不満を持った村野が新建築社に連絡し、それを受けた吉岡保五郎が当時の編集部全員を解雇するという、いわゆる新建築問題が起こった。その時、解雇された編集者たちを支持するモダニズム側の建築家たちから、この解雇劇の“黒幕”として糾弾されたのが村野だった。結果的に見て、彼らが村野を批判したのは、つくり手と受け手の間に身を置いて、苦労して仕上げた村野のデザインは所詮、“前近代の未来性の全くないデザイン”で、そういう建築家は葬り去らねばならない、ということだったのだ。結局これは、村野は“建築”をつくらうとし、彼を批判した人たちは、近代建築は“建物”でいい、“建築”にする必要はない、という対立だった。村野からすれば、そこまで受け手を切り捨てていいのか、という思いがあったはずだ。

3 作品について

今回取り上げた1つ目の作品は、村野藤吾が独立後、初めて設計した公共建築、宇部市民館（現・渡辺翁記念会館）[1937]。宇部市発展の礎を築いた宇部興産の創設者・渡辺祐策の功績を記念し、彼の関係する7企業の寄付を得て建てられた。村野建築には珍しく、一見、マッシュでシンメトリカルな軸線構成になっているが、厳粛で陰鬱になりがちな公会堂のファサードデザインをロシア構成派から引用したと思われる量塊分解的な手法によって、グラフィックで軽快なファサードに仕上げることに成功している。さらに建築のマッシュさを軽減しているのが外壁のタイル。知多半島の常滑で焼かれた深い紫紺の艶のある肌理や窯変特有のテクスチャを持つタイルによって、重厚な中にも軽やかさが残る印象を与えている。1階エントランスは、山口県長門産の大理石を使い、マッシュルーム構造の柱や床を覆って印象的なインテリアを実現しており、居心地と音響の優れたオーデトリウムへそのまま入っていく動線は見事だ。

2作品目は戦後の代表作として知られる、昭和41年[1966]に完成した千代田生命本社ビル（現・目黒区総合庁舎）。1棟に集中させたオフィスビルとしてまとめるのではなく、東京・目黒の約5,000坪の広大な敷地に、高低差を活かして玄関棟・本館・別館、その間に中庭を配置して構成している。「建物のデザインは、千代田生命という特殊な会社の性格を考えて、光をはねかえす表現ではなく、重厚でいて光を吸収する、ほりの深い、そして表面に影を付ける」[7]外壁のために、アルキャストのルーバーを採用した。日本建築の格子を思わせるようなこのルーバーで建物を包み込むことによって、受け手の側の心を引き込み、“建築”へと昇華させる手法は絶好であり、読売会館（そごう百貨店）、日本生命日比谷ビル（日生劇場）[1963]に続く、村野のファサード・デザインの真骨頂が示された。なお、玄関キャンピー、1階エントランス、階段ホールへと続く、村野の空間文脈は絶妙だ。

3作品目は、村野の遺言とも言える谷村美術館[1983]。彫刻家・澤田政廣の木彫を中心とした作品を常設展示するための美術館で、新潟県糸魚川市で谷村建設を営む、澤田作品のコレクターだった谷村繁雄が建てた。村野と同じ日本芸術院会員として交流があった澤田本人の依



卒業設計「マシーン ショップ」【1918】
正面玄関のある建物の出隅部は、コーナーの先端部を垂直に切り落とした形にして、玄関から上階に続く塔状の階段室を配している。街路に面した1階部分は半円アーチのプレートガラスを連続させショーウィンドウにしているなど、明るく透明な“セセッション”特有の雰囲気が見られる【出典：『建築画報』1918.9】

頼で、村野が設計した。村野の事務所のスタッフはこの設計にはほとんどかわらず、村野が描いたスケッチをもとにつくった模型で谷村建設の設計者が図面化し、谷村建設が施工して実現した。谷村美術館は、アメリカ中西部のプエブロインディアンの街や建築をイメージしているという。これまで村野は、受け手に違和感や脅迫感を与えない建築を常々心掛けて設計してきたが、ここではそれをさらに越え、外観までも地面の砂の中にそのまま埋まってしまうような、靈廟とも呼べる、いわば“無言”の作品をつくった。内部空間は、世界平和記念聖堂の前部にあるチャペルや受洗室などの小空間と通ずるところがあり、小山敬三美術館[1975]や八ヶ岳美術館[1979]などの展示室の空間につながっている。こうした空間は、晩年に突如として出てきたものではなく、村野のイマジネーションの奥深いところにあったことは間違いない。

時流に乗るな、多数派になるな

日本建築学会は昭和47年[1972]、「永年にわたる優秀な建築の創作活動による建築界への貢献」として、村野藤吾に日本建築学会大賞を贈った。これを受けて村野は「時流に乗るな、多数派になるな、多数派に巻き込まれたら脱皮して、必ず少数派になれ、少数派とは孤独に耐えて自分をまもる努力がなければ、純潔は保てぬだろうし、そのようにしなければ芸と名のつく仕事はできないのではないか」[8]と『建築雑誌』に受賞の言葉を述べている。「時流に乗るな、多数派になるな」、つまりこれは、建築界における大勢に与して流されることなく、そこから離れて自分の思う道、信じる方向へ向かえという助言であるとともに、もっと直接的には、“われわれ”という多数派を振りかざして行動する“近代建築家”を目指さず、あくまでも“われ”を原点とした真の“建築家”を目指せ、という村野の若者たちへの鼓舞だったのだ。本当に求められているのは“未来”の近代建築ではなく、つくり手と受け手とを結ぶ“現在”の建築なのだという、いかにも“現在主義者”を自称する村野らしい、建築界への警告だったが、その後の日本の建築界は、彼のこの警告をほとんど無視してきたように思われてならないが、どうだろうか。 [談]

はせがわ・たかし——建築評論家・武蔵野美術大学名誉教授／1937年生まれ。1960年、早稲田大学第一文学部卒業。1977年、武蔵野美術大学に着任。以後、建築評論家として活躍。専門は近代建築史。
主な著書：『神殿が獄舎か』[相模書房／1972]、『建築 雌の視角』[相模書房／1973]、『都市回廊—あるいは建築の中世主義』[相模書房／1975]、『建築有情』[中央公論社／1977]、『建築の多感 長谷川堯建築家論考集』[鹿島出版会／2008]、『建築の出自 長谷川堯建築家論考集』[鹿島出版会／2008]、『村野藤吾の建築 昭和・戦前』[鹿島出版会／2011]など。

[8] 村野藤吾「受賞有感」『建築雑誌』1972.8

宇部市渡辺翁記念会館

竣工年：1937年
所在地：山口県宇部市朝日町8-1
構造・規模：鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造地下1階、地上4階
【重要文化財】



1 正面全景
中央の大理石の石壇は、渡辺祐策が宇部で最初に設立した沖ノ山炭鉱を、左右の計6本の列柱は、関連会社6社の貢献を記念している。モニュメンタルかつ、シンメトリカルな構成でありながら、紫紺色の窯変タイルによって威圧感や閉鎖性を軽減している

2 北東側から見おろす
車寄軒線、前面壁、主屋壁、屋階壁と階段状にセットバックしている。これは大型客船の通称・デッキハウスと呼ばれる部分に酷似している。村野は同

時期に、大阪商船アルゼンチナ丸やブラジル丸[いずれも1938]などの旅客船の客室やレストランのインテリアをデザインしていることから、その影響とも考えられる

3 2階ホワイエ
円柱には山口県長門産の赤橙色の石灰岩、長州オニックスが巻かれ、床は白と黒の市松模様で真鍮で目地割りされたテラゾー仕上げ

4 オーディトリウム
3回にわたる改修工事により、内部空間の様相は細かな部分で変化しているが、プロセニウムアーチの

中央部から2階席の奥まで南北に飛んでいる登り梯はほとんど変わっていない

5 1階エントランス
12本の円柱が2階ホワイエと同じように林立している。ロビーの円柱は山口県長門産の白色縞大理石で化粧されている。中央4本の円柱の柱頭部分には、装飾的な彩色リングが描かれ、特別な存在感を醸し出している



千代田生命本社ビル (現・目黒区総合庁舎)

竣工年：1966年
所在地：東京都目黒区上目黒2-19-15
構造・規模：本館：鉄骨鉄筋コンクリート造、
鉄筋コンクリート造地下3階、地上6階、
別館：鉄骨造地下3階、地上9階、玄関棟：鉄骨鉄筋コンクリート造



- 1 3階南口玄関
千代田生命保険会社の経営破綻によって目黒区が買い取り、2003年から目黒区総合庁舎として業務を開始した。駒沢通り沿いの正門から石畳のスロープを上ると姿を現す。庇は、玄関ホールから突き出しT字に分かれ、左右それぞれ不規則に並んだ8本の柱によって支えられている
- 2 本館2階の螺旋階段
“階段の魔術師”と呼ばれた村野の代表的な階段。鋼鉄製で、中央のアクリル製の照明器具（現在は点灯できない）が仕込まれた柱によって吊られている。本館2階から4階をつなぎ、総合庁舎のシンボリック存在となっている
- 3 しじゅうからの間
細い棧でデザインされた障子が特徴の8畳の和室。天井は簾と蔭（よし）で編まれ、その中に照明が埋め込まれている
- 4 玄関棟2階のテラスから見る
池を中心に左が本館、正面が別館、駐車場の下に和室が配されている。建物前面にはテラスを張り巡らせている。彫りの深いアルキャストのルーバーは、今なお地域に溶け込んでいる

谷村美術館

竣工年：1983年
所在地：新潟県糸魚川市京ヶ峰2-1-13
構造・規模：鉄筋コンクリート造平屋



- 1 アプローチから見る
切符売り場を過ぎると、和風を思わせる瓦を載せたやや背の高い塀が続く。外観を鑑賞しながら約50mの長い回廊を進み、美術館へと足を踏み入れる
- 2 展示室1
館内は6つの展示室で構成され、1つの展示室に1体の仏像を展示している。天井と壁が一体となり、人工照明を最小限に抑えて自然光を重視した空間は、胎内を思わせる
- 3 展示室をつなぐ廊下
曲線と曲面が織り成すアルコーブ状の展示室が並び、仏像がちらりと姿をのぞかせる。その神聖な雰囲気、胎内を思わせる
- 4 正面全景
地面にそのまま埋まるイメージの外観。村野は幾度となく糸魚川に足を運び、自ら石膏模型をつくった



略歴 Biography

明治24年[1891]	5月15日、佐賀県東松浦郡満島村(現・唐津市東唐津町)に生まれる	昭和4年[1929]	節建築事務所入所 村野建築事務所開設	昭和37年[1962]	日本建築家協会会長
明治43年[1910]	小倉工業学校機械科卒業。八幡製鉄所入所	昭和5年[1930]	建築研究のためアメリカ・ヨーロッパ外遊	昭和38年[1963]	英国王立建築学会名誉会員
明治44年[1911]	軍隊に入り、陸軍砲兵隊に配属(-大正2年)	昭和10年[1935]	ドイツ政府より赤十字名誉章	昭和42年[1967]	文化勲章受章
大正3年[1914]	早稲田大学理工科予科電気科入学	昭和24年[1949]	村野・森建築事務所に改称	昭和45年[1970]	アメリカ建築家協会名誉会員。パチカンより大型グレゴリウス騎士章受章
大正4年[1915]	早稲田大学理工科予科建築科に転科	昭和28年[1953]	建築研究のためアメリカ・ヨーロッパ外遊	昭和47年[1972]	日本建築学会大賞
大正7年[1918]	早稲田大学理工学部建築科卒業。渡邊	昭和30年[1955]	日本芸術院会員	昭和48年[1973]	早稲田大学名誉博士
		昭和33年[1958]	藍綬褒章受章	昭和59年[1984]	11月26日、逝去(93歳)
		昭和34年[1959]	日本建築家協会関西支部長		

主な作品 Works

●印は現存

昭和3年[1928]	●南大阪教会(大阪)	昭和35年[1960]	●宝塚ゴルフクラブ(兵庫) 指月亭(北川邸)(東京)	昭和47年[1972]	●箱根樹木園休息所(神奈川) ●高島屋東京支店別館(東京)
昭和6年[1931]	●合名会社森五商店東京支店(現・近江ビルディング)(東京) 神戸大丸倉庫の家(兵庫) 大阪マンション(大阪)	昭和37年[1962]	●関西大学第5学舎特別講堂(現・KUシンフォニーホール)(大阪) ●輸出織維会館(大阪) 早稲田大学文学部(東京) 出光興産九州支店(福岡)	昭和48年[1973]	●近鉄上六ターミナルビル第2期工事(大阪) 野村不動産港南台モデルハウス(神奈川) ●日本生命岡山駅前ビル(現・岡山高島屋)(岡山)
昭和7年[1932]	●加納合同銀行本店(現・北國銀行武蔵ヶ辻支店)(石川) ●紙卸商中島商店(石川)	昭和38年[1963]	●森田ビル(大阪) ●尼崎市庁舎(現・尼崎市庁舎南館)(兵庫)	昭和49年[1974]	●近鉄上六ターミナルビル第2期工事(大阪) 野村不動産港南台モデルハウス(神奈川) ●日本生命岡山駅前ビル(現・岡山高島屋)(岡山)
昭和10年[1935]	ドイツ文化研究所(京都) 十合(そごう)百貨店・茶室(大阪)	昭和39年[1964]	●関西大学体育館(現・千里山東体育館)(大阪) ●日本生命日比谷ビル(日生劇場)(東京) 名古屋都ホテル(愛知) 名神高速道路レストハウス(滋賀)	昭和50年[1975]	●迎賓館(旧赤坂離宮)改修工事(東京)【重要文化財】 西山記念会館(兵庫) ●小山敬三美術館(長野)
昭和11年[1936]	都ホテル(現・ウェスティン都ホテル京都)本館(京都)	昭和40年[1965]	●関西大学専門図書館(現・ITセンター)(大阪)	昭和51年[1976]	●甲南女子大学阿部記念図書館(兵庫) ●常陸宮邸(東京) ●なだ万山茶花荘(現・ホテルニューオータニ なだ万本店 山茶花荘)(東京)
昭和12年[1937]	大丸百貨店神戸支店(兵庫) ●宇部市民館(現・渡辺翁記念会館)(山口)【重要文化財】 比叡山ホテル(京都)	昭和41年[1966]	●甲南女子大学管理棟(兵庫) 愛知県森林公園センター(愛知)	昭和53年[1978]	●大阪ビルヂング麹町(現・麹町ダイビル)(東京) ●箱根プリンスホテル(現・ザ・プリンス箱根芦ノ湖本館)(神奈川)
昭和13年[1938]	大阪商船アルゼンチナ丸・ブラジル丸 ●大庄村役場(現・尼崎市立大庄公民館)(兵庫)【国登録有形文化財】	昭和42年[1967]	●泉州銀行府中支店(現・池田泉州銀行和泉支店)(大阪) 出光興産京都支店(京都) 浪花組東京支店(東京)	昭和54年[1979]	●都ホテル東京(現・シェラトン都ホテル東京)内装設計(東京) 松寿荘(東京) ●宇部市文化会館(山口) ●八ヶ岳美術館(長野)
昭和14年[1939]	都ホテル5号館・宴会場(京都) ●中山悦治氏邸(兵庫)	昭和43年[1968]	●甲南女子中・高等学校講堂(兵庫) 都ホテル新宴会場(現・山城の間)(京都)	昭和55年[1980]	●東京銀行東銀綜合ビル(兵庫) ●宝塚市庁舎(兵庫) ●紀尾井町南部ビル(東京)
昭和15年[1940]	中山央氏邸(兵庫)	昭和44年[1969]	●都ホテル11号館増築(現・南館)(京都) ●近鉄上本町ターミナルビル(大阪)	昭和57年[1982]	●新高輪プリンスホテル(現・グランドプリンスホテル高輪)(東京)
昭和16年[1941]	小林仁一郎氏邸(京都) 村野邸(兵庫)	昭和45年[1970]	●西宮トラピスチヌ修道院(兵庫) ●東京銀行大阪支店(大阪) ●高橋ビル本社(現・アールビル本館) ●帝国ホテル茶室(現・帝国ホテル東京東光庵)(東京)	昭和58年[1983]	●志摩観光ホテル宴会場増築(三重) ●宇部興産ビル(現・ANAクラウンプラザホテル宇部)(山口) ●谷村美術館(新潟)
昭和25年[1950]	名古屋丸栄ホテル付属劇場(愛知)	昭和46年[1971]	●八幡信用金庫本店(現・福岡ひびき信用金庫本店営業部)(福岡)	昭和59年[1984]	●志摩観光ホテル(現・ホテルニューオータニ なだ万本店 山茶花荘)(東京)
昭和26年[1951]	●志摩観光ホテル(現・志摩観光ホテルザクラシック)(三重) 関西大学大学ホール(大阪)			昭和60年[1985]	●新高輪プリンスホテル茶寮恵庵(東京) ●都ホテル大阪(現・シェラトン都ホテル大阪)(大阪) ●空閑東洋ゴルフ倶楽部クラブハウス(現・スターツ空閑ゴルフ倶楽部)(茨城)
昭和27年[1952]	●高島屋東京支店(日本生命東京総局)(現・日本橋高島屋)(東京)【重要文化財】			昭和61年[1986]	●京都室ヶ池プリンスホテル(現・グランドプリンスホテル京都)(京都) ●都ホテル新宴会場(現・西館)(京都)
昭和28年[1953]	●フジカワ画廊(現・フジカワビル)(大阪) ●世界平和記念聖堂(広島)【重要文化財】 ●丸栄百貨店増築(愛知)			昭和63年[1988]	●甲南女子大学芦原講堂
昭和30年[1955]	●関西大学円形図書館(現・簡文館)(大阪)【国登録有形文化財】 ●ドウトン(現・コムラードウトン)(大阪)			昭和64年[1989]	●三養荘(静岡)
昭和31年[1956]	神戸新聞会館(兵庫) 心齋橋プラザ(大阪)				
昭和32年[1957]	六甲学院体育館(兵庫) 近鉄百貨店(阿倍野店)増築(大阪) ●読売会館(そごう百貨店)(現・ビックカメラ有楽町店)(東京) ●富田屋(大阪)→湯豆腐 嵯峨野として移築(京都) ●村野邸増築(兵庫)				
昭和33年[1958]	新大阪ビル(大阪) ●米子市公会堂(鳥取) ●八幡市中央公民館(八幡市民会館)(福岡) 大阪新歌舞伎座(大阪) 妙心寺花園会館(京都)				
昭和34年[1959]	●横浜市庁舎(神奈川) ●泉州銀行本店(現・池田泉州銀行泉州営業所)(大阪)				

※この頁は、『村野藤吾作品集 1975-1988』村野藤吾著[村野藤吾作品集刊行委員会・新建築社編、新建築社/1991]をもとに、筆者と編集室が制作したものです。

取材協力：一般財団法人宇部市文化創造財団/ガーデン・ミュージアム運営協議会/目黒区おこたわり：08-13頁の作品名称のみ文化財指定名称とし、他は原則として竣工時の名称を使用しています

私たちの家

(現・小石川の住宅)

1956年、「平らな屋根のすまい」が文京区小石川に建った。周囲三方を住宅に囲まれた旗竿敷地に58m²の平屋。設計は林昌二・雅子の共同設計となっているが実際は昌二自身による。これが「私たちの家」の1期にあたる。

「平らな屋根のすまい」で約20年を暮らした後、いよいよ手狭になって増築に着手。しかし予定していた工法が建築基準法の改正で不可となり、旧知の構造家・温品鳳治氏の協力をもって難題を解決した。こうして誕生したのが「私たちの家」、1978年だった。三角形の台所と食堂、デッキ、屋根裏部屋、水浴室が新たに生まれ、矩形の小住宅は、238m²の開放的で豊かな空間を持つ住宅に変貌した。

建築家夫妻は晩年までの20年余をこの家で過ごしたが、2001年に雅子氏が、その10年後には昌二氏が病に倒れ、住まいは主を失った。数年間は空き家になり、庭も荒れ放題だった。しかし、昌二氏の大学の後輩であり日建設計の部下でもあった安田幸一氏がこの家を継承することになり、2013年、「小石川の住宅」が誕生した。「骨格(構造)」は元のまま活かし、時代に呼応して変わるべき「装備(仕上げ、設備)」は徹底的に見直した。しかし、林夫妻のスピリットは改修の後も厳然と息づいている。今は、新しい住まい手の色にも馴染んできた。「小石川の住宅」は「生き続ける日本モダニズム住宅」の代表格として、さらに未来に向かって歩み始めた。



平らな屋根のすまい(第1期)概要

所在地	東京都文京区
敷地面積	380m ²
建築面積	68m ²
延床面積	59m ²
構造	コンクリートブロック造、鉄筋コンクリート造
規模	地上1階
工期	1955-1956.4
設計	林昌二・雅子
構造設計	谷口圭一
設備設計	善井一三
施工	白石建設

私たちの家(第2期)概要

敷地面積	369m ²
建築面積	143m ²
延床面積	238m ²
構造	鉄筋コンクリート造、木造、コンクリートブロック造
規模	地上2階、塔屋1階
工期	1977.6-1978.8
設計	林昌二・雅子
構造設計	温品風治
設備設計	飯島静江
施工	白石建設

小石川の住宅(第3期)概要

敷地面積	369m ²
建築面積	143m ²
延床面積	238m ²
構造	鉄筋コンクリート造、木造、コンクリートブロック造
規模	地上2階、塔屋1階
工期	2013.6-8
改修設計	安田幸一
施工	栄建社



15頁—1階居間から食堂と台所外観を見る：台所は大きな1枚ガラスの窓。窓際のカウチに座ると、自宅の全貌がほぼ確認できる。また、食堂のキャスター付きの食卓をデッキまで引き出し、戸外気分の食事を楽しむことができる | 16-17頁—中庭から見る：家全体が庭に面し、特に1階の居間の開口を全開にすると、居間と庭が一体的になる。当初は単に屋根を載せるだけの増築計画だったが、建築基準法の改正により不可になった。そこで威力を発揮したのが構造家・温品鳳治氏。第1期のコンクリートブロック壁には手を付けず、木造三角屋根を片持ちとし、既存の躯体に荷重を掛けない方法で解決してみた。左側の三角屋根部分は台所、中央の階段を上ると予備室、納戸、水浴室、書斎、屋根裏部屋に至る。庭に面した2階部分は書斎、窓にはビル用のエルミンサッシュが入っている | 18-19頁—居間から中庭を見る：庭のデッキは腐食していたため、オリジナルを参考にベイスギで新設し、庭の芝生も土壌改良した後張り替えている。庭にはケヤキをはじめ50種類以上の植物が植えられているが、初期の目的は、周辺の家々との目隠し用だった | 20頁—入り口：入り口の扉は内開きでドアはチーク材。来客の様子が分かるようにドアの隣は開閉可能なガラス戸になっている。また、入り口を入ると居間に直結しているため、正面に目隠しを兼ねた飾り棚が置かれている | 20頁—食堂から台所を見る：台所の内装・家具・造作仕上げは全面的に改修されている。床はコルクボード、カウチはターコイズブルーの生地で張り替え、キッチンカウンターまわりは白を基調にした明るい雰囲気と揃えた | 21頁—2階屋根裏部屋：最初は別荘代わりに考えたとしている。片勾配天井の部屋は、下階に重量を掛けられない事情と隣家への日照を最優先して考案したもの。真っ赤に塗られた天井は、1階の印象とは全く異なる非日常空間を演出している。「小石川の住宅」への改修時、腰壁内にある空調設備を全面的に更新した。それに合わせて天井と同じロールベニヤを新規につくり、さらにオリジナルの赤を再現して腰壁周辺に塗装を施している





「平らな屋根のすまい」から「小石川の住宅」へ

イームズ邸^[1]はその後どうなっているのだろう。ロサンゼルスにあの住宅を訪ねたのは20年ほど前だったが、チャールズとレイの孫、イームズ・デメトリオスは管理者として悩んでいた。建築そのものは定期的に保全してきた。完成時と変わらないが、家の主たちはもういない。でも時を止めたら博物館になってしまう。自分が住めば“自分の家”にしてしまうだろう。祖父母が住んでいた、生きていた家のまますを残したい。不可能な夢にまだこだわっていた。見学者は受け入れるが屋内の撮影はご遠慮願っている。家具、什器、収集品などの一切は動かしていないが、もう違う家なのだから、と。その後またロサンゼルスあるいは東京で彼と会ったけれど、イームズ邸のその後の運営については、どうにも微妙で、聞きそびれてしまった。住宅において、“保存・再生・継承”は特に難しい課題である。各事例それぞれの条件、事情、考え方の振幅が微妙に異なる。客観化しにくい。建築そのものよりそこに生きた特定の人への記憶が優位に立つ。残された身のまわりの品々などは切実だが、生活との距離が近かった分、そこから切り離されて事物それ自体になったものは大きく変質してしまう。けれども設計と記憶を担う事物との方向がずれようが、それらを納めた建築が博物館になろうか記念館になろうか、残されている限り、より良い機会にいつか出合うはずだ。私たちの生活環境に不可欠な、住み続けられる距離が日々驚くほどの速さで奪われていく。例えば戦後初期という時代がそっくり消失しかねないほど。その中で保存・再生を批評性によって、すなわち翻訳ではなく自分の言葉で考え抜いた事例がここにある。

林昌二さんと雅子さんの自邸「平らな屋根のすまい」(第1期)^[1956]は、9年後に小さいが重要な増築(第1.5期)^[1965]を経て、「私たちの家」(第2期)^[1978]に変貌する。それから35年後、新しい住まい手となった安田幸一さんの改修設計による「小石川の住宅」^[2013]の現在に至る。第1期から60年近くがたっている^[2]。ここには個人の戸建て住宅における数回の増改築・改修のささやかな歴史があるにすぎないのに、どこか重大な事件の痕跡を追う気分がある。それは住宅の領域内に納まらない、あるいは住宅以外のスケールや方向が割り込んでくる一連の建築事例(といっても同じ建築なのだが)である。住まい手＝設計者による説明を始め多くの資料がある。この小文はそれらの資料が読まれていることを前提としている。例えば第2期の増改築については、ひとつは隣近所への配慮と自分たちの

場所の確保のために、複雑に交錯する視線と動線と方位の網目から切り出した平断面。もう一つは元のコンクリートブロックの壁を1978年現在の建築基準法の下でそっくり残すための、極めて特異な構造上の解決による躯体。この2点を重ね合わせた設計が、建築というよりは“住んでいく”地勢の、一分の隙もなく立体化した姿を見せている。

元のすまいのブロック壁は残された。これについても再三説明されている。心情的な理由だけでなく、全面取り壊しと新築の工事は周辺を騒がすことへの配慮にまで及ぶ説明である。そのブロック壁は東西、南北軸にそれぞれ3面ずつ整然と並ぶ。それは第1期を訪ねた際に強く意識された。第1.5期の住まいは訪ねる機会がなく凶面から想像するだけだが、水まわりと寝室の北側にベルト状平面の物置きと洋服入れを増設した時、林さんたちはきれいに完結した壁(それは清家清の「私の家」^[1954]の壁構成を連想させる。全体の輪郭が長方形であることも同じ)の中に生活が納まりきれない時代の到来を痛感したのではないか。その先に当然あるに違いないさらに大きな増改築の必要を予感した時に、最初の家の骨格を残す覚悟というか構想が、早くも準備されていた。そういう気がする。第2期で、確かにブロック壁は残された。平面図にそれは歴然としている。東側から見たセクションパースも2階のRC造と木造との取り合わせをダイナミックに描く一方、階下では残されたブロック壁の構成をよく伝えている。ところが実際にその前に立っても、見えない。ブロックは新しい仕上げ材でパッケージされているからだ。

建具はなく、壁だけが並置されている。その全体を新しい架構が覆っている。いわば鞘堂の構成である^[3]。一般的に、鞘堂に守られた元の建築は展示物の性格を帯びる。事物性が強化される。すなわち建築本来の力は削がれてしまう。鞘堂は入れ子の建築である。入れ子の構成は元・新の建築間だけに発生するわけではない。そのコンセプトの明快さは建築を直ちに決定付ける。同時にその明快さが単純化、さらには脆弱化を引き寄せかねない。伝えやすいコンセプトに安心してしまっている設計事例は少なくない。言い換えれば、その難所をクリアした建築の強さは無敵になる。

清家の「私の家」の屋根上に架け渡されたコンテナ(書庫)も、鞘堂に見える。まだ余裕のある敷地内だから、もっと穏やかなかたちで書庫を増設することもできたはずだが、歴史的存在である小さな住宅の頭上に、重量挙げのバーベルみたいにわざわざ持ってきている。



“原形”を枠取るための、奇想とも言える解決である。「私の家」の4年後に出現した菊竹清訓の「スカイハウス」^[1958]の現在も、頭上ではないが足元、しかも元・新の入れ子が反転して、ピロティが新しい部屋を抱き込むことで原形を際立たせている。「私たちの家」(第2期)で、第1期のブロック壁は単なる記録として弱められることを避けるかのように別の表層によって隠された。それ以上に壁が見えなくなったのは、私・公ゾーンの感触の変化、そして全く新たな視軸の介入による結果である。第1期の長方形平面は、東西方向に全長約13mが等分割され、東から西へ、入り口と仕事部屋・老人室、居間、水まわり・更衣室・台所・食堂(ここに東西のブロック壁3面が等間隔に立ち、南北軸の短いブロック壁も補助的に添えられてコアを形成)、最西端の寝室と、限られた面積の中で、北東隅から南西に雁行する場の伸びやかさは訪ねて来た客にも共有できたのである。つまり当時はまだ普通の家族が住んでいた。第2期では家族の生活に変化が生じている。また林昌二さんが端的に要約しているが、「普段はふたりの家族が、素泊りのホテルのように使うだけであって、一方、来客があると数千人」に対応することになり、「時としては家じゅうが仕事場になり、数時間後には家の半分ほどが台所になる」^[4]。でもそれはある階層社会の住宅で週末ごとに客を招いてパーティ、といった生活リズムとは違う気がする。ビバリーヒルズに、ある雑誌編集長の自邸を訪ねることがあったが、裏庭にはプール、テニスコート、バーベキューコーナー、銭湯ほどの大浴室と更衣室など、いかにも客に顔を向けた一揃いである。けれど住宅そのものは、当然スケールの差はあるものの日本と全く同じ4LDKで、かえってそのことに一番驚いた。つまり加算の構成である。それと対照的に、「私たちの家」に想像される、休息の閉じた静けさや客を迎える夕べはすべてを開いて

しまう徹底した転換は特殊に見える。住まい手がすでに的確に「素泊りのホテル」と例えている。生活そのものの中に日々の移動を重ねていく旅の心象が立ちこめている。何気なく、しかし粉れようもなくプランニングが精密機械のように構造化されていた。居間のソファから庭に扇形に広がる視軸は、逆に庭から家の中を透視する、その消点居間のソファであり、そのあまりにも厳密な設定が逆に、そこは実は住まいを抜けて外にあるかのような反転の視軸を引き出す。ルネサンス絵画などで部屋の窓の外にあって初めて可視化される、いわば背後の国の明るさに似ている。あるいは“別荘”と呼ばれる2階の書斎と屋根裏部屋の唐突で異質なスケールも同じ働きをしている。ブロック壁の処理のように直接的ではないが、すべてが住まいから“隠された家”へと誘惑されている。居場所などと呼ぶヒューマンで確かなレベルの空間ではなく、家は途方もなく小さく、ある時は巨大になるがまだ。それが見えにくいのは、住宅の設計は常に一般解を基本とし、立地や住まい手の個性はその一項にすぎない。そういう住宅観に慣れてしまっているからだ。

保存・再生・継承のテーマは、建築がこれから先に続いていくための最大のよりどころになるのは間違いない。いわば大思想によってではなく、発想と手法の底知れない豊富化を予感するからだ。それは言い換えれば、土地や人の個性が一般解の枠を外して不可避的に設計と結び付くことに他ならない。安田幸一さんの実に控えめな改修設計による第3期「小石川の住宅」は、第2期に劣らない、継承の作業の跡が歴然としている。そこに洗い出されたかのように出現したのは“住宅”である。最初に描かれた絵に違いない。イームズ邸と同じように生きられた家だったのだ。その作業の委細は安田さんが自ら話して下さるだろう。

うえだ まこと——編集者／1935年生まれ。早稲田大学文学部フランス文学専攻卒業。『建築』編集スタッフ、『都市住宅』編集長、『GA HOUSES』編集長などを経て、住まいの図書館出版局編集長。『住まい学大系1-103巻』などを刊行。主な著書：『集合住宅物語』[みすず書房／2004]、『都市住宅クロニクルI・II』[みすず書房／2007]、『住まいの手帖』[みすず書房／2011]、『真夜中の庭』[みすず書房／2011]、『いえ 団地 まち—公団住宅設計計画史(住まい学大系103)』[共編著、住まいの図書館出版局／2014]、『集合住宅30講』[みすず書房／2015]など。

「平らな屋根のすまい」(第1期)：南面を見る。左(西)から寝室、台所、食堂(壁の部分)、居間、老人室が並ぶ[写真：平山忠治]

[4] 林昌二「暮らしから住まいへ」『新建築』1981.2

筆者がかかわった補助的資料として「長生きする住まいの骨格」林雅子「建築家がつくる家① 構法で考える」[日本建築家協会編著、彰国社／1998] (筆者によるインタビューと構成)、「住居がデザインされてきた時代」林雅子「建築家 林雅子」[新建築社／2002] (後に、「住居がデザインされてきた時代—林雅子の「家」」として『都市住宅クロニクルII』[みすず書房／2007]に所収)

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した 先駆者



●ゲスト●
安田幸一
Koichi Yasuda
建築家(左)
白井克典
Katsunori Shirai
建築家(右)



●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家

日本のモダニズム住宅の 代表格「私たちの家」を 継承した「小石川の住宅」。

林雅子さんと白井さん 設計同人での20年

古谷 | このシリーズは今回で12回目です。戦後の日本の近代建築の中で時代を画するような建築物を取り上げて、当時のことをよくご存じのお親しい方々にお話を伺う企画です。東京タワーから始まりまして、丹下(健三)さんの香川県庁舎、菊竹(清訓)さんの都城市民会館、坂倉(準三)さんの新宿西口の駅前広場、谷口(吉郎)さんの秩父セメント第二工場と続きまして、霞が関ビル…という具合です。いわゆる日本の戦後復興の中で技術的なことに力を注いで、技術立国を牽引してきた面がかなりあったと思います。しかし一方では、文化としての日本のアイデンティティを取り戻すようなことも同時に行なわれていたわけですね。例えば、吉田(五十八)さんの東京の五島美術館とか、前号の松村(正恒)さんの四国の日土小学校になりますと、技術的な側面もさることながら、人々の心の成長とか、平和の中での文化の発展を志すものもあった。これまで住宅は取り上げる機会がなかったのですが、今回、このシリーズの締めくくりとして、林昌二さん、雅子さん設計の「平らな屋根のすまい」、「私たちの家」、そして現在の「小石川の住宅」に至る変遷を取り上げさせていただきます。戦後の時代の中で、夫婦の生活の拠点として生まれた「私たちの家」は、その後の日本人の現代生活のひとつの礎になっていたのではないかと。そう思っていて、今日は所縁の深い白井克典さん、安田幸一さんにお集まりいただき、そして安田さんのご好意で「私たちの家」、現「小石川の住宅」の居間でお話を伺っております。

では、おふたりとのかかわり、最初に接した頃の思い出からお聞かせいただきたいです。その前に、この鼎談は林昌二、雅子両先生のお話を中心に進むと思いますが、呼び方が混乱しないように「昌二さん」、「雅子さん」に統一させていただきます。では白井さんからお願いします。

白井 | 私は1980年に林・山田・中原設計同人に入ったのですが、実は私の大学には、雅子さんと東工大の清家研究室で一緒だった宮坂修吉先生がいらっしやまして、雅子さんが宮坂先生に「誰かいないかな」と話されたことがきっかけで学校に求人を出した。そして私が学校から受験を勧められたわけですね。まず図面を描く試験がありまして、その後、面接でした。たぶん20人くらいの応募者があって、たまたま私が入ることになりました。「私たちの家」は、私が事務所に入る前々年に出来たのですが、実際に、この家を訪れたのは雅子さんが1981年に学会賞を受賞した時で、建築家の皆さんがお集まりになってパーティをやりました。

古谷 | そうでしたか。雅子さんの学会賞は「一連の住宅」が対象でしたけど、この家は入っていた？

白井 | 入っていないです。

古谷 | 「平らな屋根のすまい」は？

白井 | 入っていませんでしたが、大きく影響したことは間違いないと思います。

古谷 | ちなみに白井さんはそもそも住宅に関心をお持ちだったと思いますが、1980年頃に住宅を志されたんですね。なかでも雅子さんのところへ行きたいと思われた動機は何かあったんですか？

白井 | どうしても行きたいというよりも、ちょっと迷っているところでした。いろいろな住宅の設計をしたいと思っている時期にご縁を頂いて、結局は雅子さんが亡くなって、設計同人を閉鎖する2002年までおりました。私はやればやるほど雅子さんの設計の深さ、うまさにかきかかれて、ずっと雅子さんに付いていったわけです。

古谷 | ずいぶん前の話ですが、雅子さんが、「いつも人数は7人に決めている…」と何かか書いてありました。当時は何人いらっしやいました？

白井 | やっぱ7人です。

古谷 | ポスの3人の他に4人ですか？

白井 | そういことですか。スタッフは4人です。

古谷 | 事務所の中で、先生方は個々に独立して仕事をされていたことはつとに有名ですが、その中で雅子さんはどういう存在でしたか？

白井 | その時期は雅子さんだけでなく、山田(初江)先生、中原(暢子)先生がそれぞれに仕事をして、すごく乗っておられました。スタッフ4人は仕事ごとに先生に付くわけですね。私も、林、山田、中原、3人それぞれの作品を担当したことがあります。一応の共通点はありますが、3人とも描き方が微妙に違うんですよ。

古谷 | そうでしょうね。ところで雅子さんとはどんなプロジェクトを担当されたんですか？

白井 | 全部で30作品は担当したと思いますが、最初は「音楽室のある家」、その後「段床の家」とかいろいろです。入社して4年後の群馬県川場村の「世田谷区民健康村(ふじやまビレジ)」という施設辺りでは、かなり任せられるようになりまして、雅子さんの信用も得たと思います。

古谷 | なるほど、すでに片腕になられた感じですね。

白井 | はい。私もかなり自信が付きまして、まだまだ雅子さんに学ばなきゃいけないとも思っていました。

古谷 | 雅子さんとはもちろん師弟のご関係ですけど、昌二さんとは接点があったんですか？

白井 | ありました。おふたりはものすごく夫婦仲が良くて、どこに行くにも一緒なんです。事務所で旅行をする時も、何かのパーティの時も、昌二さんが合流される。そういうことはよくありました。雅子さんとスタッフが事務所まで遅くまで仕事をしていると、昌二さんが差し入れしてくれたりとか、作品を見学させていただいて意見をもらうとか、何かとかかわりは深かったです。

林昌二さんと安田さん

ナマ林昌二との出会い

古谷 | 安田さんが、そもそも東工大に入られたのは？



林夫妻、1990年頃の香港旅行にて[所蔵：林雅子資料室]
林昌二(右)
1928年、東京都に生まれる。1953年、東京工業大学(旧制)建築学科卒業。同年、日建設計工務(現・日建設計)入社。取締役副社長、副会長、名誉顧問。2011年、逝去(83歳)
林雅子(左)
1928年、北海道に生まれる。1951年、日本女子大学家政学部生活芸術科住居専攻卒業。1951-56年、東京工業大学建築系研究生。1958年、山田初江、中原暢子と共に、林・山田・中原設計同人設立。2001年、逝去(72歳)

安田 | 長い話になるんですが、清家清先生のコマースシャルなんですよ。

古谷 | “違いがわかる男”ですね。

安田 | そのコマースシャルにHPシエルの「保土ヶ谷の家」の模型が写っていて、清家先生が製図板に向かって図面を描いていました。これは面白そうだと思うのがきっかけで、清家先生が東工大にいることも分かって受験しました。そして2年生の時は清家先生に習ったのですが、3年になると定年で退官なさった。同じ頃、神田の古本屋で『SD』の特集号『日建設計・林グループの軌跡』[1]を見たら、ポーラ五反田ビルが出ていて、すごい建築だと思った。早速、見に行つて、外から見ただけですが感銘を受けました。大学2年だったと思いますが、ダイナミックな建築にすごく憧れがあったんですね。一方、住宅に対しては、実はその後、清家先生の弟子である篠原一男先生の研究室に入って、住宅の奥深さをまざまざと感じたわけです。篠原先生を研究していますと、当然、清家先生の「森博士の家」、「齋藤助教授の家」、「私の家」という一連の住宅につながって、住宅建築の大きな流れがひしひしと伝わってくるわけです。そしてそのまま住宅建築をやるべきか、少し違う世界にいくか…と悩んだのですが、たまたま昌二さんと篠原先生は清家研究室の同級生であることや、古本屋で見た『SD』の特集号の人が昌二さんであることも分かりました。そんな時に、セントラル硝子の“メディテーションチャペル”というコンペがありまして、それに応募したら佳作に入って、会場でナマ林昌二にお会いしてお話をしたんですよ。僕の案は「メディテーションできる外部空間がまちのあちこちにちりばめられてもいいんじゃないか」というものでした。お地蔵さんのイメージで小さな“教会型”の実物大模型をベニヤでつくりまして、ストライプに塗装して、それを東京の名所に持って行って写真を撮った。実は全然意識していなかったのですが、昌二さん設計の三愛ビルの前とかパレスサイドの前でも撮っていたんです。昌二さんがそれを評して「建築には品が必要だよ、君」と言われましてね(笑)、「そうか」と思った。その時、この人と一緒に仕事をしてみたいと思って日建を受けました。

古谷 | なるほど、なるほど。

安田 | それが1983年です。日建の新入社員はその頃、年に10人くらいでしたが、夕方「私たちの家」に集まって、暖炉に火をつけて一緒に食事をする。“建築家の居住まいとは何か”を昌二さんに教わるのが教育の一環だったんです。ですから、ちょうど33年前に初めてこの家の体験をしたことになりました。もともとの58㎡の住宅「平らな屋根のすまい」は、1956年に出来ている。清家先生の「私の家」が出来た直後で、篠原先生の最初の作品もほとんど同時期なんです。

古谷 | 安田さんは、清家先生の「私の家」もご存じですよ。 「私たちの家」と相通ずるものは何かありますか。

安田 | 郊外型住宅でしょうか。昔は雪ヶ谷も小石川

も、ある程度、土地が大きい住宅地でした。そこに58㎡という住宅金融公庫の融資条件に沿って家を建てた。そういう時代に、四角い箱の中で何ができるか。要するに58㎡という非常に小さな面積の中で、またフラットルーフで、どこまで追求できるかというテーマを、少ない選択肢の中から模索していた時代だと思っんです。

古谷 | なるほどね。ところで、昌二さんは『住宅建築』の座談会[2]だったと思いますが、清家先生の「私の家」は入り口がどこにあるのか分からない。敷地の中を歩いていると、何となくそのまま家に入っちゃるところがあるとおっしゃっている。ご自分のうちも最初は玄関がどこか分からないような家で、ご自身でもそういう共通項を感じていらっしゃるらしいです。また別の座談会では、雅子さんも清家研究室で学んだり、身に付けたやり方の影響が大きかったとおっしゃっている。

安田 | 清家先生と昌二さんは親しいご関係でした。清家先生は助教授になった直後で、昌二さんの年齢も実はそんなには離れていなくて、兄貴分のような存在だったと聞いています。

古谷 | 日頃、事務所で雅子さんは清家先生のお話などはなさっていましたか。

白井 | いやいや、そういう話はしませんが、作品を見てると実にしっかりと受け継いでいる感じはしますね。玄関という言葉も嫌っていました、亡くなるまで“入り口”でした。

古谷 | 玄関と言わずに入り口という感覚は何でしょうね。

白井 | 玄関という特別に構えた空間は必要ないと考えていたと思います。居間にスツとそのまま入っていく。居間の一部という感じですね。

第1期「平らな屋根のすまい」誕生

すでに増築の可能性を…

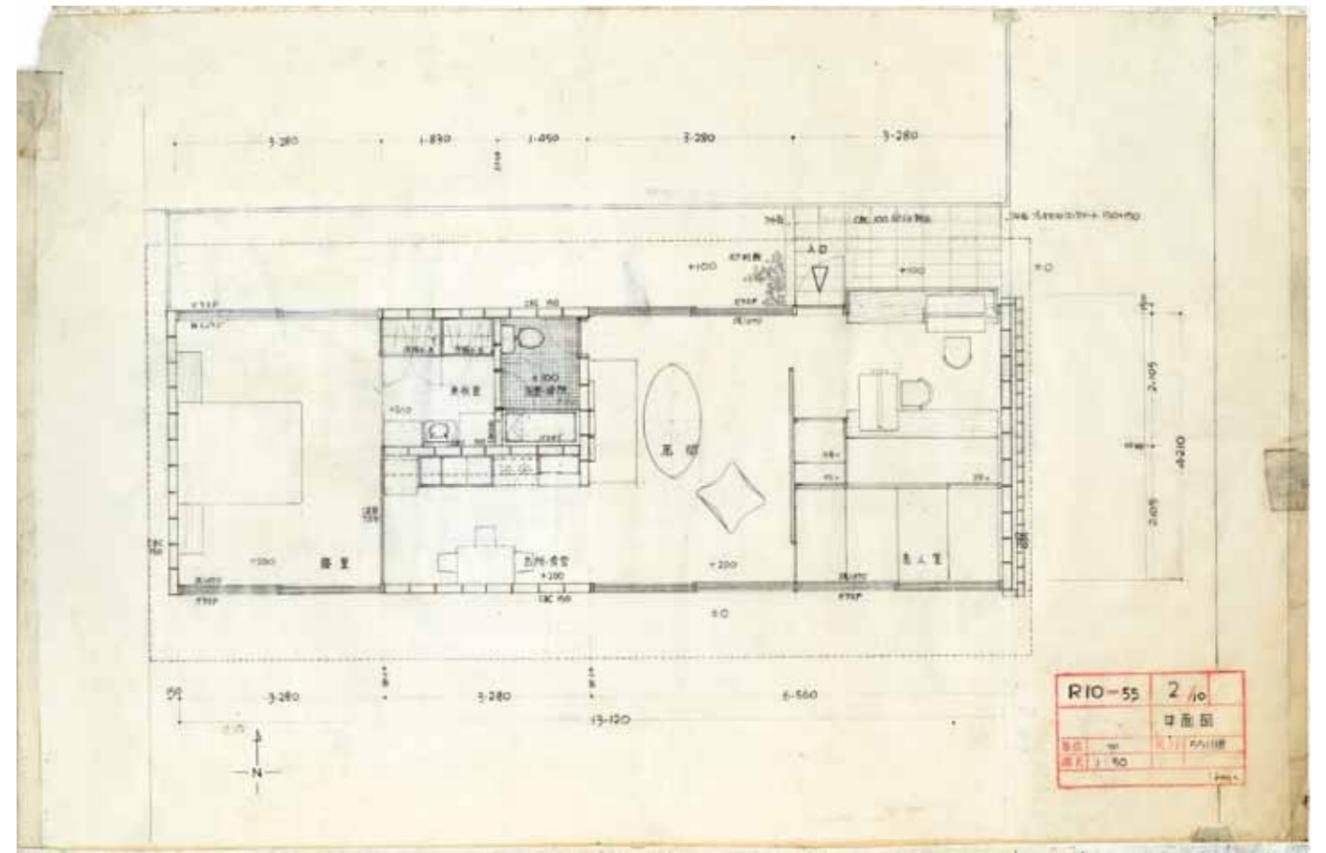
古谷 | 清家先生と林夫妻の共通項を考えますと、まずフラットルーフですね。奇しくも近代建築の“解”として、ドミノのシステムじゃないですけど、積み重なる、垂直に繰り返しが可能であるというような命題がひとつあった気がするんです。それをプロトタイプとして表現したのではないかと。清家先生も林夫妻も、結局その後、上に載っける、何かを増築することになるわけです。そういうところも不思議に共通している感じがするんです。

白井 | ああ、なるほど。

安田 | フラットルーフという概念は、もちろんモダニズムの概念でしょうけども、ただ「平らな屋根のすまい」の時は勾配が付いていたんです、非常に軽いですが…。

白井 | そうですね。

安田 | 本当に緩やかな勾配が付いていて、それは多分に雨仕舞のことを考えての結果でしょうけど、本当はフラットにしたかったのかもしれませんが、ただ、エッジ、軒が細く綺麗に見えるのを意識していたと思うんです。ですから勾配が付いているのが、フラットだろう



が、エッジが綺麗であれば良かったような気もいたしますね。

古谷 | 「平らな屋根のすまい」が作品として紹介されたのは「建築文化」[3]ですが、「平らな屋根のすまい」を「A」、「三角屋根のすまい」を「B」と言って、2つ一緒に掲載しているんです。

安田 | なるほど、そうでしたか。

古谷 | 「三角屋根のすまい」の方は、十分な敷地があつて、平屋で間取りも十分検討されているから、これ以上、上に積み重ねるような窮屈な増築はしなくていいと思っている。ということは「平らな屋根のすまい」は密集地に建っていて限られた面積であることを考え合わせますと、やっぱり最初から屋上増築をひとつの可能性として考えていた。それを割合ははっきりおっしゃっている。屋根が平らな理由はそういうことなんですね。それから最初のコンクリートブロックはアメリカから取り寄せたものを使っている。でも建築家が自邸をつくる時には、いろいろ実験をしてみたい衝動に駆られる。雅子さんも、住宅というとみんな木造でつくると言いますが、果たして木造でいいんだらうかと言って、まずコンクリートでつくった。「これはひとつの挑戦だった」と書かれています。それ以外にもいろいろ工夫されたところがある。なかでも1番大きな話は、“一遍に出来なくていいんじゃないか”という考え方。つまり、この家が最初に出来た時は、床は仕上がっていないし、天井も仕上がっていない。だけど徐々につくっていけばいい。実際は、予算が足りないからと書かれているんですが…。ですから、“建築とは

こうあるべし”というものを外して、いろんな試みをしようとするチャレンジ精神、それを感じました。

白井 | そうなんです。「平らな屋根のすまい」ではいろんなことにチャレンジしてしまっていて、やがてそれがいろんな作品に変化し応用されていくんです。この段階で、かなりつくり方が決まったんじゃないか。これ以降は、そういうツールを使いまして、わりと普通に、いろんな作品を組み立てている感じがすごいです。「平らな屋根のすまい」で方向性が決まったんですね。

安田 | 必要なものをつくっておいて、後から増築すればいいという考え方は、たぶん清家先生もそうだったんです。「私の家」の後に「続私の家」をつくられて、そこからブリッジがつながっていて、元の「私の家」の上にコンテナを載せた(笑)。モダニストとしては、きれいなものを最初から計画してつくるようなスタイルよりは、どんどん時代に合わせて改変していいんだという精神が、たぶんあったと思います。この家も、いつ頃から増築を考えていたか分からないんですが、1978年の第2期工事の時には、2階書斎の突き当たりのRC壁に扉サイズの開口部が設けられています。外から見るとスラブや庇まですでに用意されていて、車庫の上に増築することが想定されています。つまり将来、何でもできるように…。昌二さんも雅子さんも、そういうスタンスだったんじゃないでしょうか。

白井 | そうでしょうね。

古谷 | ですからメタボリズムじゃないですが、実際には時間と共に変化していく建築ということを考えられていたんですね。

平らな屋根のすまい 平面図[所蔵: 安田幸一研究室]
「私たちの家」の原形になる住宅。当時、南側には林家の長屋が建っていた。東側は通路を確保し、同時に駐車スペースとして想定していた。“入り口”の位置は今と同じ場所。入り口横の書斎には、昌二(窓側)と雅子の製図板が置かれている。昌二の育った実家の平面でも玄関脇に昌二ひとりの書斎コーナーがあった。当時は珍しかった3点ユニットの水まわり。居間には、真っ赤な楕円形のダイニングテーブル(現存)。和室は昌二の母の部屋として東南の角に置かれた[解説: 安田幸一]

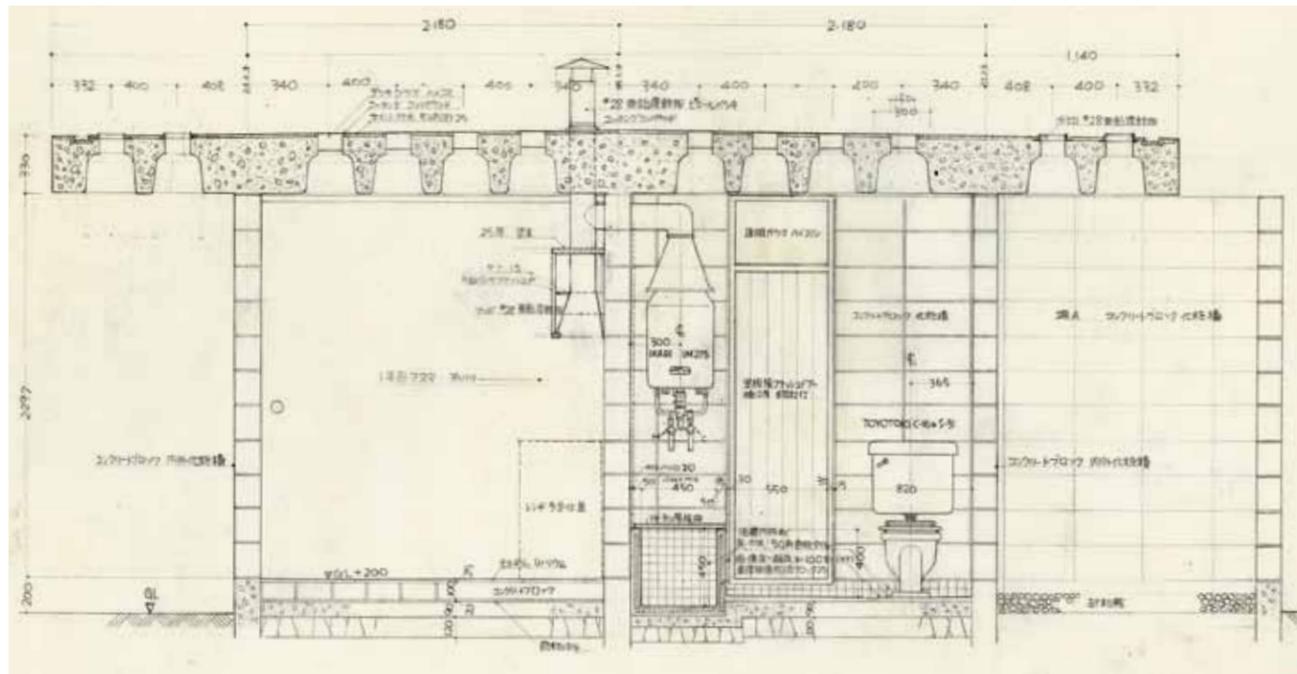


アプローチと入り口

[1] 『空間と技術—日建設計・林グループの軌跡』[鹿島研究所出版会/1973]

[2] 「鼎談: 『空間の骨格』という思想の林雅子流—論理的な構造と直観力がつくる空間」(林昌二×石堂威×平良敬一)『住宅建築』2006.7

[3] 林雅子「コンクリート住宅の問題—2つのコンクリート住宅を設計して」『建築文化』1958.3



平らな屋根のすまい 矩計詳細図[所蔵: 安田幸一研究室]
手描きの矩計図。線の強弱の付け方、読みやすい文字と数字は、その後のパレスサイドビルの図面のお手本となった[解説: 安田幸一]

安田 | そうですね、固定することを良しとしていなかった。

古谷 | とところで、最初の家は結婚前ですから当然ですが、昌二さんが図面を描かれた。その時の矩計詳細図は思い返すだけに良い図面でした。

白井 | そうですそうです。

古谷 | 給湯器のボイラーとか便器とか、ものすごく克明に、しかも楽しんで描いた矩計詳細図で、それぞれ文化と言えそうなもの、製図の醍醐味みたいなものがあるんですよね。

安田 | おっしゃるとおりです。今だったら設備は単線でルートしか描かないじゃないですか。それが昌二さんは給湯器のエレベーションから便器の配管のトラップまで全部描いてあって、本当に鬼気迫る図面なんです。昌二さんは図面に対しての思い入れが、ものすごく強い人でした。

白井 | そうそう、好きでしたね。それからおふたりともディテールがすごくお強い。そこにさまざまなアイデアやかなりのチャレンジがあって、いろんな可能性を秘めている。私の図面のチェックなども相当なもので、設計の未成熟な部分を一瞬で見抜かれるんですよ。そういうところはおふたりとも本当にすごかったですね。

古谷 | われわれも今ぐらゐの歳になると、図面を見て「あれ、ここ変じゃない?」と何となく分かりますけど、若い頃には分からなかった。

白井 | 今は図面も前例をコピーするような仕事が多いようですが、当時は、すべて1から創造していく時代だったんです。以前にやったディテールを使ったりストックしたりはしないで、作品ごとにすべてをゼロから新たに発想していく。

古谷 | なるほどね。ところで設計同人では、ディテールなどの図面は、どうかたちで新人に教えていらっ

しゃったんですか。

白井 | 私が入った辺りから様子がちよっと変わってきまされたけど、それまでは、とにかくディテールは雅子さんが描く。

古谷 | ご自分で描かれる?

白井 | スケッチを描くこともありますし、自分で描くこともありますが、スタッフがディテールを自由に考えるという状態ではなかった。

古谷 | じゃあ先生の図面を見て学ぶ。

白井 | そう、それを見て努力する。初期のある段階までは雅子さんからディテールのスケッチをもらって図面化するケースもありましたけど、後になりますと、わりと私の中で組み立てられるようになりました。雅子さんが『空間の骨格』[4]を出版してから、私も設計の考え方が明確になったと思います。作品ごとにこっちはこっち、あっちはまた違う…と考えるのではなく、作品をつくるたびに“空間の骨格”がどんどん進化した、成熟していくという感じですね。とにかく、この考え方が全くブレないんです。ですからある程度分かってくるのと、どのように設計すべきか理解しやすくなるわけです。1つ分かれば、だいたい10まで分かる…、そういう状態になるんです。そのロジックが相当緻密に構築されている。昌二さんもそういう感じでした。

古谷 | 雅子さんの住宅作品を幾つか拝見したことがありますが、よく大胆で豪放磊落とか、大らかだと表現されますが、実際には障子のような細かいところのものすごい繊細なものがありますね。しかも、それと骨太なものが組み合わさっていますよね。

白井 | はい、この家もまさにそうですが、その繊細さが積み重なって大胆な空間が出来る。あちらが大胆でこちらは細かい…というのではなくて、すべてにおいて繊細に構築していくと、大胆な空間が出来る。

古谷 | なるほど…。

白井 | “骨はしっかり”と、“ディテールはものを最小限にしなさい”。部材の大きさから始まって、使うパーツが少ないほど良いディテールだと言いまして、省けるものは極限まで省いていく。そのためには施工の精度が必要で、すごく難しくなるんです。本当に線を消す…、そういう感じですね。

古谷 | 線を消していくことで、大胆なものが浮き上がってくる?

白井 | 面が際立って見えてくる。ここ空間もそういうことで出来ていまして、線の消し方と言いますか、ディテールを隠すと言いますか、ディテールを表に出すのではなく、視覚的に仕舞い込むディテールに徹底しているんです。住宅ですから部材が結構多いわけですね。そのディテールが小さい、空間が狭いわりにもものが多い。これを整理するのは大変なこと、その整理の仕方がすごくお上手だと思うんです。昌二さんのディテールも、骨太な感じと繊細な感じがきちっと目的にかなって出来ている。すごく味があるディテールなんです。

古谷 | とところで、1956年当時は日本の戦後復興から、住まいは住文化というものにかたちが変わって、単に住むためのシェルターから、夫婦生活とか家庭とか、そういうものの拠点になっていく時期だったと思うんです。その頃の住宅というのは、昌二さんと雅子さんの目を通して見ると、どういう意味を持っていたと思われませんか?

安田 | モダニズム、特にアメリカの初期の1930年頃から始まったモダニズムというのは、元来ものすごく“豊かなもの”として発祥していたはずなんです。たまたま僕はニューヨークに住んでいましたので、ニューヨークのモダニズム建築の戸建て住宅を見て歩いていました。内側の壁仕上げも、プラスターボードを白く塗っただけで、非常に質素ですが空間自体はものすごく豊かなんです。建て主と建築家はローコストのためにボード、ペンキを選択したのではなく、あくまで簡素な仕上げで豊かな空間を追求したはずなんです。僕が学生の時に昌二さんに言われた品格、「建築には品がないといけません」というのは、こういう意味かと思いました。たぶんモダニズムを知っている昌二さんがつくられたコンクリートブロックの住宅は、日本がモダニズムを違う文化で継承し、違う方向に向かっていた時期だったんです。経済論理的には装飾のないとかシンプル…という意味で使われて、モダニズムは少し庶民的なモダニズムになっていった。別に僕は貴族的であるべきとは言いませんが、豊かな空間を持つモダニズムのイメージから、日本の貧相なドメスティックなモダニズムにすり替えられたようなところがあって、それに対して昌二さんや雅子さんはいつも批判的だったと思います。

白井 | 全くそのとおりだと思います。

安田 | 例えば、「貧乏くさい…」というようなコメントをすることがあるんですが、それは実際に貧しいという意味じゃないんです。「空間が貧しい…」という意味

なんです。

白井 | 本当にそうですね。

安田 | それを聞いた人は、「あなたみたいにリッチなクライアントばかりじゃない」ということになっちゃうんですが、絶対違う意味だと思う。

20年後に 第2期「私たちの家」

古谷 | 第2期の「私たちの家」は「平らな屋根のすまい」から22年たって、林夫妻もそれなりの年齢にいられたし、経済的にも余裕がおりだったと思うんですが、増築に当たってはいろいろなアイデアを凝らされた。それまでトレーシングペーパーにいろんなものを書きためられていたと、いろいろな雑誌に書いてありまして、あふれるものと闘いながら考えあぐねた末に決断をされ、これに至ったと…。

安田 | 実は「平らな屋根のすまい」から9年後の1965年段階で、わりと大掛かりに手を入れられるわけです。これがいわゆる第1.5期と言われるもので、収納部分を増築される。次に本格的な「私たちの家」の増改築になるんです。

古谷 | やはりステップを踏んでいくわけですね。その時にこれも有名な話ですが、雅子さんは「私は住宅のプロだから設計料を頂けない図面は描きませんよ」と言うので、「私が描いた」と昌二さんはよくおっしゃっていた(笑)。昌二さんにとってみれば、ひとつの楽しみでもあったんですよね。会社の仕事と違って。

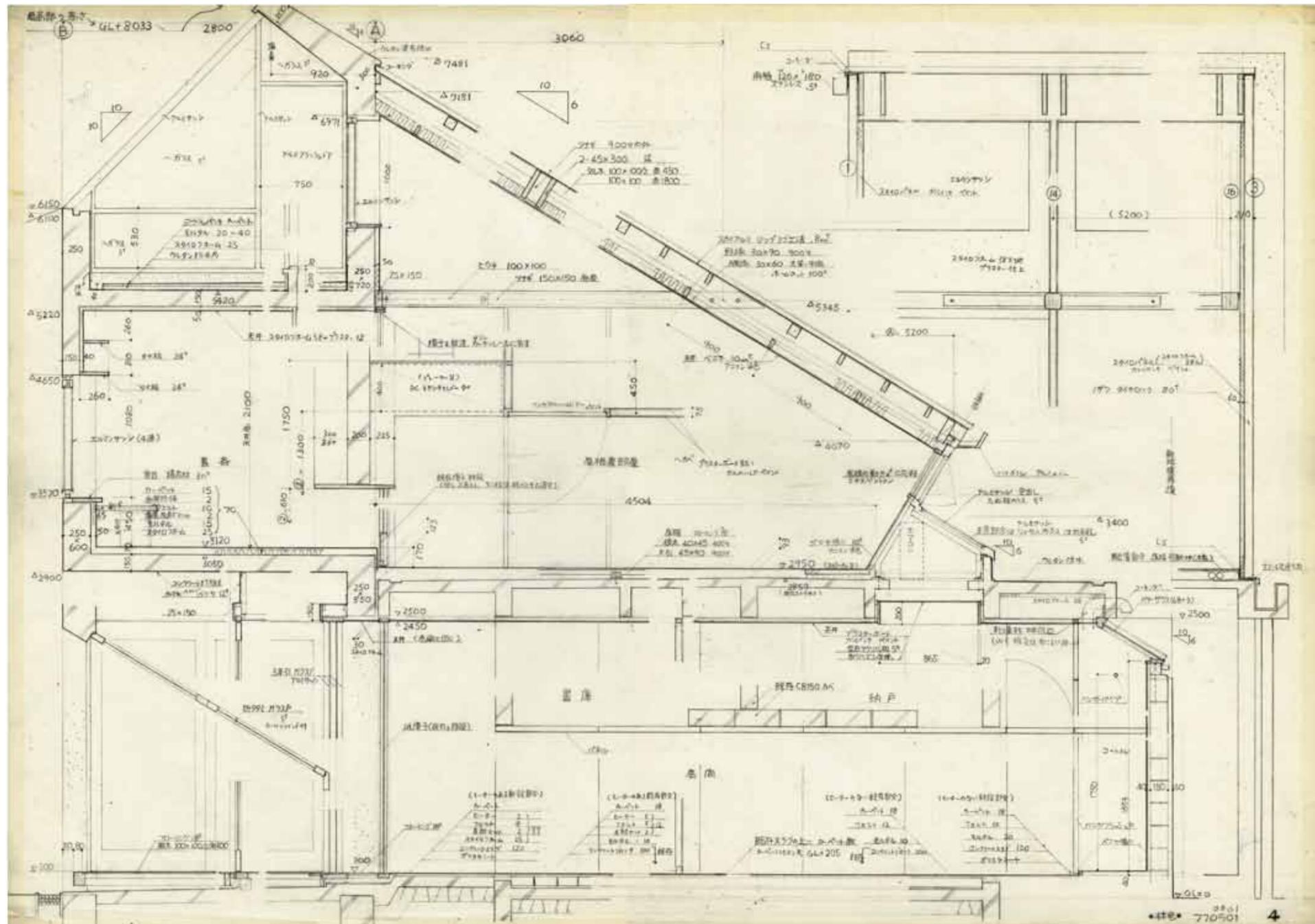
白井 | そうだと思いますね。

安田 | 林さんはその頃は日建の設計部長になって、ポーラ五反田ビル以降、自らの手で図面を引くチャンスがだんだん失っていきいんです。スケッチは描かれましたけど、本当の意味で図面を自分で描く機会がなくなりました。ですから住宅に対しては趣味の世界に近いのかもしれませんが、帰りに雅子さんの事務所に寄って、自分で描いてから自宅に帰ってくるという生活をずいぶん続けていた。余談になりますが、昌二さんは学生の頃から住宅に対して、とても熱い思いを持ち続けていたんですよ。実は平面形の可能性を洗い出して、大学ノートに緻密にまとめているんです。卒業設計も住宅のプロトタイプですし、学生時代には、住宅を4軒くらい設計して建っています。ですから昼間は事務所でも巨大建築をやりながら、ずっと住宅をやりたい気持はあったと思うんです。さらに話がずれちゃいますが、昌二さんは日建時代、ほとんど模型もつくらない人でした。僕が新入社員の時ですが、模型をつくっていろいろ議論していますと、「君たちは図面が読めないんですね」と言われたものです(笑)。2次元から3次元を読むのが建築家の職能であって、図学的なことを頭の中で全部展開できてこそ建築家だ。模型で見るなら素人じゃないかと…。

古谷 | プロフェッショナルってことですね。

白井 | そのとおりです(笑)。

[4] 『林雅子のディテール—空間の骨格』
[彰国社/1985]



私たちの家 矩計図[所蔵: 安田幸一研究室]
第1期の屋根スラブの上に第2期の床(ヒノキ)が置かれる。北側のトップライトを取ることで日中の明るさを確保している[解説: 安田幸一]

古谷 | では、増改築の具体的な話にいきます。もちろん普通であれば、前の家を解体して建て替えるという選択肢がないはずはないんだけど、昌二さんは長年この隣近所の中で暮らしてきたから壊すのは嫌だったし、音が出たりほこりがたつことも避けたかった。ちょっと意地になって考えていた感じもありますね。しかしその間に建築基準法やその他いろいろなものが変わって、当初予定したように、既存の住宅の上に単純に2階を載せれば良いというわけにはいなくなると言って、この大胆な架構を構想されるに至った。「私たちの家」を昌二さんが設計された頃は、安田さんは大学院生ぐらいですか。

安田 | 大学生です。ですから設計過程を全く知らないんです。

古谷 | そうですか。僕は早稲田の助手をしていた頃ですが、穂積(信夫)先生が昌二さんと親しかったこともあって、研究室でこの家の話は時々聞きました。「林さんが面白いことをやっているらしい」とか、「完成直前に見てきたらね…」とか、本当に興奮して、「私たちの家」の成り立ちを話してくれましてね。下の家をそのままにして、上に差し掛けるんだ…と。

安田 | そうでしたか。

古谷 | ポーラ五反田ビルは、当然、両側のコアで支えられているから当たり前ですが、「林さんは、ついにあれの上をいったね」みたいな話を聞かせてもらって、とても楽しかった。この構造形式は安田さんからご覧になると、どんな感じですか？

安田 | 学生と一緒に論文を書いた時に、たくさんス

出来上がりました。
古谷 | じゃあ、中野サンブラザですね。
安田 | おつしやるとおり、中野サンブラザとポーラ五反田ビルをミックスしたような構造です。門型のコンクリートフレームから斜めの屋根構造をぶら下げる構造なんです。抽象的な空間にあつて水平な皮付きヒノキ梁が空間にスケールと力強さを与えています。構造設計は、芸大の温品(鳳治)先生によるものですが、この構造は面白い。

白井 | そうですね、本当に面白い構造です。
安田 | しかもダイナミックな構造を感じさせない…。そこがまた昌二さん、雅子さんのイメージに重なるんですね。
古谷 | そうです。よく考えれば、この張り出しは、平面的には片翼であり、理論的にはつじつまが合わないんです。実は、東隅の地中梁に奥行き2m、幅と深さが1.3mの大きなコンクリートの塊が重石としてくっついていて。その秘密を瞬時に見抜いたのは西澤文隆さんだけだったと、昌二さんが嬉しそうに話してくれたと書いてあるんです[5]。つまり本当は相当、工夫がしてあるんだけど、それを人には感じさせないようにしよう。そういう昌二さん独特の洒落っ気みたいなものがある。すぐ見抜かれるような構造はちょっと野暮ったい。

安田 | そうですね。昌二さんは「私たちの家」では、特殊なことを見せずに、空間をつくっていきたくて思っていたようです。
白井 | 雅子さんも一緒ですね。少し話はそれますが、余分にお金を掛けない。必要なお金は決まっています、大きな家であつてもいわゆる高級なものにはならない。そういう意味では先ほどのように、安っぽいとか、ケチな建築だとか、そういう言い方をされることもあるんですが、まさに空間が一番なんです。合理性の追求は徹底して、無駄なことは一切しない。一つひとつは全部、必要最小限であること。たとえ予算があつても、『空間の骨格』では地籍、人籍と言っていますが、この地籍と人籍にぴったりはまる建築をつくるためには何が必要で、どうあるべきか…なんですね。どこをどう装飾するか…などは一切考えない。そういう意味では、建築の中に女性らしさがないかもしれない。しかし雅子さんは、時として強い色彩を使うんです。そういうところに女性らしさが表現されている感じがしますね。
古谷 | 要するにわけの分からないものは、お嫌いでしたね。屋根と天井のすき間とか。
白井 | そうです。図面も同じで、余分なことは一切描かない。例えば1つ描いたら他では描かない。ここで描いたのに、何のためにそちらにも描くのかと注意されます。それくらいシンプルなんです。紙は端から端まで全部図面に使うとか。平面と断面を組み合わせたようなディテールが得意なんです。その図面だけで空間が分かるという表現方法です。図面の描き方もそうですし、材料も無駄がなく理にかなった使

[5] 松隈洋「林雅子の求めた風景」『住宅建築』2003.6

い方をします。骨格もすぐく明解で、これは構造壁なのかそうじゃないのか…というあいまいな壁はなくて、必要なだけで出来ている。先ほどの話と一緒に、それが成熟してくると空間が豊かになる…、そういう感じですよ。

自分の居場所は自分で見つけて移動する

古谷 | 『新建築』の記事[6]に書いていらっしゃいますが、要するに第2期の大きくなった家は大きな囲いだけあって、その中で猫が自分の居場所を見つけるような使い方が良いと。どこが何のための部屋か…というのではなく、暖房が必要な時は暖房の効きの良いところ、そうでない時は開けっ放しのところとか、季節によって自分の居心地の良いところを探していく、そういう家がいいんじゃないか。まさにこの家は1階部分が拡張されたことによって、すごく可能性が広がっていますよね。

安田 | ええ。58m²の時は、要するに食堂兼居間だったんですね。当然ながら昔の和の住まいと同じように、寝室と食事をするとお客さんを通すところを兼用していたんです。「私たちの家」が出来上がった後は、お客さんを迎える居間と、普段くつろぐソファのある“私の座”、それから2階はウィークエンドハウス。要するに普段は使わないけれども、週末は上に上がって、リラックスして音楽を聴く空間。そういういろんな場所を猫のように移動することを考えておつくりになっていると思うんですよ(笑)。

古谷 | 面白いのは、例えば雅子さんは実際のお仕事では、もっと裕福なクライアントの大きな家もずいぶん設計されていると思うんですが、ここではそうもいかない。そういう中で空間をいろんなことに使える豊かさをつくろうといった時のキーワードが面白いんです。これは昌二さんの文章ですけど、「私たちの場合は、時としては家じゅうが仕事場になり、数時間後には家の半分ほどが台所になる、という風変わりなものです。普段はふたりの家族が、素泊まりのホテルのように使うだけであって、一方、来客があるとなると数十人が押しかけてくる——いや、お招きするというべきですが——という激変に応じられる家でなければなりません」[6]という、つまり普段は小さな素泊まりのホテルと言っていますが、ホテルが持っているある種の可変性、同じ空間が何通りにも使えるような、そういうキーワードをお出しになっている気がするんです。お客さん用とか何とか用と、いろいろ分かれているのではなく、スイート・ルームみたいなもの。そういう中にお住まいになっていたのかなという感じがするんです。

白井 | 例えば空間が広いというだけじゃなくて、それこそ居場所というのはそれぞれのシーンが全部にある。だから座っている席によって全然違うシーンがあって、どこの場所も居心地が良い、そういうつくり方ですね。それとどこにいても視線がつながるように出来ている

ことも大事なことなんです。分節しながらもひとつになれる。可変というのはそういうことだと思うんです。広さだけではなく分節の仕方が程良いと言いますか…。

事務所用のエルミンサッシュが2階に…機能は最先端だった

古谷 | 2階の書斎の窓には、エルミンサッシュが使われていますね。

白井 | はい、そうです。ブラインド内蔵の…。古谷 | それを見て雅子さんに「こういう事務所用の窓を住宅に付けるものじゃございません」とたしなめられたとか(笑)。その話を聞かれたことはありますか。白井 | それは網戸の問題なんです。この家には網戸がないんですね。その頃、昌二さんは「文京区には蚊はいないんだ」と言い切っておられた(笑)。そして当時近所に設計した2つの住宅にも「うちを見てみなさい、網戸がなくても大丈夫」と言って、付けなくてやっただけで、ビル用のサッシュは困るわけですね。

古谷 | まあ、そうですね(笑)。

白井 | ですが、一番良いところはブラインドが内蔵され横軸回転することにあります。2人とも開口部は大きくしたいが、同時にガラス拭きを常に考えていまして、エルミンは引っくり返せばそれができる。そこから選んでいたと思うんです。そういう意味でエルミンは最先端だったんじゃないかと思うんです。昌二さんはわりと新しいもの好きなんです。そういうものもお得意ですから。

安田 | 先ほどの蚊の話ですが、網戸をつくったんですよ、1階デッキの木製引き戸に沿って…。

白井 | あ、本当だ。恐れ入ります(笑)。

安田 | 建具屋さんに聞いたら、図面が残っていましたので、アルミのハンガーチャンネル材を木サッシュの横に流して、同じチーク材で網戸を制作しました。

白井 | ハンガーで、継いだんですね。

安田 | これで、蚊はだいぶ…。

白井 | 時代が変わったんですね(笑)。

外形のボリュームには、検討に検討を重ねて

古谷 | 昌二さんは外観のボリュームに関しては、隣のお兄さまのお宅とか、周囲に気を使って迷惑を掛けないようにという配慮から、ある程度導いていった。同時にキッチンのカウチに座ってみるとこう見るとか、あるいは居間に座ってみると庭も見えるし、そこに日が差し込んだりするだけじゃなくて、自分の家の一部も見えるように…とか、いろんなことを試みている。ちょっと覗けば玄関の様子も見るとか。そして外観は自動的に決まったかのようにおっしゃるんですが、それも周

囲への配慮なんですね。白井 | そうなんです。古谷 | お隣に配慮することもあったと思いますが、逆に近所からこちらがディスターブされないための、何て言うんでしょうか、つい立てみたいなの役割も果たしているような感じがしますね。

安田 | おっしゃるとおりですね。

古谷 | 昌二さんにとって唯一、困られたのはお向かいのマンションとの関係ですね。

安田 | そうですね。

古谷 | 前に彰国社の「ディテール」[7]の窓の取材で伺った時におっしゃっていましたが、いろいろ交渉して、階数を1階分だけ下げてもらったそうなんです、朝日が当たらなくなるので…。そこだけが予定外だったんですね、きつと。ただ、長年、周囲に配慮しながら生活し続けてこられた昌二さんにとってみれば、ささやかだけどそれは当然の願いだったろうと書いた記憶があるんですが、今こうしてこの茂っている樹木を見ると、何とかセーフの状態ですね。

安田 | そうなんです。その隣のマンションも敷地ぎりぎりいっぱい建てないで、南からの光と風がこちらへ入るようにセットバックしてくれているんです。

古谷 | そうですね、なるほどね。

安田 | 僕は引越してきた時にごあいさつに行っただけです。オーナーは昌二さんと同年代で昔からお付き合いがあって、マンションを建てる時もいろいろ相談したという話も聞きました。また、この入り口側には、雅子さんの設計したこげ茶色の壁の家があるんですが、この間、塗り直したんですよ。その時に、色見本帳を持って「色を決めてください」と訪ねて来られた(笑)。

白井 | そうなんですか？

古谷 | なるほどね。

安田 | 「昌二さんはいつも選んでいました」とおっしゃるんですよ…。「他人の家の壁ですが、こちらには玄関先の大事な空間だから、色はどうぞここから決めてください」というお話でした(笑)。一生懸命、周りと共存しているまちだと思いました。まだ皆さん初代で、ぎりぎり今の世代が保たれているんです。これから変わるかもしれないが…。

古谷 | その意味でも、都市の住宅というものは、それこそ相続で失われて更地になったり細分化したり、いろいろ変化し続けている。戦後、始まった日本の都市の住文化が、ことごとく消え去りそうになっていますが、小石川には近隣との関係も含めて、すごく稀有な、一種のお手本になるような模範が示されている気がしますね。単純に地区計画でお隣同士が高さを揃えるような話ではないですね。それはやっぱり今まで昌二さんたちがやってきた近隣に対する不断の配慮とか交渉とかやり取り…、それをずっとやりながら生活が続いているところからしか生まれえない、そういう解決策のような気がするんですね。今はみんな没交渉になっている。

安田 | 全くそのとおりですね。

第3期「小石川の住宅」誕生まで 夫妻がほぼ50年間住んだ家…

古谷 | 雅子さんが亡くなられたのが2001年。ですから最初の「平らな屋根のすまい」から22年後に「私たちの家」が完成し、20数年お暮らしになった。合わせてほぼ50年ここに住まれたわけですね。そして昌二さんは雅子さんの10年後に他界された。そういう思い出とエネルギーと情熱、そして実験精神の詰まった住宅を安田さんが継承しよう、譲り受けようと思われた理由は何だったのか。月並みですが、まずそれを伺ってから、その後の格闘の機微をお伺いしたいと思います。

安田 | 初めは剣持デザイン研究所所長の松本哲夫さんと雨漏りを直していたんです。屋根のトップライト辺りから2階に雨が降るように漏っていたんです。昌二さんが亡くなられて1、2年たった頃ですが、元施工の白石建設も一緒にいろんなところの修理を考えていました。オーナーがいまけんけど弁護士さんを通じて…。一方、白井さんはここを買ってくれる人を探していました。

白井 | そうです。

安田 | ただし条件がありまして、昌二さんにはお兄さん、妹さん、弟さんがいらっしゃるんですが、「昌二さんが雅子さんの生前のご様子やこの家の経緯を知っている人で、マンションに建て替えたりしない人。この家を保存、継承してくれる人」であることが条件でした。僕も何人かに聞いてみたのですが、ここを買うような人は、すでに家を持っていて、引越してこられるような人はいないんですよ。

白井 | そうでしたね、なかなかね。

安田 | 3年くらいたちますと、家はどんどん荒れていきまして、庭は雑草畑みたいになりましたし、家の中も家具がぐちゃぐちゃになってしまっていて、どうしたものかと困り果てて、家内にちよっと話してみただけです。ところが彼女は「住めば良いじゃない」と簡単に言うわけです。「まさか、そんなことあり得ない」と思っただけですが、よくよく考えてみますと、確かに保存するのであれば、誰かが住まないという意味がないわけですね。

白井 | そうそう、住まないよね…。

安田 | ショールームとして残すのは、建築としては意味がない。じゃあ住む人を探してみよう、その時に切り替えた。同時に自分だったらどうだろうと…。そして早速、白井さんに相談に行っただけです。白井さんは昌二さんが設計した弟さんのビルに事務所がありまして、そこに伺ったんです。

白井 | そうでしたね。

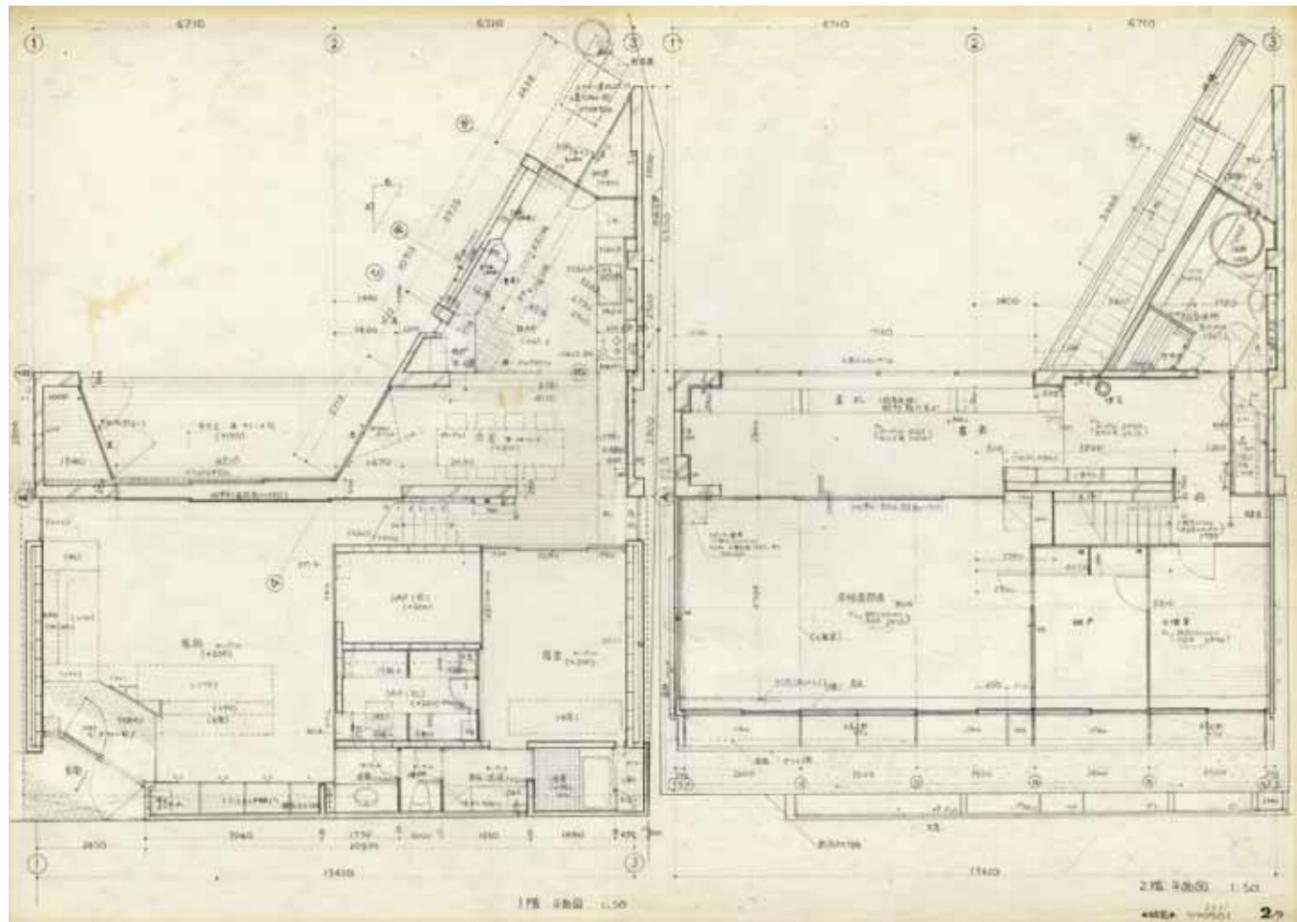
安田 | 「もし僕が住むとしたら、どういう感じでしょうか」という話をご兄弟に聞いていただいたんです。その時は弟さんはご不在だったのですが…。

白井 | そうでしたね。そして弟さんから、「安田さんなら…」というご回答を頂きました。

安田 | もちろん僕は昌二さんとそんな約束は全くして

[6] 林昌二「暮らしから住まいへ」『新建築』1981.2

[7] 古谷誠章「連載：「マド」の思想一名住宅を原図で読む 6 私たちの家」『ディテール』168号.2006春



私たちの家 1・2階平面図【所蔵：安田幸一研究室】
すべて昌二氏の手描き図面。現場に持参したらしい二つ折見本（青焼き）には、たくさん現場変更が書き込まれている【解説：安田幸一】

いませんし、するわけもないんです。全く関係ない話でしたから…。

古谷 | そもそも先ほどの雨漏りの話にしても、面倒を見ようとなさったのは、昌二さんが「何かあったら安田さんのところに相談に行け」みたいなことをおっしゃっていたんですか。

安田 | 住むことになって、最初にお兄さんの家に伺った時に、奥さまが「あ、あなたですか」とおっしゃったんです。「何か困ったら、東工大の安田先生のところに行け」…と昌二さんに言われていたそうです。僕は昌二さんのお兄さんには会ったことがなかったんですが、実は新建築社と一緒に3、4年掛かりで林昌二図面集【8】の編集をしていましたので、この家がどういう状況はよく知っていました。亡くなられる4年前くらいです。昌二さんの体調もあまり思わしくなくなっている頃でしたので、プライベートには立ち入らない方がいいと思ひまして、距離をとっていたんです。だけど何かあった時は、僕が昌二さんの本を譲り受けたいことだけはお願いしていました。昌二さんの学術的な本は全部保管しました。でも家のことは全然…。

白井 | そうですよ。

安田 | 僕は常々、この建築は豊かなモダニズム住宅の日本の代表格だと思っていましたので、それがなくなるのは建築界としてはまずいのではないかと。僕が手を挙げてみたらどうなるか、そういう感じでした。これが今に至る経緯ですね。ただ、なぜ僕がここに住んでいる

のか、実はよく分かっていないんです（笑）。

古谷 | でもこれを改修された時の安田さんの文章「生きていく住宅・論」【9】を拝見すると、まさに住宅は誰かが住み続けることによってしか生き続けることができない。家というのは住んでいる人と不可分の関係にあると書いていましたね。

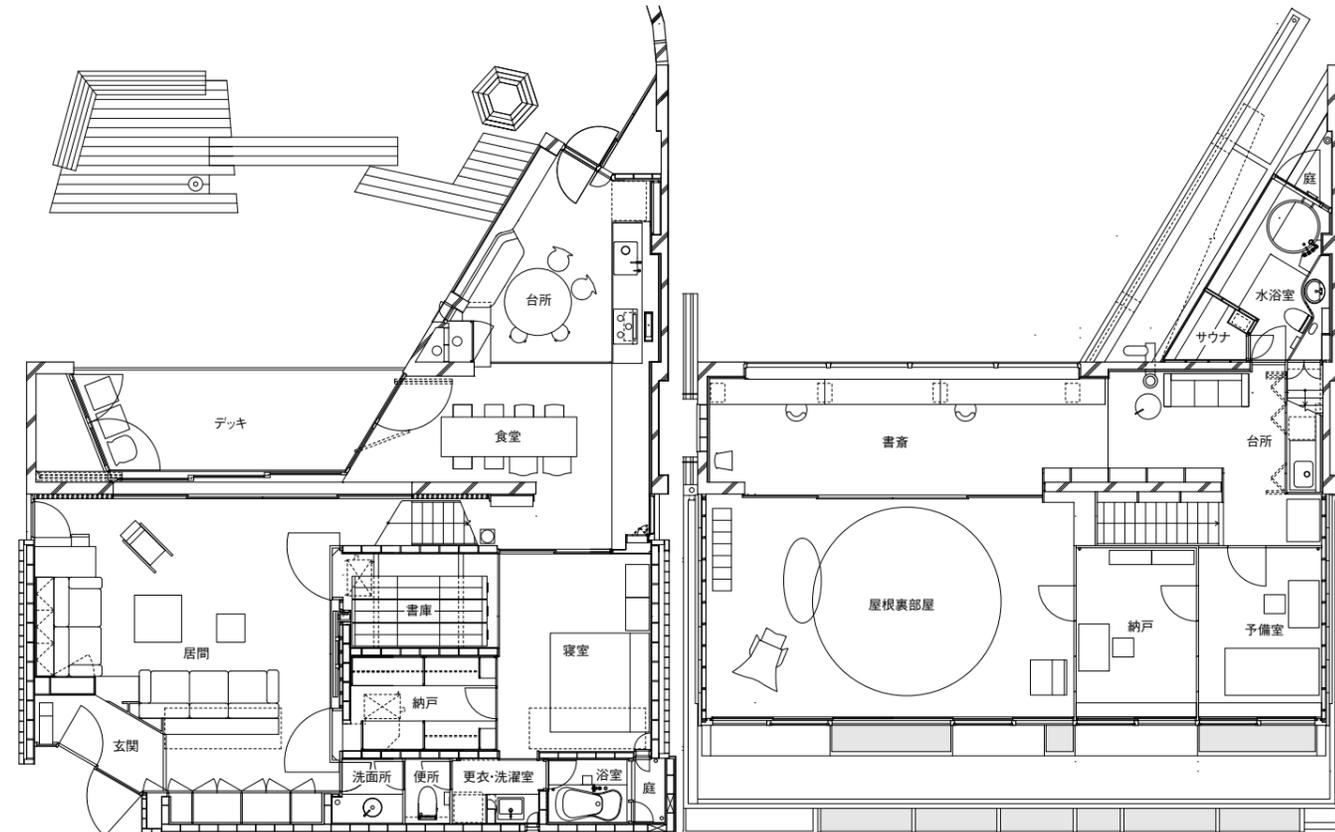
安田 | そうですね。

古谷 | さっきもおっしゃいましたが、剥製のように保存しても、意味は半減する。実際に住み、暮らすことが重要だと思いますが、時代も変わるし、もちろん人も変わりますから、住みこなすための条件とが生活のスタイルもいろいろ変わると言うんです。でもかつてのスピリットみたいなものが完全に保存されていますので、誰かが残していただけて良かったと思っていますよ。実際に変えられたところは？

安田 | “骨格”は変えていません。全体の構成とか、構造ももちろんいじっていない。ただ“装備”、仕上げ類は全く変わりました。装備の部分で、居間の戸棚の赤い色は、やっぱりいじれなかった。かなり個人的な思いが強く、親しかったとは言えなかな…。前のままにしています（笑）。

白井 | それはそうですね（笑）。

安田 | 趣味的なところや材料などは、何に変わったとしても、この家が変わることはないと思ひましたし、たぶん昌二さんも雅子さんも文句は言わないだろう。変えちゃうけど大丈夫かなと、一応、白井さんには相談し



1階平面図 1/150

2階平面図

ましたが…（笑）。

白井 | 家とはそういうものですか（笑）。

安田 | 生きていくためには、同じ形で100年、200年と生きるわけがないですから、どこかで新規になっていかなきゃいけない。今、言っていただいたように、もともと持っていた構成と精神は残して、あとの個人的なものはどんどん変えていく。だいぶ印象が変わったと皆さんはおっしゃるんですが、でも建築は残っている。外観ももちろんいじっていない。実は将来はデッキの横に増築したいと思っているんです。

古谷 | なるほど…。白井さんとしては、今の構想を聞かれて、いかがですか？

白井 | もちろん十分だと思いますし、ありがたい話でもあります。さらに進化すればなお良いと思います。この家はこの形が完成ではなく、またさらに進化していくと言いますか、時代に合った形に生まれ変わっていくのは大変喜ばしいことだと思います。それを許容する建物ですから。完結していないところが良いですよ。

古谷 | 骨格があればこそ、それができる。そういうことになりませんか。設備的にはどうですか。設備はもつと短いスパンで変わりゆくものだと思いますが。

安田 | 設備はもうオリジナルは残っていないんです。照明器具が2、3個残っていますが、空調関係、床暖関係、それからトイレとかバスルームは全部変えました。ほとんど新規になっています。昌二さんの時代と

は衛生器具の考え方も変わりましたし、空調はと言えばファンコイルユニットで、巨大なオフィス用のクーリングタワーがあったんです。それもやっぱり今の時代には即しませんので、今風のものに変えました。

古谷 | まさに装備ですね。

安田 | LEDに変わらざるを得ないとか、それはもうしょうがないと思っています。

白井 | 雅子さんのいろんな作品も、設備の入れ替えは随時やってきましたし、そのことに関しては一般的な話として十分だと思います。

古谷 | むしろこの家に限らず一般論としても、さっきの骨太の骨格があって、繊細なもので出来上がっていた空間ですけど、設備に関しては、別系統で考えられているから、取り替えることは比較的容易ですよ。

白井 | いや、実はそうでもないんです。

古谷 | そうでもないんですか？

白井 | この時代の住宅設備機器はあまり進化してなくて、だいたいある程度の規模になって隠蔽できる建物になってくると、どうしてもビル用の空調のシステムを使う。例えば空調の設備は基本的に全部隠すという考え方でしたので、後はそれなりに大変なんです。

古谷 | そうなんですか。

白井 | しかも冷温水を回すやり方ですから、冷媒の仕組みが新しくなると使えない。配管をやり替えなきゃいけないんです。それには天井裏がとってあるとか、そういう設備のためのスペースが余分にあるわけじゃ

小石川の住宅 1・2階平面図【提供：安田アトリエ】
手描きの図面を学生の児玉理文さんにCAD化してもらうことから始め、特に水まわりは大きく変わっている。天井をめくってみると配管がうまく通らなかつたりしたため、現場での調整に時間が掛かった。図面の完成と竣工は同時であった【解説：安田幸一】



「小石川の住宅」の居間で談笑をする3氏。
右から白井氏、安田氏、古谷氏

なくて、パイプシャフトはギリギリにして空間の無駄をなくす。つまり苦難の道なんです。

古谷 | そうだったんですか(笑)。

白井 | 正直なところそうです。ですから安田さんはエアコンの取り替えなどは、上手に改修されたと思います。

安田 | 配管が通るスペースは全然なかったですね。

白井 | 普通だとこの家はもう配管できないですから、外部に全部露出で…というやり方になるんです。今のようないい状態にはなかなかならないんですよ。

林夫妻の考え方を活かした改修設計

古谷 | 最後に伺いたいんですが、この家は改修ですが、建築家の自邸の場合は、いろいろな挑戦をなさる。新築ならまだしも、改修の場合はどうですか…という質問を何かで見ましたが、その時の安田さんの回答が素晴らしかった。「ぼくは卒業設計も改修作品で提出しましたし、(中略)諸条件を読み取り、解を導くのが設計であって、改修のときにはたまたま既存建物があるだけです」^[10]とおっしゃっていますね。

白井 | 格好良いですね(笑)。

安田 | 基本的にはそのとおりなんですよ。設計条件に制約がない建築はなくて、予算も土地もいくらでもいい、さらに何を建ててもいい…と言われたら設計できない。みんな少しずつ制約があって、新築にもう少し制約があるのが改修でしょう…というような意味で言ったつもりですが、ちょっと格好良すぎましたね(笑)。

古谷 | これはとても重要な示唆をしていると思うんです。というのは、僕自身は(カルロ・)スカルパの研究をしていたのですが、スカルパは生涯の作品のほとんどが改修か、あるいは既存空間の中で展示空間をつくるとか、要するにいつも既存の空間があるんです。まずそこからいらぬものを取り去り、必要なものを付け加え、新旧を組み合わせて全く新しいものをつくる…。これが彼のひとつの哲学になっていくわけです。そこ

には新と旧が渾然一体となって、さらに新しい価値を生む、つくり出す、そういう理念が働いているんですね。ところが一般の更地に建ててきたモダニストは、いつも白紙の上にものを建てるような気持ちになりますね。でもちょっと隣近所まで見渡してみますと、その周辺を含む環境に対しての増築なんです。いかに自分の敷地が更地であっても。

安田 | そうそう、おっしゃるとおりです。

古谷 | ということを見ると、スカルパが既存のもの、所与のものと、そういうダイアログとか、ある時は葛藤とかいろんなことを生みながら、それと組み合わせることで、さらに新しい価値を生むという考えに至ったことは、とても意味のある示唆的なことじゃないか。安田さんがおっしゃっていることも、まさにそれに近い。だから普通のモダニストも、実はちょっと引いて全体を見ると、それに対する改修だったり増築だと思えます。安田さんは、それを境目なく考えられていることに大いに共感したんです。

安田 | それはずいぶん良く解釈して下さいと思います。僕の大好きな建築家と建築は、ピエール・シャローの「ガラスの家」、フィリップ・ジョンソンの「ロックフェラー・ゲストハウス」で、2つとも改修なんです。結局、ものがあって、それをどう自分の空間に変えていくか…、そういうところが相当面白いと思ったんです。それで僕の卒業設計も、実は新居(千秋)さんがやっていますが、赤レンガ倉庫の改修だったんです。それも赤レンガ倉庫にあまり手を入れなくて、わりとシンプルに改修したものですから、学校では全然受け入れられなくて、「これじゃ卒業設計にならない、改修は卒業設計ではない」、「君は何をやっているんだ」と散々怒られた。篠原先生だけが「卒業しているよ…」と言ってくれたんです。

古谷 | そうでしたか(笑)。

安田 | 卒業はできたのですが、1981年ですから、その当時、まだ誰も改修をやっていなかったんです。

古谷 | さっき安田さんのセントラル硝子のコンペの話伺いましたが、実は僕もそのセントラル硝子のコンペで学生の時に初めて佳作になったんです。その時に出したのが、先ほどの赤レンガ倉庫を映画館に改修した案なんです。

安田 | え? そうなんですか(笑)。

古谷 | 赤レンガを映画館に改修した案で5万円もらったんです。それが生まれて初めての当選でした。

安田 | そうですか。先駆者だったんだ。何年頃ですか、それは。

古谷 | 1978年です。

安田 | あ、僕より前だ。失礼しました。

古谷 | いやいや…(笑)。でもすごくそういう意味で僕は共感を感じたんです。先ほどから建築家は自邸でいろいろ実験をするものだと申し上げましたが、実は今回、安田さんがされていることは、普通の人ができない、もっと壮大な実験だと思うんです。つまり一つひとつのテクニックを実験しているのではない。所

与のリソースを骨格としてだけでなく、精神として受け継いで、それをさらに次代に継承していくこと自体が、ものすごく大きな実験ですね。それがまた先ほどから話題になっている東京における住環境、隣近所との住まいの関係というものを次の世代に活かすことでもあった。せっかく戦後つくり上げてきたのに、今、それが急速に喪失しつつある。それに抗うひとつの抵抗の姿勢なんじゃないか、あるいは提言なんじゃないか、そう思うんです。

安田 | そうですね。そこまで大きなことを考えて行動しているわけではないですが、設計という行為が自分の自我の表現ではないというのは、学生の頃から思っていたんですね。なるべくならあんまり形を外に出さないように設計したいと思っていました。

古谷 | 老成していたんだ(笑)。

安田 | そうそう(笑)。だからこれもそんなに抵抗はなかったのですが、ただ前に住んでいた人をよく知っていますので、多少の抵抗はありました。

白井 | そうでしょうね。

古谷 | では白井さん、最後にお尋ねします。長い間、雅子さんを事務所ですべて支えてこられましたが、この家が改修された後、再び訪問なさって、いかがでしたか。

白井 | 改修によって安田さんらしさが出たことと、「私たちの家」が形として本当に受け継がれたと思いました。残るべきものはきちっと残って、変わっていくべきものはそれなりに変わって安田さんの色が出てきた。それが非常に良かった。さらに生活がもっともっと深まってくれば、もっと安田さんの色に染まってくると言いますか、例えば10年後くらいに再び訪問するのがとても楽しみな感じですね。

古谷 | 雅子さんはこれに合格点を下さいますか。

白井 | 花丸でしょうね。特に先ほどの網戸の話ですが、ああいうところに具体的に手を入れられたのは、私は大変うれしく思います。生活がちゃんと受け継がれている感じがしました。骨格はそのままできちっとある。そういう意味でもすごくうまくいっていると思います。それとやはりその当時の住宅には、弱点があるんです。どうしても雨漏りが出るデザインになる…。今ほどディテールが進んでいない時代に手づくりでつくっているものですから、多少弱いところがあるんです。そういうものが改善されてより確かなものになったことは、大いにありがたいと思います。昌二さんと雅子さんの元の考え方に沿って改修されたことは、大変、素晴らしいことだと思います。

古谷 | ありがとうございます。いずれにしても、こうしてもう一度ここに来られるようになったことだけでも、とてもうれしいことですよ。

白井 | そうですよ。

古谷 | 本日は長時間ありがとうございました。

[収録:2016年6月18日]

やすだ・こういち——建築家・東京工業大学大学院教授/1958年生まれ。1983年、東京工業大学大学院修了。1983-2002年、日建設計勤務。1989年、イェール大学大学院修了。1988-91年、バーナード・チュミ・アーキテクト・ニューヨーク勤務。2002年、東京工業大学大学院准教授、安田アトリエ設立。2007年より現職。
主な作品:桜田門の交番[1993]※、光文社本社ビル[1996]※、ポーラ美術館[2002]※、大分マリンハウス水族館うみたまご[2004]※、東京工業大学緑が丘1号館レトロフィット[2006]、東京急行大岡山駅上東急病院[2007]、ポーラ銀座ビル[2009]、東京造形大学CS PLAZA[2010]、東京工業大学附属図書館[2011]、[[cell]] [2012]、斎藤准教授の家[2013]など(※日建設計時代の担当作品)。

しらい・かつのり——建築家/1957年生まれ。1980年、日本工業大学卒業。1980-2002年、林・山田・中原設計同人に在籍。2002年、白井克典設計事務所設立。2005年、林雅子資料室を併設。林雅子の設計資料のすべてを管理し、現在に至る。
主な作品:世田谷区民健康村 ふじやまビルジ[1986]※、せせらぎのほとりの家[1996]※、都城の家[1998]※、アトリウムのある家[2003]※、だんだんの家[2004]、湖畔の家[2006]、中央工学校100周年記念館 RIZE・17号館[2008]、旧軽井沢の別荘[2011]、川場温泉源泉場宿 悠湯里庵[2014]など(※林・山田・中原設計同人時代の担当作品)。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授/1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。
主な作品:アンパンマンミュージアム[1996]、詩とメルヘン絵本館[1998]、早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、ZIG HOUSE/ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院[2002]、神流町中里合同庁舎[2003]、茅野市民館[2005]、高崎市立桜山小学校[2009]、小布施町立図書館「まちとよテラス」[2009]、早稲田大学理工カフェ[2009]、鶴庵[2009]、T博士の家[2010]、実践学園自由学習館[2011]、熊本市医師会館[2011]、中河原保育園[2012]、ルビシア滋賀工場[2012]、喜多方市新本庁舎[2015]など。

鼎談後記——古谷誠章 都市の貴重な住宅を、空間、精神ともに次世代に向けて継承する

長く親くさせていただいた林昌二、雅子ご夫妻の、この家を再び訪れることができたのは個人的には大きな喜びだった。かつて何度か昌二さんをお訪ねして伺ったこの家を巡るお話は、それがそのまま戦後近代の東京の住文化の変遷を辿る物語であった。そしてそんな話も代が替われば断ち切られてしまう大都市の土地事情の中で、今回、安田幸一さんによって、またそれをさらに次世代へと受けつなくストーリーが生み出されたことは、この上ない喜びだと言ってよい。今さら言うまでもないが、東京という巨大な都市の住文化は大規模に再開発される人工的なマンション住まいに取って代わられている。かつての高密度ながら植栽を残しつつ低層で連なっていた、本来の東京の地形に沿って近隣と接して営まれた人々の生活の環境は大きく破綻しつつある。このシリーズの最後を締めくくる第12回は、初めて住宅作品を取り上げることとなった。初回からの「技術革新への挑戦」、「日本文化の再興と未来」に続く第3のテーマと言える「都市の住文化と建築」について活発で未来につながるお話伺えたのは、大変幸いだったと思う。実はこの住宅、第1期として竣工してまもない頃に、「結婚全書」[主婦の友社/1960]なる夫婦の新生活の指南書のような本に、山田初江さんの住宅と共に掲載されている。その中で、住まいというものを最初、一時に建ててしまうのではなく、結婚後に家族が増え、生活のスタイルが変化するにつれて、少しずつ建て増したり、改修したりする、いわば成長、変化する住宅像がさりげなく推奨されているのだが、住宅ローンの仕組みや、住みながらの増改築工事の難しさなどもあって、現実にはなかなか一筋ではいかないのも事実だ。しかし、まさに有言実行的な実例として、林さんご夫妻が自ら示したその後のプロセスは、見事にその意義を裏証している。今回の鼎談では、安田さんからはその緻密な研究、考察により、また白井さんからはすぐ傍らで目撃、体験された雅子さんと昌二さんのエピソードを通じて、折々のふたりの考えや推敲の姿を、大げさに言えばその精神を、つぶさに伺うことができた。ともすれば近年、僕たちがついおろそかにしてしまいがちな、建築を丹念に思考し、緻密に図面を描き、出来上がった空間をさらに良いものに育てていく姿勢を教えられた。鼎談の翌週、僕は実はスリランカのジェフリー・パワの建築を訪ねて歩いたのだが、奇しくもこの家の空間に符合することが無数にある。収録後の余談の中で、安田さんはこの家の調度や装飾に現れたそれらしい雰囲気について気付かれています。僕たちは大いに納得し、共感した。都市に働く夫妻にとつてのこの家は、一種の楽園化した世界であり、そこで持ち帰った仕事もし、時に親しい人々を招く場となり、ささやかに安息する場ともなっていたことが推し量られる。

フォルコラ作家、 パオロ・ブランドリシオさんの巻

Paolo Brandolisio

中村好文：文、イラスト、写真
Yoshifumi Nakamura

櫓漕ぎの手ほどき

高校を卒業するまで過ごした海辺の町に作田川という川が流れていました。

作田川の河口から九十九里浜にかけては片貝海水浴場で、夏ともなれば近郊から海水浴客が押しかけて大変な賑わいをみせました。さらに、川辺には海開きの半月ほど前から「銚子屋」という屋号のよし掛の貸しボート屋が出て、いやが上にも夏休み気分を盛り上げたのです。

銚子屋には貸しボートが15艘ほどありましたが、そのボートとは別に、櫓漕ぎの和舟がありました。「海の近くでボートが横波を受けて転覆した…」といった事態が起こると、平底でボートよりもスピードの出るこの櫓漕ぎの和舟が「高速救助艇」として出動することになっていました。

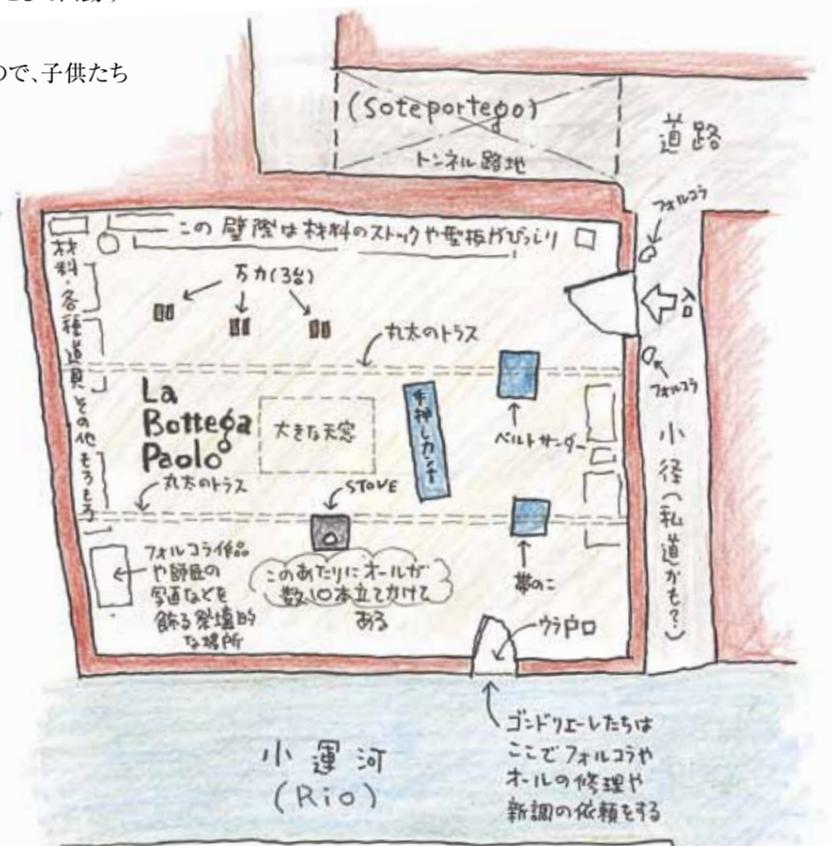
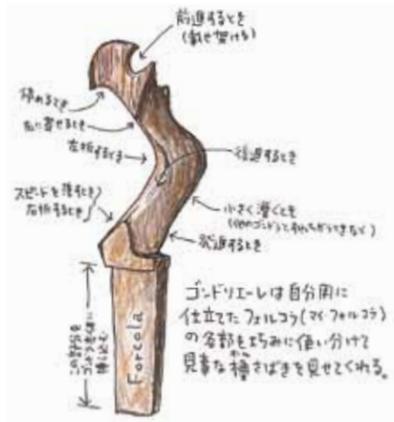
この和舟は立って櫓を漕ぐ仕草と姿がカッコいいので、子供たち

の憧れの的でした。

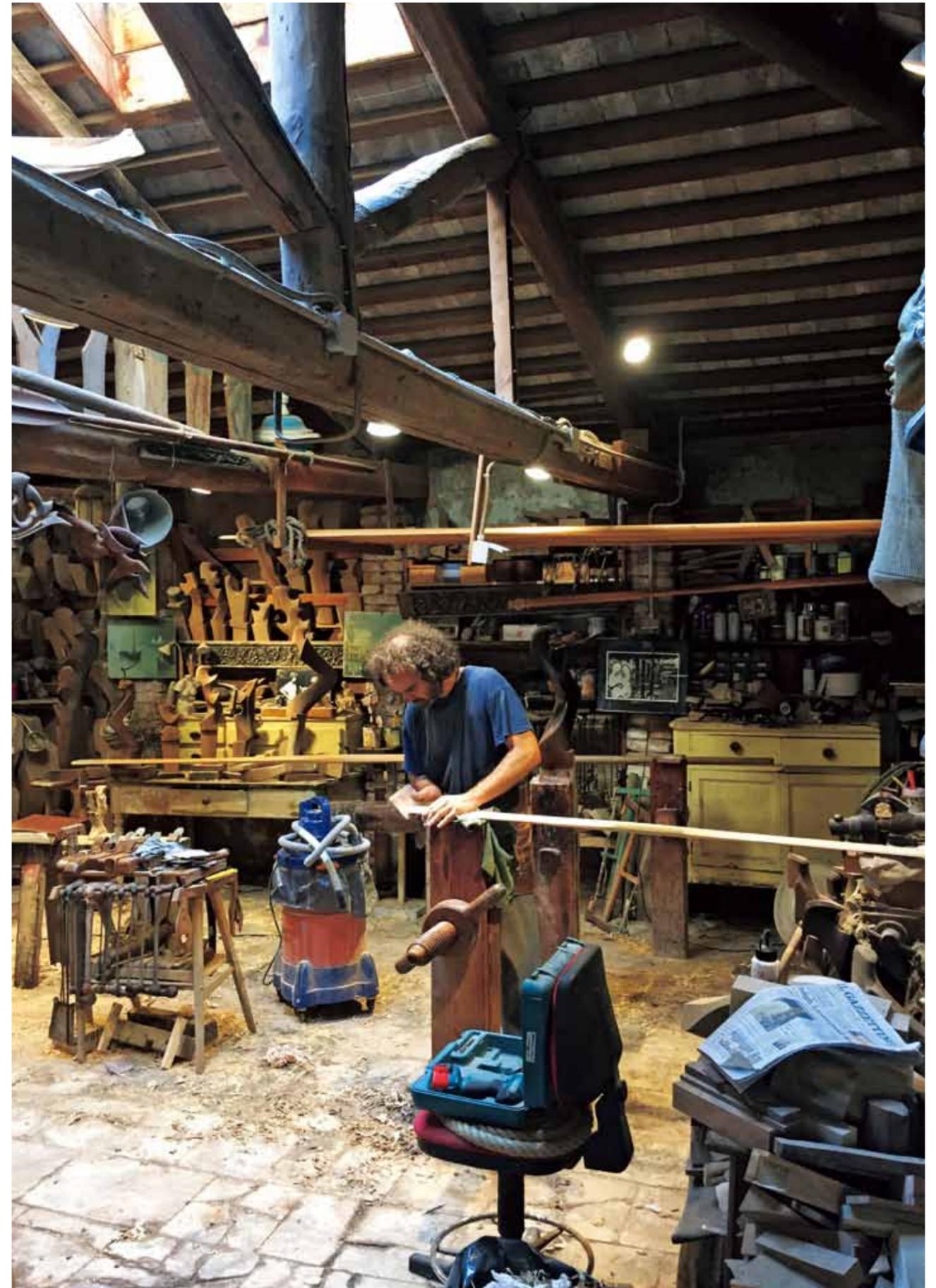
あれはどういう風の吹き回しだったか、幸運にも私は銚子屋のお爺から数回にわたって櫓漕ぎの手ほどきを受けたことがあります…といっても、小学4、5年生の子供が数回の講習で櫓漕ぎをマスターできるわけではなく、舳先が左右に大きく首を振る状態から、かろうじて「前へ進みだしたかな?」というところで、櫓漕ぎの個人レッスンは終了してしまいました。

「フォルコラ」に心惹かれて

少年時代に体験した櫓漕ぎは半世紀以上も前のことから、



ゴンドリエーレたちはゴンドラで工房裏手にある小運河を滑ってやって来て、フォルコラや櫓(オルカ)についての「よろず相談」をする。折しも若いゴンドリエーレがやって来て裏の戸口で立ち話をし「例のやつ、よろしく頼むよ」という感じで去って行った



切妻屋根を丸太のトラスで支えた広々とした工房内部の様子。天窗から射し込む自然光は弟子入り時代から変わることなく工房の隅々まで明るく照らしている。パオロさんは櫓修理の真っ最中

そんなことがあったこともすっかり忘れていました。ところが、2015年の初夏、2ヶ月間ほど「ヴェネツィア暮らし」をしていた折、ゴンドリエーレ(ゴンドラの漕ぎ手)の習熟した見事な「櫓さばき」に幾度となく目を奪われ、つぶさに観察しているうちに、子供のころの櫓漕ぎ講習の情景が古い映画のワンシーンのように脳裡に浮かび上がってきたのです。

ところで、ゴンドリエーレの櫓さばきの観察を繰り返しながら私がとくに注目したのは、櫓を支える支点となる部材(この部材を「フォルコラ」と言います)でした。ゴンドリエーレはゴンドラの後方左側に立って漕ぎますが、櫓は後方右舷にちょうど腕相撲をするときの腕のような格好でゴンドラの外に突き出して取り付けられているフォルコラを駆使してゴンドラを巧みに操ります。ゴンドラを緩急自在に前進させる、後退させる、方向転換する、停める、停泊する…そのときどきによって、フォルコラの先端の二股や本体の複雑な凹凸部分の適所に櫓を載せたり、押しつけたり、添えたりじつに巧みに使い分けるのです。分かりやすく言えば、フォルコラは車のギアのような役目をするのですが、私は用途と機能と使い勝手が合体してそのまま形になったようなフォルコラの複雑な形態に大いに心惹かれたのです。

あるとき、ヴェネツィア在住の友人に「ゴンドラのフォルコラって良くできているよね。しかも、形が彫刻みたいで面白いよね」と感想を漏らしたところ、「あ、もしそんなに興味があるのなら、フォルコラ作家の親しい友人がいるので、彼の工房を見学に行ってみる?」という願ってもない展開になりました。

工房 (La Bottega) 訪問

フォルコラ作家のパオロ・ブランドリシオさんの工房 (La Bottega) はサンマルコ広場から徒歩で5~6分のカステッロ地区にあります。観光客のさんざめく通りから脇にそれて路地に入ると、ソットポルテゴと呼ばれるトンネル路地の手前左手に平屋の建物があり、そこがパオロさんの工房です。ヴェネツィアを散策する愉しさのひとつは、街の中に観光と背中合わせにこのような地道な(地味な?) 工房がひっそりと息づいているのを発見することです。パオロさんの工房も目立ちはしませんが、ふと見ると、入口ドアの両脇にフォルコラが門柱のような構えで立てられていて、道行く人にここがフォルコラを作る工房であることを控えめにアピールしていました。



作業の手を休めて私のインタビューに応じてくれるパオロさん。髪モジャ、髭モジャ、クリクリ目、短めの皮のエプロン、そのまま映画に出演できそうな渋い味のあるキャラクターです。背後の祭壇コーナー(?)に天窓からの光が射し込みはじめました

友人と一緒に戸口から「チャオ!」と挨拶をすると、パオロさんは大仰な表情や身振りを返すわけではなく「さっき出て行った人が帰ってきた」ぐらいの感じで穏やかに迎え入れてくれました。カーリー・ヘア(というよりモジャモジャ髪です)とクリクリした目が印象的。ブルージーンズの上に短めの皮のエプロンをキリりと締め、仕事に没頭している様子は、簡素な工房のたたずまいと相俟ってどこか中世の職人を彷彿とさせました。パオロさんはしばし仕事の手を休め、友人に向かって静かな声で話しかけましたが、イタリア語なのでもちろん私には分かりません。「ん?」と首を傾げて見せると「どこでも自由に見学していいよ。写真も遠慮なく撮っていいし、仕事しながらになるけど、質問されれば応えるよ」と言ってくれたとのこと。

とりあえず私は切妻屋根を丸太のトラスで支えた工房内部をひととおり見学させてもらったあと、友人の通訳するパオロさんの言葉に耳を傾けました。パオロさんによれば、現在、ヴェネツィアにゴンドリエーレは約450人ほどおり、パオロさんはそのうちの150人ぐらいの面倒をみているそうです。仕事はフォルコラの製作だけでなく、腰痛持ちが多いゴンドリエーレの年齢や腕力や体癖に合うようにフォルコラの形を「仕立て直す」仕事や、櫓の修理をする仕事も多いとのこと。パオロさんの言葉を借りれば、「ひとりひとりのゴンドリエーレに合わせて服を仕立てる仕立屋のようなもの」なのだそうです。ついでに、フォルコラの材料が、樹齢80年ほど経たぬ胡桃、梨、桜など果樹系の樹種であることや、最後は「パエリーノ」という亜麻仁油系のオイルで仕上げることも教えてもらいました。

そうこうするうち、目と気持ちが吸い寄せられるように片隅にあるコーナーに向かいました。吸い寄せられた理由は簡単で、いつの間にか天窓から射し込む光の角度が変わって先ほどは仄暗かったそのコーナーを神々しく照らしはじめ、どことなく神聖な気配が漂いだしたからです。

さっそく近寄ってみると、展示棚のようにになっているそのコーナーには、15~16本のフォルコラが柔らかな自然光を浴びて林立していました。ひとつひとつ形と表情の違うフォルコラを見ていると、これが単にゴンドラを漕ぐ櫓を支持するだけの部材とは思えなくなってきました。どう考えても彫刻作品のマケット(試作のための模型)なのです。たとえばそのうちのひとつを高さ5メートルほどに拡大し、ブロンズで鑄造して「ルイジアナ美術館」の芝生にでも据えれば、きっと見学者は「ああ、やはりヘンリー・ムーアは素晴らしい!」と感心するに違いありません…と妄想するうち、そのフォルコラの向こうに立て掛けられている腰に手を当てた若者に、前屈みの老人がなにやら熱心に語りかけているモノクロームの写真が気になり出しました。その若者がパオロさんだということは一目で分かりました。もちろん、決め手はモジャモジャの髪です。でも、老人のほうは誰?

「師弟の物語」

さて、ここからは、パオロさんから聞いた「師弟の物語」です。パオロさんは、1967年ヴェネツィア生まれ。生粋のヴェネツィアっ子で、子供のころから工作、とりわけ木工が好きでよく木を削って遊んでいたそうです。あるとき可愛がってくれていた伯父さんが「そんなに好きなら、本気でやってみよう」と背中を押してくれたので、16歳のとき、初めて見よう見まねでフォルコラを作り、それを持って著名なフォルコラ職人だったジュゼッペ・カルリ氏の工房を訪ねました。初対面のカルリ氏(パオロさんはカルリ氏のことを敬愛を込めて「マエストロ」と呼ぶので、ここからはそう呼ぶことにします)に自作のフォルコラを見もらったのです。そのころマエストロは70歳に近かったのですが、パオロ少年の作品を見て、細かくアドバイスしてくれた上、帰りがけにお土産にフォルコラを作るための材料もくれました。おそらく「今度来るときは、この材料で作って持っておいで」という気持だったのでしょうね。そのころパオロさんは工業高校の電気科で学んでいましたが、その方面にはあまり興味はなく、最終学年の17歳のときに意を決してマエストロに正式に弟子入りし、フォルコラの製作や櫓の修理などの仕事を手伝いはじめました。マエストロは胸を病んでおり、引退を考えていたのでパオロさんには短時間で熱心にいろいろなことを教えてくれたそうです。そして「パオロよ、お前は神様が私に贈ってくれた使徒のようなものだよ」とよく話していたと言います。敬虔なカソリック信者だったマエストロにとってパオロという使徒名を持つ若者が自分の前に現われたのは、単なる偶然ではなく「神の思召し」に違いないと思えたのでしょうね。パオロさんはこの話を低い声で淡々と語りましたが、心に沁みるような「いい話」だと私は思いました。それから4年ほど経った1988年にマエストロが入院することになったので、パオロさんは21歳でマエストロから現在の工房を「居抜き」で引き継いで独立しました。建物だけでなく、機械や道具はもちろん、型板や治具などフォルコラ製作に必要な道具一式まるごと引き継ぐための資金は両親が出してくれたそうです。そして、マエストロ=ジュゼッペ・カルリ氏は1999年に亡くなりました。パオロさんは「マエストロはね、父親みたいな存在だったんだよ」としみじみした口調で結びました。

憧れ

ヴェネツィアには「ヴァポレット」という水上バスのほかに、大運河のこちらと向こうを行き来する「トラゲツト」と呼ばれるゴンドラの「渡し舟」があります。私はこのトラゲツトで大運河を渡るのが大好きで、乗るたびにゴンドラ漕ぎの技術をマスターして「トラゲツトの船頭になれたらなあ」と本気で思います。子供のころ「櫓漕ぎ」を習得できなかった私が、この歳になって「ゴンドラ漕ぎ」ができるわけではないのですけれど…。



左一路地の一角にあるパオロさんの工房。ヴェネツィアでは珍しい平屋の建物。「おや? こんなところにフォルコラが…」と心惹かれ、戸口から工房を見物していく観光客も多い | 右一工房の片隅にある祭壇的な場所。林立するフォルコラの間にパオロ青年と師匠の故・ジュゼッペ・カルリ氏の記念すべきツーショット写真が飾られているのをお見逃しなく



左一古風なノコギリで作業中のパオロさんの風貌と、道具と工房のたたずまいが相俟ってどこか中世の工房を彷彿とさせる光景。奥の戸口にときどき観光客が立って作業ぶりを見物していく | 右一スタンド式の万力(ワナ)にフォルコラを挟んで固定し、銚(せん)という一種のカンナで曲面を削り出すパオロさん。堅木なので腕力と根気のいる仕事である



左一パオロさんは工房から徒歩10分ほどのところにある、庶民的な地域のアパートに住んでいる。色とりどりの洗濯物が頭上にひるがえり、ヴェネツィアの下町情緒満点 | 右一アパートの最上階にあるパオロさんの住まい。随所に手作りの家具や棚が設けられていて(木工はお手のものです!)、独身男性とは思えないほど隅々まで整理整頓され、掃除の行き届いた素敵な住まいだった

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT [2001]、伊丹十三記念館[2007]など。主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版/2010]、『建築家のすまいぶり』[エクスナレッジ/2013]など。



特集3
まちづくりの今を見る— 12

地域資源を活かした 観光まちづくり

2008年に観光庁が設立されて8年、日本の観光を巡る状況は大きく進展している。外国人旅行者の訪日促進を図るビジット・ジャパン・キャンペーンがスタートしたのが2003年。その頃の訪日外国人旅行者数は500万人程度だったが、2015年に1,974万人となり、2020年の東京オリンピック・パラリンピックには4,000万人達成を目標に掲げている。個人旅行が主流となった最近では、地域固有の資源を新たに活用し、体験型・交流型の要素を取り入れたニューツーリズムの人气が高まっている。地方創生においても“観光まちづくり”は、観光振興による地域活性化が期待されており、関連事業のひとつに位置付けられている。

外国人・日本人双方の観光交流人口を増加させるには、地域のさらなる魅力づくりと誘客の仕組みづくりが重要になる。地域にある独自の資源を見極め、活用し、旅行者を引き付けるまちにしようと取り組んでいる各地の事例を紹介する。

飛騨古川周辺の里山を巡るサイクリングツアー：この日「飛騨里山サイクリング」に参加したメンバーは全員外国人。馬屋付き古民家の説明に熱心に耳を傾ける。横浜のIT企業に勤めるアメリカ人男性は、「日本にいる間に全国の里山を巡ってみたい」と語っていた。

【撮影：シロバラタク(特記は除く)】

2020年には“観光”を8兆円産業に

伊藤嘉規

Yoshinori Ito

観光庁観光地域振興部観光資源課観光資源活用推進室長

観光を巡る今日の状況

観光立国の実現に向けた政府の取り組みを一層明確かつ確実なものとするとともに、より自立的・総合的に観光に取り組める体制を整えるため、2008年10月、国土交通省の外局として観光庁が設立されました。それから8年、予想をはるかに超える外国人が訪れるようになり、旅行消費額も格段に伸びています。

政府としては、2003年にビジット・ジャパン・キャンペーンを開始し、この時点での訪日外国人旅行者は約500万人。この数字を1,000万人まで伸ばそうと、海外の旅行会社を招いて日本の良さを伝える視察ツアーを企画するなど、海外プロモーションに力を入れてきました。その甲斐あって、訪日外国人旅行者は順調に増加し、リーマンショックや東日本大震災などで一時的に減った年もありましたが、2013年には目標の1,000万人を達成し、2015年には2,000万人弱の外国人旅行者が日本を訪れました。

また、日本人旅行者を含む国内旅行消費総額の内、外国人旅行者の消費額は、2013年時点で総額22.8兆円に対して約1.4兆円だったものが、2015年には総額24.8兆円に対して3.47兆円と大きく伸びています。この数字は、日本の代表的な輸出製品である自動車部品とほぼ同等ということから、観光が産業として重要な地位を占めるようになってきたことが分かります。訪日外国人旅行者数の割合を国・地域別で見た場合、アジアが圧倒的に多く、2015年の統計では、総計1,974万人のうちアジアからの旅行者は1,637万人で、全体の82.9%を占めています。

1位は中国の499万人、2位が韓国の400万人、3位が台湾の368万人、4位が香港の152万人で、ここまですべてアジアとなっています。5位にアメリカ103万人、6位はタイの80万人と続きます。

訪日外国人旅行者が増えてきた理由

近年の訪日外国人旅行者数が伸びている理由として、以下が挙げられます。

- ①アジアの中間所得層が増え、彼らの日本への関心が高いこと。
- ②ビザ免除や要件緩和で、それに呼応するように伸びてきた。例えば2013年7月にタイ、マレーシアの日本入国ビザを免除したところ、免除前の1年と比較するとタイで約76%、マレーシアで約57%増加した。
- ③各地で魅力的な地域づくりが進んでいること。今でも東京、富士山、京都、大阪といった東海道沿いのいわゆるゴールデンルートを旅行する外国人が多いが、それ以外でもその地域ならではの観光資源、例えばその地域独特の自然、文化、食、気候などを活かした魅力ある観光地づくりが進んできた。
- ④円安による為替益や、消費税免税制度の拡充による消費誘導。中国人による“爆買い”とも言われる現象はやや沈静ムードになったとはいえ、化粧品や医薬品などの買い物消費額は依然高い。外国人旅行者受入数を数値で国・地域別に比較すると、2014年の1位はフランスの8,370万人で、次いでアメリカの7,476万人。日本は1,341万人で世界22位でしたが、2015年の数値で比較すると16位に上昇しています。陸路で行き来できる欧州と比べて、島国

の日本はハンデがありますが、その中では健闘していると言えます。日本の経済規模や、観光振興に必要とされている自然、文化、食、気候の4条件が揃っていることを考えると、まだまだ多くの旅行者を受け入れることは可能なのです。

明日の日本を支える観光ビジョン

訪日外国人旅行者数は、目標の2,000万人達成が目前となったことで、次の時代に向けた新たな目標が必要となりました。2015年11月に「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」を立ち上げ、3月にはその会議の中で「明日の日本を支える観光ビジョン」を示し、具体的な目標を打ち出しました。訪日外国人旅行者数と旅行消費額の目標として、2020年には4,000万人で8兆円、2030年には6,000万人で15兆円という数字を掲げています。こうした目標の達成のため、さまざまな取り組みを行っています。

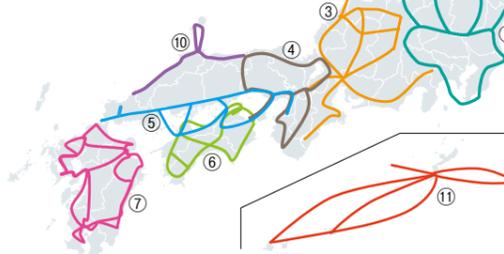
例えば、歴史や伝統にあふれる公的施設を大胆に一般向けに公開・開放し、観光資源として最大限に活用すること。2016年の4月から実施している赤坂迎賓館の一般公開は、その一環として行われたものです。また、戦後まもなくつくられ、60年以上続いている観光関係の各種規制を、現代に合った規制に抜本的に見直すこと。規制のひとつとして例を挙げると、訪日外国人旅行者に対し有償で案内をする国家資格の「通訳案内士」については、“業務独占”を廃止し、資格がなくても案内を認めることを早々に決め、急増する訪日外国人旅行者に対応しています。

広域観光周遊ルート形成促進事業(2015-16年に認定された11ルート)

[資料提供:観光庁]

訪日外国人旅行者の地方への誘客を図るため、複数の広域観光周遊ルートを認定し、地域の取り組みを支援していく事業。

- ① アジアの宝 悠久の自然美への道 ひがし 北・海・道 (プライムロード ひがし 北・海・道)推進協議会
- ② 日本の奥の院・東北探訪ルート(東北観光推進機構)
- ③ 昇龍道(中部(東海・北陸・信州)広域観光推進協議会)
- ④ 美の伝説(関西広域連合、関西経済連合会、関西地域振興財団)
- ⑤ せとうち・海の道(せとうち観光推進機構、瀬戸内観光ルート誘客促進協議会)
- ⑥ スピリチュアルな島—四国遍路(四国ツーリズム創造機構)
- ⑦ 温泉アイランド九州 広域観光周遊ルート(九州観光推進機構)
- ⑧ 日本のてっぺん。きた北海道ルート。(きた北海道広域観光周遊ルート推進協議会)
- ⑨ 東京回廊(仮称)(関東観光広域連携事業推進協議会)
- ⑩ 緑の道—山陰(山陰インバウンド機構)
- ⑪ Be. Okinawa 琉球列島周遊ルート(Be. Okinawa 琉球列島周遊ルート形成推進協議会)



その他にも、民間のノウハウを活用して、国立公園をより魅力的な観光地にすることや、地域固有の景観を観光資源として“守り”つつ、まちづくりを通して“活用”する取り組みを推進。地方と地方を結ぶ新幹線、LCC(格安航空会社)などの長距離交通網を活用し、全国各地に快適な旅の提供を実現する「地方創生回廊」の完備などの施策を、官民一体、関係省庁と連携しながら実施することとしています。

魅力的な観光地域づくり

訪日外国人旅行者数が増加する中、人口減少に伴って日本人旅行者数は減る傾向にあり、滞在日数も伸び悩んでいます。そうした状況から、休暇改革などの日本人向けの施策を進めながら、訪日外国人旅行者を地域に呼び込む仕掛けを両輪で進めていく必要があります。特に、魅力ある地域づくりは重要であり、観光庁としてもさまざまな施策を実施しています。例えば、訪日外国人旅行者を地方へ誘導するために、“広域観光周遊ルート”を認定し、認定後は地域の要望に沿って支援する「広域観光周遊ルート形成促進事業」を2015年に

観光圏整備実施計画(2013-15年に認定された13地域)

[資料提供:観光庁]

観光圏整備法(2008年制定)に基づき、自然・歴史・文化において密接な関係のある観光地を一体と捉え、区域内の関係者が連携して、観光客が滞在・周遊できる魅力ある観光地域づくりに対して、国が支援する事業。

- ① 水のカミイ観光圏—釧路湿原・阿寒・摩周(北海道:釧路市、弟子屈町)
- ② 富良野・美瑛観光圏(北海道:富良野市、美瑛町、上富良野町、中富良野町、南富良野町、占冠村)
- ③ ニセコ観光圏(北海道:蘭越町、ニセコ町、倶知安町)
- ④ トキめき佐渡・にいがた観光圏(新潟県:新潟市、佐渡市)
- ⑤ 雪国観光圏(新潟県:魚沼市、南魚沼市、湯沢町、十日町市、津南町、群馬県:みなかみ町、長野県:栄村)
- ⑥ ハッ岳観光圏(山梨県:北杜市、長野県:富士見町、原村)
- ⑦ 浜名湖観光圏(静岡県:浜松市、湖西市)
- ⑧ 海の京都観光圏(京都府:福知山市、舞鶴市、綾部市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町)
- ⑨ 香川せとうちアート観光圏(香川県:高松市、丸亀市、坂出市、普通寺市、観音寺市、さぬき市、東かがわ市、三豊市、土庄町、小豆島町、三木町、直島町、宇多津町、鏡川町、琴平町、多度津町、まんのう町)
- ⑩ にし阿波—剣山・吉野川観光圏(徳島県:美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町)



- ⑪ 豊の国千年ロマン観光圏(大分県:別府市、中津市、豊後高田市、杵築市、宇佐市、国東市、日出町、姫島村)
- ⑫ 「海風の国」佐世保・小値賀観光圏(長崎県:佐世保市、小値賀町)
- ⑬ 阿蘇くじゅう観光圏(熊本県:阿蘇市、南小国町、小国町、産山村、高森町、西原村、南阿蘇村、山都町、大分県:竹田市、宮崎県:高千穂町)

スタートしました。2016年現在11ルートを認定し、専門家の招へいや海外プロモーション、多言語表示、無料Wi-Fi環境の整備などを支援しています。ルートの1例を挙げると、中部北陸地域の「昇龍道」と称するルートは、中国人観光客に訴求するよう、能登半島を龍の頭に見立てるなど地形を印象付けながら、山岳景観や白川郷などの文化遺産の集落を周遊し、金沢では伝統工芸体験など、ものづくりを楽しむ彼らの嗜好を盛り込んでいます。その他の支援事業として「観光圏整備実施計画」があり、2、3日で周れる地域のまとまりを“観光圏”と呼び、全国で13地域を採択しています。また、自治体単位の支援事業として2015年に始

まった「地域資源を活用した観光地魅力創造事業」では、地域の観光資源を活かした着地型旅行商品[*]や体制づくり、二次交通の充実、ガイド養成などについて、全国各地の特色を持った地域を支援しています。今後は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに前後するように、2019年にはラグビーワールドカップ2019日本大会が全国の12都市で開催されます。また2021年には、アジア初の関西ワールドマスターズゲームズ2021が開催されるなど、訪日外国人旅行者の増加が期待できるイベントが続く予定なので、これを好機と捉え、継続的に全国各地の観光振興に取り組んでいきたいと思っています。 [談]

[*]着地型旅行商品
旅行者を受け入れる地域で独自につくられる旅行商品のこと。旅行先で参加するオプションツアーなどを指し、着地型観光とも言う。大手旅行会社などが企画する発地型旅行商品の対語

いとう・よしのり——観光庁観光地域振興部観光資源課観光資源活用推進室長/2014年7月、文部科学省から観光庁に出向し、外国人向けの広域観光周遊ルート形成やプロモーション事業(ビジット・ジャパン・キャンペーン)を担当。また、文化庁ではミュージアムや文化財保護、知的財産戦略本部でコンテンツ、クールジャパンを推進。

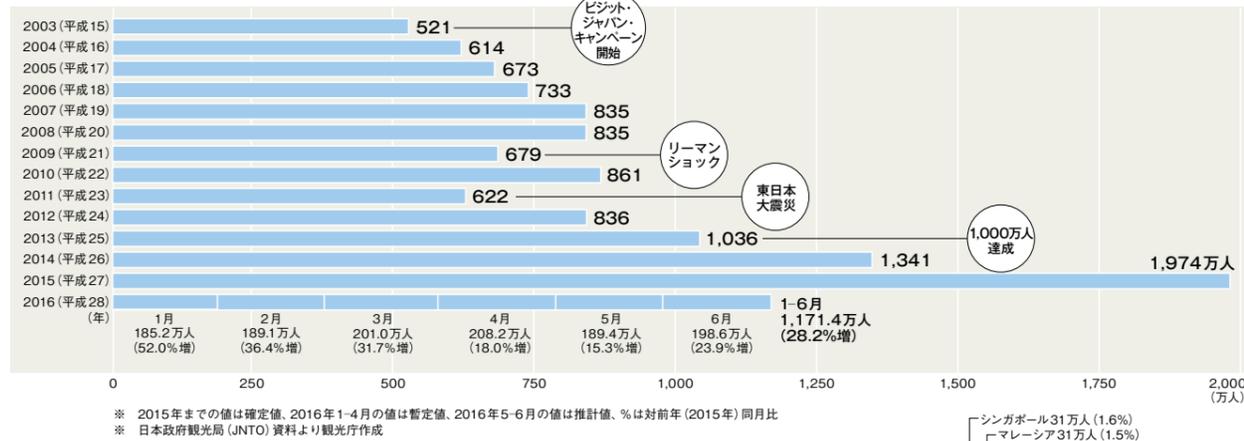
近年の訪日外国人旅行者の旅行動態

[資料提供:観光庁]

※ 「外国人」とは、日本国内に住所を有しないものを指す

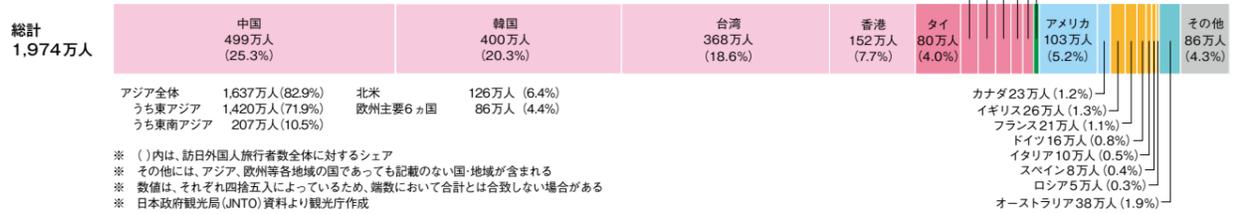
訪日外国人旅行者数の推移と国・地域別の割合

訪日外国人旅行者数の推移



※ 2015年までの値は確定値、2016年1-4月の値は暫定値、2016年5-6月の値は推計値、%は対前年(2015年)同月比
 ※ 日本政府観光局(JNTO)資料より観光庁作成

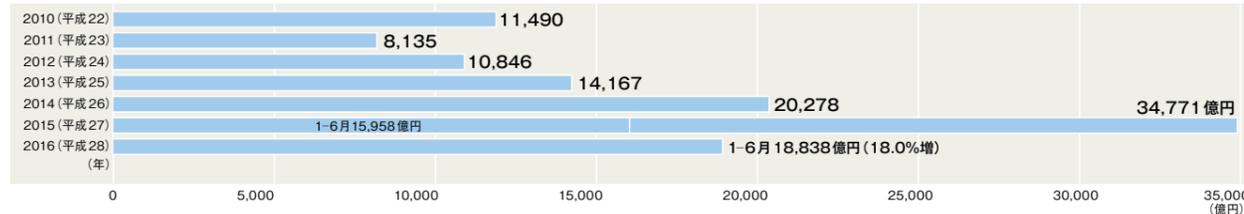
訪日外国人旅行者数および国・地域別の割合 (2015年)



※ ()内は、訪日外国人旅行者数全体に対するシェア
 ※ その他には、アジア、欧州等各地域の国であっても記載のない国・地域が含まれる
 ※ 数値は、それぞれ四捨五入によっているため、端数において合計とは合致しない場合がある
 ※ 日本政府観光局(JNTO)資料より観光庁作成

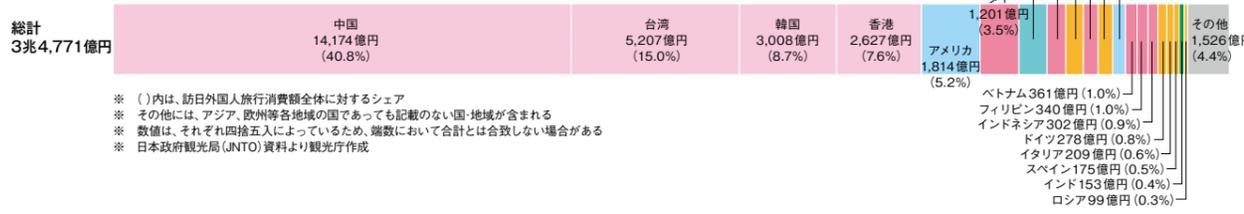
訪日外国人旅行消費額の推移と国・地域別の割合

訪日外国人旅行消費額の推移



※ 2016年第2四半期(4-6月期)の訪日外国人旅行消費額は前年同期比7.2%増の9,533億円、1人当たりの旅行支出は前年同期比9.9%減の15万9,930円となった。

訪日外国人旅行消費額および国・地域別の割合 (2015年)



※ ()内は、訪日外国人旅行消費額全体に対するシェア
 ※ その他には、アジア、欧州等各地域の国であっても記載のない国・地域が含まれる
 ※ 数値は、それぞれ四捨五入によっているため、端数において合計とは合致しない場合がある
 ※ 日本政府観光局(JNTO)資料より観光庁作成

日本の観光の動向 都道府県別日本人・外国人延べ宿泊者数 (2015年)

日本人延べ宿泊者数



日本人延べ宿泊者数
4億3,846万人泊

※ 都道府県名の後の赤字数字は順位

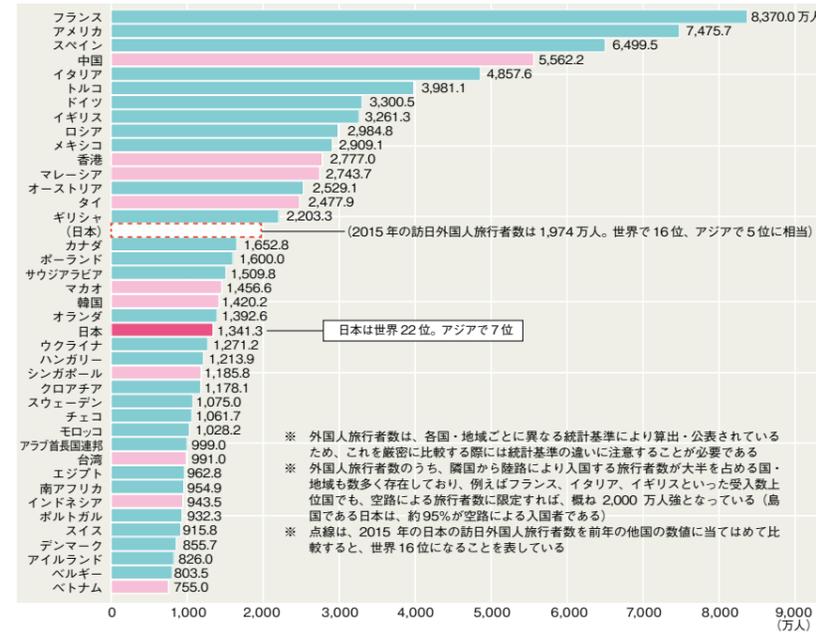
外国人延べ宿泊者数



外国人延べ宿泊者数
6,561万人泊

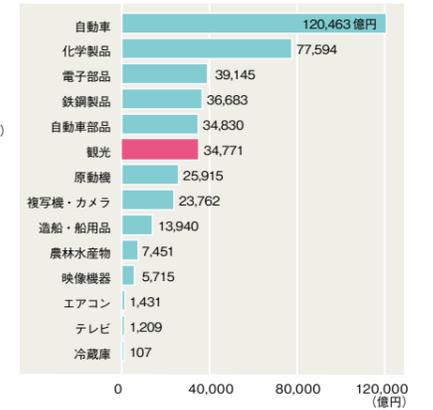
※ 都道府県名の後の赤字数字は順位

外国人旅行者受入数の国際比較 (2014年)



※ 外国人旅行者数は、各国・地域ごとに異なる統計基準により算出・公表されているため、これを厳密に比較する際には統計基準の違いに注意が必要である
 ※ 外国人旅行者数のうち、隣国から陸路により入国する旅行者数が大半を占める国・地域も数多く存在しており、例えばフランス、イタリア、イギリスといった受入数上位国でも、空路による旅行者数に限定すれば、概ね2,000万人強となっている(鳥国である日本は、約95%が空路による入国者である)
 ※ 点線は、2015年の日本の訪日外国人旅行者数を前年の他国の数値に当てはめて比較すると、世界16位になることを表している

訪日外国人旅行消費額の製品輸出額との比較 (2015年)



※ 観光、造船・舶用品および農林水産物以外の各製品の金額は貿易統計(財務省)より算出
 ※ 造船・舶用品の金額は2014年の値で、海事局データより算出
 ※ 農林水産物の金額は農林水産省公表値
 ※ 映像機器にはテレビの輸出額を含む

“脱観光的”観光のススメ

井口 貢

Mitsugu Iguchi

同志社大学政策学部・同大学大学院総合政策科学研究科教授

今こそ、“脱観光的”観光まちづくりを

「地方創生」という文言が、あたかも流行語のごとくかしましく昨今の社会の文脈の中で跋扈している。“観光”はその中で地域経済に大きな刺激を与える処方箋のひとつと捉えられ、即戦力としての役割が期待されている印象も強い。とりわけ、激増する外国人観光客数や“爆買い”現象等々メディアでの話題も事欠かない。もっとも爆買い現象などは、この原稿を記している時点では、早くも収束の靨も否めない。あたかも、即効的ですがすぐに役立つ処方箋は対処療法的であり、本質的には長く効き続けることができないように。

思うに豊かな観光(とりわけ、そのまちに住まう人が本当に自らのまちの観光を通して生き甲斐が感じられるような、そして次の世代にそれを伝えていきたいと心から思えるような観光)とは、即効的な経済効果を早急に求める手法では決して実現できないのではないだろうか。そのためにも、ステレオタイプな視点に立った、そしてモノカルチャー型の観光こそが克服されなければならないと感じている。誤解を恐れずに喩えて言うならば、入り込み観光客数(地域を訪れた観光客数)は多ければ多いほど観光の成果が上がったとするようなステレオタイプの思考。あるいは、困った時の“ゆるキャラ”、“B級グルメ”頼みで、これらを観光資源として地域をモノカルチャーで彩ってしまうようなことをよしとする着想。さらには、“コンテンツ・ツーリズム”という流行の文言を聞けば、マニアックなアニメの聖地巡礼しか思い付かずに、これをクールジャパンと礼賛する発想など[1]。こうした現象を全否定するわけでは決

してないが、ステレオタイプ型観光をオールタナティブに克服することこそが、私が言うところの“脱観光的”観光まちづくりの要諦である。換言すれば、経済と文化のディレンマの克服、あるいは文化と観光におけるチャージ(充電)とディスチャージ(放電)の円満な関係性の再構築。これこそが、地域という舞台上でまちづくりが果たさなければならない役割である。そして、舞台である以上、主役がいればバイプレイヤーも、あるいはエキストラも存在するに違いないが、それぞれがある意味で代替不能で果たすべき役割を持った貴重な存在であるということを明記しておきたい。

観光振興は観光客のためならず

「情けは人のためならず」とは古くからの諺であるが、これを少しもじってみた。すなわち、地域社会の中でいかに観光の在り方を、地域住民と来訪者という関係の中で考えるのかということである。1人でも多くの入り込み観光客数を創出するために、来訪者におもねるようなホスピタリティは、地域の人々はもちろんのこと、ひいては来訪者をもスポイルしかねず、リピーターにとって豊かに恵まれた観光であり続けることはできないのではないだろうか。「論語」によれば、孔子は「近くの者説びて、遠くの者来たれり」と語ったという。「私のまちは何も無いから、観光なんて駄目だ」という人がいるかもしれない。それもまた、ステレオタイプでしか“観光”を捉えることができなくなってしまうからだ。“観光まちづくり”とは日常の「知を愛し」、「地を愛する」ことを通して自らの

住まう「地域社会に対する矜持の念」を熟成していくことができるか否かが、その大きな試金石でもある。こうした「まちづくり」とその結果としての「観光」の実現こそが、まさに“近くの者の説び”(生き甲斐、暮らし甲斐、そしてさらには死に甲斐)となり、来訪者(遠くの者)をも惹き付けて止まない魅力のあふれるまちとなるに違いない。

観光とは

紡がれた地域文化の結果であり、継承と新たな創造のための目的でもある

観光とは、木で竹を接ぐように設えられて地域を活性化させるものでは決してない。故に観光という行為を、地域経済の波及効果を浅薄なまでに即効で得るための、単なる一手段としてもならない。暮らしの中で人々が、その喜怒哀楽と共に紡いできた生活文化の結晶を常在の文化資源の基底に据えながら、そこに共感の念を絶えず抱きつつ、矜持と共に次世代に伝え継承し、新たな地域文化の創造につなげていける行為こそが観光の目的である。

私が敬愛してやまない元金沢市長の山出保氏の言葉が、今も心に響き続けている。

「人はよく金沢を観光都市と言いますが、僕は反対です。観光都市というイメージは集客にだけた街であって、そこには深みを求めようとする真摯さが無い。だから僕は金沢を学術文化都市と言って欲しい。僕にとって観光都市というのは、学術文化を目標にして、それに触れたくて人がたくさん来て下さって、その結果として賑やかになっていく都市なんです。だから観光都市という



左 | 石川県金沢市の石川四高記念文化交流館：旧第四高等学校本館を活用し、東側の石川近代文学館、西側の石川四高記念館で構成されている。旧第四高等学校は、明治25年[1892]に開校し昭和25年[1950]まで使用された。その後、金沢大学理学部、金沢地方裁判所、石川県立郷土資料館、石川近代文学館を経て、2008年に石川四高記念文化交流館となった。初期公立学校として貴重な建物で、構造および形式は、煉瓦造2階建煉瓦葺、正面玄関付きで、建築面積1,068m²。国の重要文化財となっている【提供：金沢市】
右 | 滋賀県近江八幡市の八幡堀：天正13年[1585]、豊臣秀次が八幡山に城を築き開町した際に出た全長4,750mの堀。水上交通路や生活の場として長らくその役目を果たしてきたが、昭和の高度成期には荒廃し公害源となった。観光目的ではなく地元のために、まちの歴史が詰まった堀を守りたいという思いから、昭和47年[1972]に近江八幡青年会議所が復元を呼びかけ、その後、市民による保存運動へと進展。回復を遂げた現在も、八幡堀を守る会、地元自治会、観光物産協会、観光ボランティアガイド協会などが清掃活動を続けている【提供：滋賀県】

のは結果であって、目標であってはいかんのです」[2]。

あえて補足をしたい。どのまちでも学術文化を目指すわけではもちろんない。金沢の学術文化は少なくとも加賀藩前田家の文化政策を、藩士たちのみならず町人、職人、農民ほか多くの普通に暮らす普通の人々が、日々の中で喜怒哀楽を乗り越えつつ、一定支持してきた結果であり、それが近現代以降の市民たちにも、ひとつのエートス(慣習化された住民気質)として継承されてきたからではないだろうか。

金沢のエピゴーネン(模倣者)を目指すのでは決してなく、地域の独自の歴史性に学び、そのまちの固有の文化性と精神を尊重する思いこそが、観光とまちづくりにおいて、どのまちも等しく学ばなければならない哲学であるということを出氏は伝えようとしているのだと思う。そのためにも、私は「史心」、「誌心」、「詩心」という人文知の根幹とも言える3つの心を大切にすべきであると常日頃考えている[3]。

22世紀に生きる子どもたちに地域の観光を伝える

すでに上記した“死に甲斐”という言葉について最後に考えたい。“生き甲斐”

に対して決して耳触りが良い言葉とは言えないかもしれないが、これは滋賀県におけるまちづくり観光の嚆矢となった、近江八幡市の「八幡堀保存修景運動」(1970年頃に端を発する)の過程の中で、指導的役割を果たした川端五兵衛氏の造語である[4]。

簡単に要旨を記すとすれば、それは“生き甲斐”や“働き甲斐”などの総決算であり、人々がこのまちで生まれ、あるいは暮らし、温かい思い出と共に死ぬことができ幸福であったと思えるまちでありたい、そんなまちづくりをしたいという思想がそこにある。

観光という行為は、地域教育・郷土教育におけるいわばひとつのコアカリキュラムとして捉え、22世紀に生きる子どもたちに伝えていくことこそが、川端のこの思想に込めることになるだろう。子どもたちが、「私たちのまちには何もない」という諦念や、あるいは「観光とは来訪者にいかにお金を落とさせるか」などという誤解に陥らないようにしたいと切に思う。そのためには、郷土への矜持の念と、そこに住まう人々への思いやりの念、そしてまちと人々への「誠実さ」([1]で宮本常一も言うように)を忘却しない心、これを彼らが自ら育むことができ、さらに22世紀に生きるであろう彼らの子どもたちに伝えることがで

きる内発的・自律的観光こそが、“脱観光的”観光の真髄ではないだろうか。

[1] 希代の碩学(せきがく)、柳田國男[1875-1962]がおおよそ100年前に記した一節を私たちは今一度、地方創生と観光を考えるためにも、看過してはならない箴言(しげん)として受け止めるべきであろう。さらに言えば地域経済と地域文化との有機的関連性を内発的な視点に立つて、自律的に希求していくことの必要性を訴えた柳田の名言でもある。「現在日本の経済事情は決して一朝に発現したものではないこと、我が国のごとく交通の緻密な人口の充実した猫が屋根伝いに旅行し得るような国でも地方到る処にそれぞれ特殊なる経済上の条件があつて流行や模倣では田舎の行政はできぬ……」(『時代と農政』[聚精堂/1910]、後に『柳田國男全集29』[筑摩書房(ちくま文庫)/1991]に所収)。その柳田を敬愛した旅の民俗学者であり、我が国の観光文化研究の嚆矢をなした宮本常一[1907-81]の次の指摘も付記しておきたい。「観光資源というものはいたるところに眠っておるものです。それを観光対象にするしかたに問題があるのだ」(『九州の観光資源とその将来』[宮本常一著作18] [未来社/1975])。また、宮本が同書で記した「(観光客に)こびるのではなく、誠実さというものが大事になってくる」という指摘は、私が本稿「観光振興は観光客のためならず」で記した主旨と通じるところである
[2] 『學都』創刊1周年記念巻頭プレミアムトーク「街づくり理念に共鳴するプロの思想」で発言。「學都(都市環境マネジメント研究所)」第5号,2003.10
[3] 井口貢「くらしのなかの文化・芸術・観光—カフェでくつろぎ、まちつむぎ」井口貢著[法律文化社/2014]、「観光学事始め—「脱観光的」観光のススメ」井口貢編著[法律文化社/2015]
[4] 「まちづくりはノーサイド」かわばたごへえ著[ぎょうせい]1991

いくち・みつぐ——同志社大学政策学部・同大学大学院総合政策科学研究科教授/1956年生まれ。岡崎女子短期大学、岐阜女子大学、京都橘女子大学を経て、2007年より現職。専攻は文化政策学、観光文化論。

飛騨地域に残る里山文化を活用したツーリズム クールな田舎創出への挑戦

岐阜県飛騨市

飛騨古川は飛騨高山の北隣に位置し、鯉が泳ぐ瀬戸川と白壁土蔵で有名なまち。世界遺産の白川郷にも近く、郊外には美しい里山風景が広がっている。

世界最大の旅行サイト「トリップアドバイザー」で、岐阜県飛騨地域の屋外アクティビティ部門1位に選ばれ、500件以上の口コミ数で他を圧倒しているのが、飛騨古川に拠点を置く観光コンサルタント・美ら地球が運営するエコツアー「SATOYAMA EXPERIENCE」だ。美ら地球は、日本の田舎に残された伝統文化や風景を守り、世界中の人々が訪れたいくなるようなクールな田舎をつくることを目的に2007年に設立。代表の山田拓、慈芳夫妻は、30歳前にそれぞれの仕事を辞め、足掛け2年間、夫婦で世界の秘境を旅して周った。各地で体験したエコツーリズムに感動し、ぜひ日本でもやりたいという思いを抱き、帰国。縁あって飛騨古川に根を下ろした。

2010年にスタートさせた「飛騨里山サイクリング」は飛騨地域で最も人気のサイクリングツアーで、鮎の採れる清流、茅葺き屋根の古民家、酒米の田んぼ、飲み水として利用している湧水地、農産物の直売所、飛騨牛の牛舎などがコースに入っている。社員全員が英語を話し、参加者の7割が外国人。文化や歴史についての丁寧な解説やホスピタリティが人気で口コミが広がり、参加者は2015年で延べ3,000人を超えた。近年では、参加者の要望から飛騨高山で地元のを訪ねるまち歩きツアーなども行っている。2012年に総務省の地域づくり総務大臣表彰、2013年にグッドデザイン賞、2014年には環境省のエコツーリズム大賞優秀賞を受賞した。インバウンドツーリズムがようやく形になってきたところで、ツーリズムに携わる人材育成や、飛騨の匠の技を受け継ぐ木造建築をメンテナンスするボランティア活動、古民家をオフィスとして利用する「里山オフィス」の試み、飛騨を学ぶトークセッションを開催するなど、クールな田舎創出への挑戦を加速させている。[文責：編集室]



- 1 JR高山線飛騨古川駅前の風景：駅隣にある飛騨市文化交流センターと保健福祉センター
- 2 飛騨古川を代表する景色：約400年前に新田開発のためにつくられた用水は瀬戸川と呼ばれ、現在は鯉が泳ぎ、白壁土蔵と共に観光の目玉となっている
- 3 飛騨古川のまち並み：伝統的な木造建築の町家が軒を連ね、新しい建物も周囲と調和するように建てられている。1985年に「古川町景観デザイン賞」の制度を設け、美しいまち並み保全に力を入れている
- 4 清流・宮川の流れ：飛騨を流れる宮川では大振りの天然鮎が釣れるため、全国から多くの釣り人が集まる。サイクリングツアー中に、ガイドから鮎漁について写真入りのパネルを使った解説などもある
- 5 茅葺き屋根の古民家：サイクリングツアーでは、自転車・歩行者専用道路を走り、古川町にある伝統的な茅葺きの古民家を訪ねる
- 6 湧水地：地元の人が汲みに来る湧水地で参加者たちも休憩
- 7 里山オフィス：2012年から地元工務店と組んで、空いている民家をレンタルオフィスとして利用している

明治の建築物を現代によみがえらせた美しいまち並み 産業遺産を観光資源として活用する小坂町の取り組み

秋田県鹿角郡小坂町

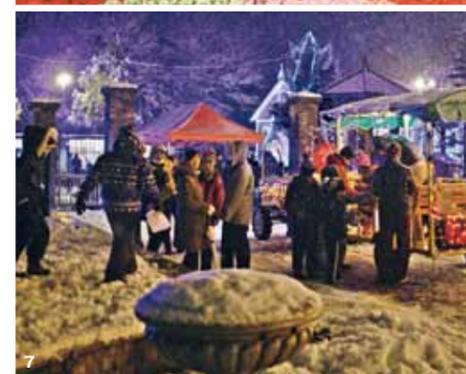
秋田県の北東部に位置し、十和田湖の西湖畔を有する小坂町。明治時代に鉱山のまちとして栄え、最盛期の大正時代に2万人以上だった人口は現在5,500人ほどになり、高齢化も深刻だ。そんな小坂町で、“町全体が博物館”のような美しいまちづくりを推進するエコ・ミュージアム構想のもと、約30年前から産業遺産を活用した取り組みが行われている。

明治時代、小坂鉱山は栃木県の足尾鉱山・愛媛県の別子鉱山と共に「日本三大銅山」と称され、鉱産額で全国1位になるなど、目覚ましい発展を遂げてきた。しかし、昭和に入り戦後になると円高やオイルショックの影響で事業が縮小し、昭和60年代には閉山も相次いだ。そのような中で、小坂鉱山の福利厚生施設として建設された明治期の木造芝居小屋「康楽館」の取り壊しの話が持ち上がる。これに対し、町内外から保存を望む声が多く上がり、小坂町では所有者である同和鉱業（現・DOWAホールディングス）から無償で譲り受け存続することにした。それもただ修復保存するのではなく、現役の芝居小屋として1986年に再開し、以来、ほぼ毎日公演を行っている（冬季は休業）。これが、産業遺産を観光資源とするまちづくりの契機となり、1995年、「康楽館」の前面道路を石畳などでモダンな通りに整備した「明治百年通り」が完成。2001年には、国土交通省の「まちづくり総合支援事業」の補助を受け、鉱山のシンボルでもあった洋風建築の小坂鉱山事務所を「明治百年通り」沿いに移築・復原するなど、継続的な取り組みで、歴史的価値の高い建物を壊すことなく活用し、他にはない美しいまち並みが形成されていった。最近では、これからの観光の在り方を見据え、廃線となった鉄道を利用した体験学習型の遊びの複合施設「小坂鉄道レールパーク」を2014年に、翌年には町民と観光客の交流拠点「小坂町赤煉瓦にぎわい館・赤煉瓦倶楽部」をオープン。歴史を受け継ぎながら新しいまちの魅力を創出している。

[文責：編集室]



- 1 小坂鉄道レールパーク：明治41年[1908]に開通した小坂鉱山専用鉄道を活用している。写真奥の青い列車は寝台特急「あけぼの」24系客車を活用した宿泊施設
- 2 康楽館：常設公演の常打（じょううち）芝居をはじめ寄席や文楽などが催される。毎年、松竹大歌舞伎も公演され多くの人で賑わう。建物はほぼ建築当初のままで、明治の舞台の雰囲気が残っている。国の重要文化財
- 3 同内観：日本最古級の和洋折衷の木造芝居小屋
- 4 小坂町赤煉瓦にぎわい館・赤煉瓦倶楽部：明治37年[1904]に建築された電気室「旧小坂鉱山工作課原動室」を移築・復原した。カフェで名産のハチミツを添えたコーヒーなどが楽しめる
- 5 小坂鉱山事務所：明治38年[1905]に建てられた小坂鉱山の事務所。ルネサンス風の外観、正面中央のサラセン風バルコニー付きポーチなどが特徴的な近代化産業遺産の観光施設で、国の重要文化財
- 6 天使館：小坂鉱山の従業員の子どものために建てられた、キリスト教に基づく元保育園。昭和7年[1932]建築。国の登録有形文化財で、見学のほか施設の貸し出しも行っている
- 7 クリスマスマーケットの様子：小坂町は、明治初期、ドイツ人技師により日本で初めてクリスマスを祝った近代クリスマス発祥の地。12月には記念イベントが開催され、天使館横にマーケットが並ぶ[提供：小坂町]
- 8 明治百年通り：アカシア並木の通り沿いには、産業遺産の観光施設が立ち並び、東北で初めて国の「美しいまちなみ大賞」を受賞した



観光・学習・交流ができるミュージアム「TAKAO 599 MUSEUM」 観光を人気スポットから周辺地域へと波及させていく

東京都八王子市

日本一登山者数の多い山と言われている高尾山。2007年、「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」で三つ星に認定されてからは外国人観光客も大幅に増え、年間約300万人が訪れる。2015年には、建築家・隈研吾氏デザインの京王線高尾山口駅駅舎リニューアルや同駅隣接の日帰り温泉がオープンしたほか、「TAKAO 599 MUSEUM」が開館。回遊性が高まり登山だけではなく、地域の魅力を発信している。

「TAKAO 599 MUSEUM」は、高尾山のふもと、東京都高尾自然科学博物館跡地に出来た八王子市の観光拠点施設。博物館機能の継承を条件として、東京都から八王子市が同博物館の収蔵品と跡地の移管を受けた。2014年、江戸川大学教授の鈴木輝隆氏を座長に、学識経験者や地元住民、関係団体などからなる「高尾の里拠点整備あり方検討会」を設立。従来のような博物館ではなく、多くの人が訪れたいような親しみのある施設づくりを目指し会議を重ねていった。

施設の総合ディレクションには、同検討会のアドバイザーで日本デザインセンターの大黒大悟氏らも参画し、施設のネーミングから建築空間、展示、サイン、フォントに至るまで、「TAKAO 599 MUSEUM」独自のデザイン・コンセプトで統一。洗練された意匠が特徴となっている。館内は、高尾山の生態系をテーマにした展示や登山案内のほか、カフェや無料の休憩スペース、遊び場など、くつろぎの空間を演出。登山をする人もしない人も楽しめ、自然と高尾山についての知識が身に付く仕組みになっている。まだ登山は難しい乳幼児を連れた家族やデザインに興味のある若い人たちの姿も見られ、休日には約2,000人が訪れるほどの人気だ。

八王子市には高尾山の他にも八王子城跡や滝山城跡など魅力的な観光地が多くある。今後は、高尾山のあるまちとして「TAKAO 599 MUSEUM」から情報発信し、八王子市の認知度を高め、地域全体の観光へと波及させていこうとしている。

[文責：編集室]



- 1 京王線高尾山口駅駅舎：1967年に開業し、約50年を経て2015年春にリニューアル。内外装はスギ材を用いて大和張り、羽目板張り、小端立て張り、千本格子といった木組みで仕上げている
- 2 高尾山口観光案内所「むさびハウス」：京王線高尾山口駅駅舎の改築に合わせ、2015年に同駅舎内にリニューアルオープン。高尾山だけでなく、八王子市内全体の見どころや物産の情報など、幅広く案内している。外国からの観光客のために、多言語を話すスタッフが常勤している
- 3 5か国語のパンフレット：TAKAO 599 MUSEUMでは、インバウンド対応として英語・中国語・韓国語などのパンフレットを用意しているほか、ホームページは7か国語で閲覧できる。毎日、いろいろな国の観光客が訪れる
- 4 TAKAO 599 MUSEUM・映像展示：壁面に展示した剥製と映像を重ね合わせるプロジェクションマッピングの手法により、四季折々の生態系を紹介している
- 5 同キッズスペース：高尾山の起伏を再現した3歩で登れる遊具「PLAY MOUNTAIN」。まだ登山ができない子どもも、気軽に高尾山に触れられる
- 6 同1階：開放的な展示空間。中央の展示室には、アクリル樹脂に封入された高尾山の草花、羽ばたく姿を再現した昆虫標本などが並ぶ。2階は市民ギャラリーになっている
- 7 同外観：高尾山を背景に、建物前には水遊び場もある芝生の広場が広がる。入場は無料。京王線高尾山口駅に近く、登山の行き帰りにも気軽に立ち寄り、災害時の避難場所としての機能も持つ

「ロボットの街つくば」で近未来のまちを体験 モビリティロボットの活用でシティプロモーションを図る

茨城県つくば市

ショッピングモールで買い物を済ませ、外に出てスマートフォンで呼び出すと、ものの数分で卵型のモビリティロボットが迎えに来てくれる。それに乗り込み、次の目的地を入力すると自動運転で連れて行ってくれる。そんな未来が近いと思わせるのが、「ロボットの街つくば」だ。

人口約23万人。我が国最大の研究開発拠点であるつくば市は、ロボット研究の集積地でもあることから、2009年に「ロボットの街つくば」が提言され、さまざまな支援事業を行っている。2011年に内閣府から「つくばモビリティロボット実験特区」の認定を受け、大学や企業、研究機関をメンバーとした「つくばモビリティロボット実証実験推進協議会」を中心に、モビリティロボットを公道で走らせる実験がスタート。主に、社会的有効性、歩道空間を走る上での歩行者との親和性、安全性の検証を目的に実験を積み重ねてきた。最も懸念された安全性についても、きちんと訓練すれば事故はないことが分かった。

一般の人が参加できる「セグウェイツアー」は、60分の講習を受けて、90分走行する約2時間半のツアーで、料金は9,000円。2015年の参加者は約400人で、「ゆっくり移動するので、普段とは違った景色を楽しむことができる」、「観光名所にもう一つ付加価値を付けるのに最適」、「名所が点在し、歩くにはちょっと距離があるので取り入れたい」、「地域の魅力を伝えるにはちょうど良い速さだ」など概ね好評を得た。自治体の関心が高まる中、ロボットの観光への活用方法などを含めた「モビリティロボットスタートアップ応援事業」も始まった。

「ロボットの街つくば」事業は、社会に役立つロボットの発信を目的とし、モビリティロボットのパイオニアとしてシティプロモーションを図ることで、シビックプライドにつながるものと捉えている。今後は、走行できる場所を増やしながらか、「いつでも、どこでも、だれでも」利用できることを目指して、さらなる規制緩和を促していく。

[文責：編集室]



- 1 「ロボット実験区間」を示すフラッグ：エリア内のあちこちで見かけることができ、風景の一部になっている
- 2 座り乗り型のモビリティロボット「ロビッツ」：日立製作所が開発中の1人乗りロボットで、最高時速9.5km
- 3 つくばエクスプレスへの乗車実験：モビリティロボットと公共交通との連携で、シームレスな移動と、低炭素交通システムの可能性を拓く
- 4 セグウェイツアー：約2時間半のツアーでは、休憩時間に特産品の福来（ふくれ）ミカンを使った和菓子が振る舞われ、地元の名物をさりげなくアピール
- 5 防犯パトロール：2週間に1回の割合で決められたコースをパトロールする。時速10kmで、移動範囲も広がり、目立つため人々の視認性が高まり、走っているとよく子どもたちが寄ってくる
- 6 立ち乗り型のモビリティロボット「ウイングレット」：2013年に行われた走行実験の様子。つくば市長を先頭に、市の職員と開発したトヨタ自動車社員が搭乗した
- 7 筑波学院大学の学生による活動：児童の見守りやゴミ拾い活動にモビリティロボットを使用 [提供1-7：つくば市]

多機能というひとつのもの

谷尻 誠
Makoto Tanijiri

“材料”とは、あるものをつくる時、もともと用いるもの、と辞書には書かれている。材料でなかったものが材料になる瞬間について考える時、また材料を自然とカタログなどから選んでいる自分に気付いた時、もともと用いるものについて、より深く考えなければと自分に言い聞かせた。

先人たちは、自分のつくりたいものをつくるためには、何を用い、どのような工法でつくるべきなのかということについて、あらゆる側面から考えながらつづけていたのではないだろうか。一方で現代に生きる僕たちは、つくりたいものつくり方が先人によって示唆され、材料をカタログから選ぶという、誰かがつづけたものをお借りすることで建築をつくってしまっていないだろうか。

それを繰り返しては、未来での建築の可能性をひらいていくことに限界があると感じたのは数年前のこと。もちろんすべてとはいかないけれど、ものをつくる上で、根本から考える癖を付けなければと最近では考えるようになった。

そんな意識で、建築のことを考えながら生活していると、ふと日常と建築が結び付いた瞬間がある。

最近ではどこに行っても携帯電話を片手に電車に乗ったり、まちを歩いたり、食事をしたりする人々を目にする。

携帯電話が世の中に出てきた時には、まさに携帯電話だと言わんばかりの、ショルダーバッグのような肩紐が付いていて、荷物とも言えるような様だったことが記憶にある。

その時は名前のとおり、電話を持って歩いていたわけだ。

写真が撮りたければ重たいカメラを持っていたし、音楽を外で聞くならばウォークマン(古くて分かりにくいかもしれない…)だったし、お金は財布に入れて持ち歩き、メールの送受信は自宅に帰って行かなければならなかった。

それが今や携帯電話は、それらの機能を内包し、かつとてもコンパクトな形態として成立している。

携帯電話というのは名ばかりで、電話でありながらも、メールの送受信やインターネットができるPCのようでもあり、写真を撮ることもでき、音楽も聞けるし、財布の役割だって果たしているし、計算機の機能も含まれている。

きっとこれはテクノロジーが可能にしたことで、テクノロジーによって、ひとつでありながらも多様な機能が実現できる現代があるようにも感じている。

では、建築はどうだろうか。

見積書を見れば、相変わらず昔から項目数は変わらないし、柱は柱として、壁は壁として、仕上げは仕上げ、窓は窓と、昔の携帯電話やカメラのように、セグメントされたまとも見て取ることができる。

携帯電話のように、テクノロジーの進化によって、建築の多数の機能をひとつに統合できる、そんな材料が存在しないものかと考えていた時に、ふとひとつのことを思い付いた。

「広島の小屋」は、敷地周辺は山に囲まれた場所にあり、クライアントは透明感のある開放的な建築を望まれていた。

そこで我々は、40mm厚の亚克力で四方が囲まれた空間を提案することにした。

ガラスよりも透明度の高い亚克力を構造体として用いることで、風景との関係をつくること、構造的役割を負担すること、断熱の性能を確保することを、1つの材料で実現することを考えた。

透明な材料が、屋根を支える柱、耐震要素を負担する構造壁、断熱材、サッシなどの機能を備え、あたかも屋根が風景の中に浮遊しているかのような新しい建築をつくることを可能とした。

何かをつくる時に用いるもの、その多様性を携帯電話という存在から導き出し、建築に翻訳したことで、「広島の小屋」という新しい建築の可能性を生み出すことができたのではないだろうか。

こんな話を最近聞いた。

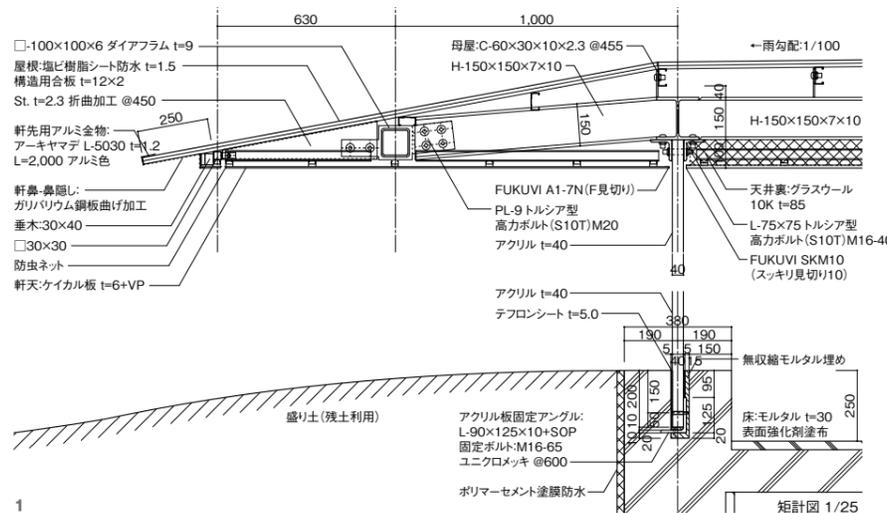
外国人から友人は言われたとのこと。

Japanese like studying history.

But I want to make history.

過去の先人たちの思考に敬意を払い、その先人たちと同様にあらゆる方法についてクリエイティブすること。

友人の話を聞きながら、歴史をつくる意識で建築に向き合いたいと強く今は思う。



広島の小屋 [2014]

1 矩計図:40mm厚の亚克力が構造体として屋根を支えることで、柱のない空間が成立している[提供:SUPPOSE DESIGN OFFICE]

2 南面全景:亚克力を構造とし、間仕切りにエキスパンドメタルを採用することによって、屋根が浮遊しているかのような印象を与える

3 キッチンを見る:底は2mと深く、日差しを遮り、透明でありながらも室内の快適性を確保している

4 夜景:夜になり室内の照明をつけると、透明で浮遊感のある空間がより一層際立つ[写真2-4:矢野紀行]

たにじり・まこと——建築家・SUPPOSE DESIGN OFFICE 代表取締役/1974年生まれ。穴吹デザイン専門学校卒業後、設計事務所勤務を経て、2000年、SUPPOSE DESIGN OFFICE 設立。2014年より吉田愛と共同主宰。
主な作品:毘沙門の家[2003]、今治のオフィス[2013]、ONOMICHI U2 [2014]、松原の家[2014]、BOOK AND BED TOKYO [2015] など。

TOPICS

「HOUSE VISION 2 2016 TOKYO EXHIBITION」に LIXIL が出展



「凝縮と開放の家」を テーマに建築家・ 坂 茂氏と コラボレーション

LIXIL HOUSE VISION 2016 プロジェクトチーム

「HOUSE VISION」について

LIXILは2016年7月30日-8月28日に、東京お台場で開催された「HOUSE VISION 2 2016 TOKYO EXHIBITION」において、「凝縮と開放の家」をテーマとしたエキシビションハウスを、建築家の坂 茂氏と共に出展しました。

「HOUSE VISION」は、2011年、デザイナーの原研哉氏を中心に、「新しい常識で都市に住もう」を理念に掲げ、現在の住生活の先にある日本人の暮らし方を具体的に提示するためにつくられた、情報発信と研究のプラットフォームです。研究会やシンポジウム、書

籍、展覧会などさまざまな方法で、住まいの“新しい常識”を発信しています。2013年に続いて、2回目の東京開催となる今回の「HOUSE VISION 2 2016 TOKYO EXHIBITION」のテーマは、「CO-DIVIDUAL 分かれてつながる／離れてあつまる」。これ以上分けられないというのが“Individual”ですが、“個”は、情報、物流、セキュリティサービスによって新たなつながりを生み出していきます。今後迎える少子高齢化、人口縮小の時代における個と個の連携に目を凝らしながら、潜在する未来の可能性を構想し、具体的な形に結実させて提案しました。

「HOUSE VISION 2 2016 TOKYO EXHIBITION」全体展示

全体の会場構成は2013年に引き続き、建築家の隈研吾氏が手掛けました。今回もエントランスや広場、通路にはスギ材が8,000本も使われ、展覧会終了後には再利用される計画です。

1. 冷蔵庫が外から開く家
(ヤマトホールディングス×柴田文江)
2. 吉野杉の家
(Airbnb×長谷川 豪)
3. の家
(Panasonic×永山祐子)
4. 棚田オフィス
(無印良品×アトリエ・ワン)

5. 遊動の家
(三越伊勢丹×谷尻 誠・吉田 愛)
6. 賃貸空間タワー
(大東建託×藤本壮介)
7. 凝縮と開放の家
(LIXIL×坂 茂)
8. 市松の水辺
(住友林業×西島清順×隈 研吾(会場構成))
9. 木目の家
(凸版印刷×日本デザインセンター 原デザイン研究所)
10. 内と外の間／家具と部屋の間
(TOTO・YKK AP×五十嵐 淳・藤森泰司)
11. グランド・サード・リビング
(TOYOTA×隈 研吾)
12. 電波の屋根を持つ家
(カルチュア・コンビニエンス・クラブ×日本デザインセンター 原デザイン研究所(展示デザイン)×中島信也(映像制作))

- 冷涼珈琲店一煎
(AGF×長谷川 豪)

LIXIL×坂 茂「凝縮と開放の家」

LIXILは前回に引き続きでの出展になりますが、経営統合から6年を経た今回の取り組みは、メーカーとしての技術イノベーションを基軸にして、水まわりおよびハウジングの先進技術開発プロジェクトチームと連動したものとなりました。加えて、低コストで軽快な家を考える建築家・坂 茂氏との絶妙なコラボ

1 LIXIL×坂 茂「凝縮と開放の家」全景
2 エントランス
3 会場全景
4 展覧会会場 全体プラン
[©HOUSE VISION | CG: 橋本健一]



5 風呂、トイレ、キッチン、洗面などの水まわりと、空調などの電気設備が集約され、自由に配置できる「ライフコア」
6・7 浴槽は、使用していない時は壁面に格納されている

レーションにより、住宅建設のプロに頼らなくても生活者の誰もが気軽に手に入れられる。新しい考え方の住まいづくりを提案することができました。

● PHP パネルによる開放的な骨組み
建屋は、棚や机などに使われる、ペーパーハニカムを合板で挟み込んだ“PHP パネル”という、シンプルでありながら強度と軽さを兼ね備えた新しい素材を用いて建てられました。坂氏による全く新しい着想の建築構造です。軽くて丈夫なPHP パネルでつくられた“家形”のフレームを土台に取り付けることで、あっという間に基本の骨組みは完成します。このフレームが建築を支える構造体になるため、室内空間には太い梁も大きな柱もありません。敷地を最大に活かした、開放感のある空間が生まれました。また、軽くて丈夫なPHP パネルはロー

コストでの輸送が可能です。短い工期で簡単に建てられるため、災害時の仮設住宅としても活用され始めています。一方、外壁と屋根は防水性のあるテント膜の素材をジッパーで固定するという斬新な発想で、まるで家が洋服を着ているようにジッパーで脱着でき、好きな色や柄をプリントすることも可能です。

● 水まわりを凝縮した「ライフコア」
風呂・トイレ・キッチン・洗面、さらには照明・換気・空調までもひとかたまりに凝縮させ、給排水や電気配線を床下や壁内ではなく上方に処理する、画期的なシステムユニットを考案しました。また“風呂とトイレ”、“トイレと洗面”、“風呂とトイレとキッチンと洗面”など、暮らしに合わせてユニットを選ぶことも可能です。生活の核となる機能を集約したこのテクノロジーは、「ライフコア(LIFE CORE)」とも呼ぶべき機構です。こ



のシステムを使用すれば、建築の構造・工法を単純化でき、住み手も設計にかかわることが可能となり、施工にも特別な技術が不要となります。既存のインフラ配管にとらわれないため、大掛かりなリノベーションや、オフィスをマンションに、学校をホテルに、といった建物の用途変更に一層威力を発揮し、時代や社会の変化への対応も可能になります。

● 暮らしを開放する「開・空間」
LIXIL は人と自然をつなぎ、暮らしを広げ、開放する空間づくりにも取り組んでいます。大きな開口部が実現する快適で豊かな暮らしを、「開・空間」という新しい考え方と革新的なデザインとテクノロジーで実現しました。建物正面左側の大きなガラス窓は、水平になるまで跳ね上げることができます。また右側のガラス窓は、半分スライドさせた位置で90度回転させることで、家の側面に収納する機構を取り入れました。窓をすべて開け放つと、デッキと室内が遮るものなくひとつにつながった大きなリビングが現れます。古き良き日本の縁側にあつた雨戸や蔦戸を思わせつつも、世界の現代建築に向けた暮らしの豊かさを提案しています。

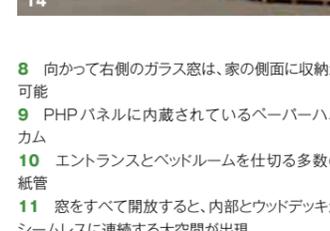
● 家を引き立てる周辺建材
リビングと一続きになったデッキは、

大きな開口部の役割を倍増させます。スッキリとして、かつ操作しやすい玄関ドアや、アルミニウムの型材を利用したカーポート庇なども、LIXIL の技術の粋を結集して具現化しました。

● WEB で家の設計が可能に
パネルやユニットなどを駆使したシンプルな建築構造システムのため、住み手自身が簡単にWEB で広さや間取りをアレンジし、見積もり計算ができることを想定しています。

最後に

建築やデザインにかかわる方々も多く来場されるこの展覧会で、「凝縮と開放の家」が画期的な提案として評価いただけたことは、私たちにとって大変な励みになりました。LIXIL は、これからもより良い暮らしを創造するチャレンジを続けます。水まわりとハウジングの技術イノベーションを通じた私たちの新たな価値創造を、社会に向けて提案し、社会とのコミュニケーションの中から事業の未来を追求していくことが、私たちメーカーの使命だと確信しております。



8 向かって右側のガラス窓は、家の側面に収納が可能
9 PHP パネルに内蔵されているペーパーハニカム
10 エントランスとベッドルームを仕切る多数の紙管
11 窓をすべて開放すると、内部とウッドデッキがシームレスに連続する大空間が出現
12 写真右手の玄関ドアは、ハンドルをなくしたスタイリッシュなデザイン
13・14 多くの方が見学に訪れ、活発な意見が交わされた

[1・5-8・10・11: ©HOUSE VISION | 写真: Nacasa & Partners Inc.]

「LIXILビジネス情報サイト」のご案内

http://www.biz-lixil.com/

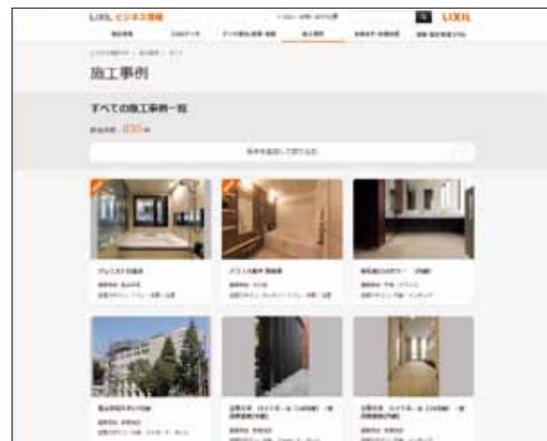
施工事例紹介ページをリニューアルしました

LIXILのビジネスユーザー向けポータルサイト「LIXILビジネス情報サイト」のご案内です。

LIXILの豊富な商品について、ビジネスのお役に立つ情報をタイムリーに掲載しています。トップページの機能別メニューから、新商品情報、2次元・3次元CADデータ、BIMデータ、商品画像データ、提案・見積書、取付・取扱・施工説明書などの各種データ提供や、カタログの閲覧・請求など、お探しの情報にスムーズにアクセスしていただけます。

また2016年10月より、施工事例紹介ページをリニューアルしました。オフィス、ホテル、商業施設、公共エクステリア空間などの施工事例がさらに充実し、建築用途や空間別での検索と併せて、LIXIL製品や竣工時期からも検索が可能です。

今後も順次事例を掲載していく予定ですので、ぜひご覧ください。



施工事例 index

鎌倉学園 中学校・高等学校

創立100周年記念事業の一環として、鎌倉学園が全面リニューアルを実施しました。建物の外観は、次世代に受け継がれる未来像を“地層”で表現し、割肌、フラット、ボーダーの3種のタイルを組み合わせ、質実剛健な雰囲気を創出しています。タイルが持つ力強い味わいを基調に、荒い面と平滑な面の対比によって、校舎に温もりを感じさせています。



■建築概要■

所在地：神奈川県鎌倉市山ノ内110 | 規模：地上5階 | 設計：鹿島建設 | 施工：鹿島建設、タイル施工：不二窯業

佐賀市役所

佐賀市庁舎本庁舎の大規模な耐震改修工事が行われました。これに伴いエントランス前には新しくキャンビーが架けられ、建物に沿ってガラス屋根の通路シェルター「GK-A」が設置されました。ガラスで構成された開放的なエントランスまわりは、本庁舎のアクセントにもなって美しい景観を呈しています。



■建築概要■

所在地：佐賀県佐賀市栄町1-1 | 施主：佐賀市役所

南長野運動公園総合球技場

スポーツの振興と地域の活性化を目指し、J1基準(15,000人以上収容等)に対応した球技専用スタジアムが長野市に誕生しました。2階の男性・女性用トイレは、混雑時でもスムーズに利用できるよう、入り口から出口までを一方通行とし、さらにプースの使用状況が分かるサインを設置しています。



■建築概要■

所在地：長野県長野市篠井東福寺字上組北320 | 規模：地上4階 | 構造：RC造 | 工期：2014.12-2015.3 | 設計：竹中工務店・東畑建築事務所・北信土建・千広建設・アーキプラン共同企業体 | 施工：竹中工務店・北信土建・千広建設共同企業体

岩倉公園

立命館大学に隣接する岩倉公園は、災害発生時の一時避難場所としての機能を有する、緑豊かな防災公園です。そこにステンレス製の手すり「サポートレール1型」が採用され、階段を利用する多くの方の安全をサポートしています。



■建築概要■

所在地：大阪府茨木市岩倉町2-150 | 施主：茨木市役所

訂正とお詫び：本誌no.11の野田病院のバス停留所に採用されているスチール製シェルターの屋根は、ガラス製ではなくポリカーボネート製でした。訂正してお詫びいたします。

LIXILからのご案内

「第10回キッズデザイン賞」を受賞



左一採風・採光シャッター「エアリス マルチ電動」
右一内装機能建材「エコカラットプラス クシーノ」



「第10回キッズデザイン賞」(主催：特定非営利活動法人キッズデザイン協議会、後援：経済産業省、消費者庁)において、子どもの安全安心に配慮した設計や機能が評価され、LIXILの下記5商品がキッズデザイン賞を受賞しました。今回で10年連続の受賞となります。これからも子どもの安全安心に配慮し、生活する上で、快適で機能的な商品開発に取り組んでいきます。

■採風・採光シャッター「エアリス マルチ電動」
新構造の「フラップスラット」を開閉することで、シャッターを閉めたまま、室内にそよ風と優しい自然光を採り入れます。
■住宅用シャッターシリーズ「イタリヤ マルチ電動」
窓を開けなくても、リモコン操作だけでシャッター開閉が可能です。挟まれ事故の防止など安全性にも配慮しています。

■幼児用シャワーパン
シャワーパンの高さと形状を改良し、周辺への水はねを軽減。子どもの動線に沿って手すりを設け、自立動作をサポートします。
■幼児用バス
用途で使い分けできる、大小2種類の浴槽を備え、シャワー水栓のホースは子どもが足を引っ掛けにくい収納式です。

■内装機能建材
「エコカラット クシーノ」、「エコカラットプラス クシーノ」ホルムアルデヒドなどの有害な物質を吸着・低減。空気環境の影響を受けやすい子どもに、安全安心な空間を提供します。

LIXIL出版 新刊案内

http://www1.lixil.co.jp/publish/

LIXIL BOOKLET
「水屋・水塚 防水の知恵と住まい」
執筆：畔柳昭雄、高橋裕
定価：1,800円 [税別、好評発売中]

「TOKYO インテリアツアー」
執筆：浅子佳英、安藤僚子
定価：2,000円 [税別、好評発売中]

「建築家・坂本一成の世界」
執筆：坂本一成・長島明夫
定価：5,200円 [税別、好評発売中]

10+1 WEB SITE http://10plus1.jp/
建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

ギャラリー＋イベント

http://www1.lixil.co.jp/culture/

LIXIL ガラリー | 東京

巡回企画展

水屋・水塚——防水の知恵と住まい展
会期：開催中、11月26日[土]まで
人々の知恵を活かした「河川伝統技術」による水防建築類10種を、写真・模型で紹介いたします。



「段蔵」松村邸
【大阪府高槻市 | 写真：大西成明】

建築・美術展

【クリエイションの未来展——第9回清水敏男監修】
スピリチュアル・イマジネーション
神馬啓佑+宮田彩加+山上渡
会期：開催中、11月22日[火]まで



神馬啓佑
左一「& Belt」[アクリル絵の具、綿、木 | 24 × 168cm | 2016]
右一「nice to meet you」[アクリル絵の具、綿、木 | 24.5 × 16.8cm | 2016]
[写真2点とも：上野則宏]

【やきもの展】
大塚茂吉展——静寂なる振動
会期：開催中、10月31日[月]まで



「聖猫」[H51 × 16.5 × 29cm | 2016 | 写真：Giorgio Biserni]

市野雅彦展
会期：11月4日[金]—12月26日[月]
オープニングトーク
日時：11月4日[金]18:30-19:30

LIXIL ガラリー | 大阪

巡回企画展

WASHI——紙のみぞ知る用と美展
会期：開催中、11月22日[火]まで
“加工”の視点から捉えた和紙の造形文化と変幻自在な素材の魅力を、江戸から昭和初期の最盛期につくられた紙製品、約80点より紹介します。



修二会(しゅにえ)の紙衣(かみこ)
【所蔵：桂樹舎和紙文庫 | 写真：佐治康生】

INAX ライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと生活文化をつなぐ企画展

【INAXライブミュージアム10周年特別展】
つくるガウディ
会期：11月5日[土]—2017年3月31日[金]
入館料：共通入館料で企画展も観覧可
ものづくりの心を伝えてきた「INAXライブミュージアム」の10周年を記念し、建築家アントニオ・ガウディ[1852-1926]の建築を、人の手で“つくる”という視点から紐解く特別展覧会。

つくるガウディ——塗る、張る、飾る!
第1会場：土・どろんどろん館企画展示室
建築家・日置拓人、左官職人・久住有生、タイル職人・白石晋の3氏が、ガウディの未完の建築「コロニア・グエル」に着想した建築造形を制作。展覧会期中は、会場に土とタイルの建築が立ち上がる過程をご覧いただけます。
つくるガウディ——実測で読み解く
第2会場：世界のタイル博物館企画展示室
約40年にわたりガウディ建築をつぶさに実測し、手描きで記録してきた田中裕也氏の実測図面を展示します。



【LIXIL ガラリー | 東京】
所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL : GINZA 2階
Tel: 03-5250-6530
開館時間：10:00-18:00
休館日：水曜日、12月28日-2017年1月4日

【LIXIL ガラリー | 大阪】
所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20
グランフロント大阪南館タワーA 12階
Tel: 06-6733-1790
開館時間：10:00-17:00
休館日：水曜日(祝日は開館)、12月28日-2017年1月4日

【INAXライブミュージアム】
所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel: 0569-34-8282
開館時間：10:00-17:00
(入館は16:30まで)
休館日：第3水曜日(祝日の場合は翌日)、12月26日-2017年1月4日
共通入館料：一般：600円、高・大学生：400円、小・中学生：200円

人々には眩しく見えたであろうと想像できます。その後ポストモダンの時代になって、失ったものの大きさを知るようになり、近代化によって破壊された歴史的町並みの保存再生や、失われた地域性の復興が議論されました。(ジェイン) ジェイコブズのような市民運動が大きな潮流となり、また他方で、商業主義化したアイコン的ポストモダニズムが流行り、という歴史を思い起こすたびに、長谷川さんが書いておられた、最近ではコミュニティデザインか、もしくはオブジェデザインかの二極化が進んでいる、という指摘をあらためて思い出します。こういったポストモダニズム的価値観の中から、どのような新しい感受性が生まれ、どのように新しい時代につながつてゆくのでしょうか。

ガラス、コンクリートよりもむしろ、レングヤ木、土壁といった温かい仕上げ、地域性のある仕上げが望まれ、建築家もやりたがる、という流れが世界的に起きています。現に僕も、木造にはかつてよりも興味を持ち、仕上げも、ガラスよりも少し豊かでおもしろい材料があるのではないかと感じています。他方で、そういう発想から果たして新しい時代の建築が生まれるのか、とも思います。ガラスであれ土壁であれ、表現が建築のテーマであっていいのかな、という素朴な疑問もあります。長谷川さんほどのようにお考えでしょうか？

の場を始められたということが、素晴らしく感じました。フランク・ゲーリーは今、教育の機会を与えられない貧しい子供たちのために建築の学校を始め、また、刑務所をよりよい場所に変える運動を始めます。今さまざまな形で、既成の教育機関・文化施設の外で、次世代に向けた活動が顕著になっています。そこで今後の展望といえますか、これから若い人々に何を望むか、どういう時代を期待するか、ぜひお話し頂けないでしょうか？

西沢立衛様

にしざわ・りゅうえー建築家・横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授/1966年生まれ。1990年、横浜国立大学大学院修士課程修了、妹島和世建築設計事務所入所。1995年、妹島和世とSANAA設立。1997年、西沢立衛建築設計事務所設立。主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、森山邸[2005]※、ROLEXラーニングセンター[2009]、豊島美術館[2010]※、ルーヴル・ランス[2012]など(※以外はSANAA)。

西沢立衛様

西沢さんとの往復書簡も今回が最後となりました。楽しく続けさせていただき

ました。

HOUSE」を若い建築家の議論の場にしたいと考えて、この春から「gallery IHA」としてスタートさせています。私たちが若い頃は、同期の人たちとお酒を飲みながら話すとか、若い隈研吾さん、竹山聖さんなどが『SD』のコラムに書くために、私のアトリエによく来て一緒に議論するとか、多木浩二さんを中心に議論や学習をするということもあり

ました。倉俣史朗さん、高松次郎さんなど異分野の人とも議論する機会があり、建築についてミーティングをする場が開かれていました。

この頃、地方に出かけた時、ぜひ仕事を見て欲しいと若い建築家に言われ、いい仕事を見せていただきました。木構造の面白さを話されていたのですが、最後に批評を得る機会がないことを訴えられ

ました。ジャカルタにレクチャーに行った時も住宅建築を見て欲しいと何人かに誘われ、感激するほどの作品を見ました。その後、その時お会いした建築家や大学の先生たちが大勢で私のアトリエにミーティングにやってきました。経済のグローバル化の状況の中で住宅建築をつくる建築家は、これからどう立ち向かわべきかという内容の議論をしました。私はインドネシアの環境の中でアジアの建築をつくって世界に通じさせようと話したら、感激していました。

その時から日本の建築家は日本の建築をつくっているのだろうか、アジアの国としての建築をつくっているのだろうか

と考えるようになっていきます。若い建築家の多くは、自分の出身地や大都市郊外の建物のリフォームに関わっている人が多いようですが、大学に属していないとミーティングや作品発表の場はなかなか得られないようです。私は日本だけでなく、アジアの国々の若い建築家にもアジアの建築とは何かを考えしてもらい、それをもってオブジェクト建築をつくっている西欧によるグローバル化に対峙する人が出てくるのが大きな希望であり期待です。

私は以前から国内外で小学生と住宅のワークショップを何度もやってきました。「ようこそ先輩」というNHKのテレビの撮影で「湘南台文化センター」に行き、子供たちと広場でお弁当を食べて

いた時に、光の変化がよく分かって面白い場所だね、光が柔らかくて美しいねとか、地下の体育館ではサンクンガーデンを新しい地面のように感じるとか、喜びを表現していました。小学五年生が建築家よりいい批評を発してくれて本当に嬉しかったです。ですから「gallery IHA」では子供や身体障害者や高齢者の人たちのアート活動も展示してゆき、そうした無垢な人たちの考えも皆で知りたいと考えています。

春のレクチャーは「住宅建築を通して建築の先を考える」というタイトルで塚本由晴さんにキュレーターをお願いし、五人の若い建築家のレクチャーと作品展示を行いました。議論を繰り返して分かったのは、若い人たちが体験を通じて身体で感じ取り、地域に開かれた建築をつくっていることです。秋のレクチャーは北山恒さんにキュレーションをお願いし、「一九七〇年代の建築的冒険者と現代の遺伝子」というタイトルで五組の先輩建築家と若い建築家をセットで論じてもらう計画でいます。

西沢さんにキュレーションをお願いして、アジアの建築の追究というテーマでギャラリーのスタートを考えていました。お忙しいようなので諦めてしまいましたが、いつかぜひキュレーションをしていただきたく思っています。

私は小学生まで、美しい風景の残る環境で伝統的な生活をしていました。特に

寺育ちの母の振る舞いが好きでした。野花の絵を描き、テキスタイルのデザインにして着物や洋服をつくったり、四季のセレモニーのお月見などしっかりこなす生活でした。美しかった頃のことですが私の脳裏の奥にいつもあって、そうした生活空間を忘れられず今でも求めています。社会の変化に敏感になって建築の仕事をしてきたという思いがあります。改めて日本の、さらにアジアの美しい空間をつくってゆきたいと考えています。「第二の自然としての建築」という私のテーマも、この美しき田舎生活と根元で結びついています。

二〇一六年九月一日



レクチャー風景、「gallery IHA」にて[写真：吉田香代子]

長谷川逸子

はせがわ・いつこー建築家/菊竹清訓建築設計事務所勤務、東京工業大学篠原一男研究室を経て、1979年、長谷川逸子・建築計画工房設立、主宰。早稲田大学、東京工業大学、九州大学などの非常勤講師、米国ハーバード大学の客員教授などを務め、1997年、王立英国建築家協会名誉会員。2001年、ロンドン大学名誉学位。2006年、アメリカ建築家協会名誉会員。主な作品：大島町絵本館[1994]、新潟市民芸術文化会館[1998]、珠洲市多目的ホール[2006]、ふじのくに千本松フォーラム[2013]など。

長谷川さんは、若い人々に何を望みますか？
 長谷川さんは、若い人々に何を望みますか？
 どういう時代を期待しますか？

長谷川逸子様

暑い日が続きますが、いかがお過ごし

でしょうか？ 前回の「浜行き」のお話はたいへんインパクトがありました。といっても実は、浜辺の写真を拝見した時は、不思議な風景だ、というくらいの印象だったのですが、その後、長谷川さんのギャラリーで詳しくお話を聞きまして、驚きを新たにしました。春がきて、青い太平洋に黒い海が到来する風景、また、光る鯉の群れがやってきて、黒潮を食べて行く風景、浜辺から眺める人々、どれも自然なこととはいえ、この世のものと思えないというか、まるで神話のようだと感じました。あえて人々が正装して出かけていくのも、黒潮をただ

の観光物ではなく、神聖なものともみなして、自然への畏怖を感じました。その後、砂浜が港に作り変えられることで「浜行き」自体もなくなったという近代化の歴史も、たいへん示唆的なものでした。

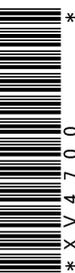
今の私たちの時代は、当時の焼津の人々が正装して出かけたような、春の黒潮にあたるものを果たして持ち得ているかと思うと、考え込んでしまいます。もしかしたら地震や津波、台風といった自然の脅威は、災害でありながら、同時に神聖なものでもあるのだろうか、と思ったりもします。「浜行き」のような、大自らの営みを私たちが畏敬し祝福するようなことが、私たちの生活にもまだ残っているのか、もし残っているとしたらそれは今後どうなっていくのか、気になるところです。

もうひとつ「浜行き」の話を聞きつつ

思うのは、自分たちがポストモダン的な価値観の中にいるということです。近代化の只中では、砂浜をコンクリートの港に作り変えることは、少なくとも当時の



「木の衝立」(展覧会:「木のパーティション」(オカムラ ガーデンコートショールム)2016.7.20-8.5)



LIXIL

Link to Good Living

株式会社 LIXIL

XV4700 | 01 | 2016.10.20 発行